博士論文

中国語を母語とする日本語学習者における条件表現の誤用に関する研究
－「と」「ば」「たら」「なら」を中心に－

杜　紅陽

広島大学大学院人間社会科学研究科
国際教育開発プログラム

2024 年 9 月

中国語を母語とする日本語学習者における条件表現の誤用に関する研究
－「と」「ば」「たら」「なら」を中心に－

D204593

杜　紅陽

広島大学大学院人間社会科学研究科
国際教育開発プログラム
博士論文
2024 年 9 月

広島大学大学院人間社会科学研究科
国際教育開発プログラム

論　文　名:　中国語を母語とする日本語学習者における条件表現の誤用に関する研究
－「と」「ば」「たら」「なら」を中心に－

学位の名称:　博士（学術）
学 生 番 号:　D204593
氏　　名:　杜　紅陽

2024 年　7 月　29 日

審査委員会

委員長・教授
佐藤　暢治　佐藤暢治

教授
高永　茂　高永茂

教授
荒見　泰史　荒見泰史

関西学院大学
大学院言語コミュニケーション文化研究科　教授
于 康　于康

2024年　9 月　5 日
研究科長　印

目次

第 1 章　序論 1
1.1　研究目的 1
1.2　研究の意義 3
1.3　研究資料と研究方法 3
1.3.1　研究資料 3
1.3.2　研究方法 4
1.4　用語の説明 5
1.4.1　誤用、誤用類型、誤用傾向 5
1.4.2　混用、不使用、過剰使用 5
1.4.3　条件表現、条件文、条件表現に関わる誤用、条件表現の誤用 6
1.5　本研究の構成 6
第 2 章　先行研究 8
2.1　「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法に関する先行研究 8
2.1.1　「と」「ば」「たら」「なら」の用法分類に関する先行研究 8
2.1.2　「と」「ば」のモダリティ制約に関する先行研究 9
2.1.3　事実条件を表す「と」「たら」に関する先行研究 10
2.1.4　主題、対比を表す「なら」に関する先行研究 11
2.1.5　「と」「ば」「たら」「なら」の特徴に関する先行研究 13
2.1.6　使用場面による使い分けに関する先行研究 14
2.2　「と」「ば」「たら」「なら」と他の表現との類似関係に関する先行研究 14
2.2.1　テ形との類似関係に関する先行研究 14
2.2.2　逆接条件表現「ても」との類似関係に関する先行研究 16
2.2.3　時間表現との類似関係に関する先行研究 17
2.2.4　「なら」と「は」との類似関係に関する先行研究 19
2.3　中国語の複文及び日中対照言語学に関する先行研究 20
2.4　「と」「ば」「たら」「なら」の習得及び誤用に関する先行研究 22
2.4.1　「と」「ば」「たら」「なら」の習得に関する先行研究 22
2.4.2　「と」「ば」「たら」「なら」の誤用に関する先行研究 25
2.5　先行研究の問題点と課題 27
第 3 章　条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用実態概観 29
3.1　条件表現に関わる誤用の全体像 29
3.2　条件表現の混用「*X→Y」の詳細 31
3.2.1　条件節の述語使用に関わる誤用 31

3.2.2　非条件的用法に関わる誤用 32
3.2.3　条件的用法に関わる誤用 32
3.3　条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用実態 33
3.3.1　条件表現間での混用 34
3.3.2　他の表現との混用 35
3.3.2.1　テ形との混用 36
3.3.2.2　逆接条件表現「ても」との混用 37
3.3.2.3　時間表現との混用 37
3.3.2.4　条件表現の二重使用 37
3.3.2.5　「は」との混用 38
3.4　まとめ 38
第4章　「と」「ば」「たら」の間の混用に関する考察 40
4.1　はじめに 40
4.2　「*ト→タラ」「*ト→バ」に関する分析と考察 42
4.2.1　「*ト→タラ」の誤用実態と傾向 42
4.2.1.1　「*ト→タラ」の誤用例 42
4.2.1.2　「*ト→タラ」の誤用傾向 43
4.2.2　「*ト→バ」の誤用実態と傾向 45
4.2.2.1　「*ト→バ」の誤用例 45
4.2.2.2　「*ト→バ」の誤用傾向 46
4.2.3　「*ト→タラ」「*ト→バ」の誤用要因 47
4.3　「*タラ→ト」「*タラ→バ」に関する分析と考察 50
4.3.1　【論文】での誤用 50
4.3.1.1　「*タラ→ト」の誤用例 50
4.3.1.2　「*タラ→バ」の誤用例 51
4.3.1.3　【論文】での誤用のまとめ 52
4.3.2　【作文】での誤用 52
4.3.3　「*タラ→ト」「*タラ→バ」の誤用要因 54
4.4　「*バ→ト」に関する分析と考察 55
4.4.1　「*バ→ト」の誤用例 55
4.4.2　【論文】での誤用 56
4.4.3　【作文】での誤用 57
4.4.4　「*バ→ト」の誤用要因 58
4.5　まとめ 59
第5章　「と」「ば」「たら」とテ形との混用に関する考察 62
5.1　はじめに 62

5.2 「*ト→テ」に関する分析と考察 63
5.2.1 「*ト→テ」の誤用例 64
5.2.2 「*ト→テ」の誤用傾向 65
5.2.3 「*ト→テ」の誤用要因 66
5.3 「*タラ→テ」に関する分析と考察 67
5.3.1 「*タラ→テ」の誤用例 67
5.3.2 「*タラ→テ」の誤用傾向 68
5.3.3 「*タラ→テ」の誤用要因 69
5.4 「*バ→テ」に関する分析と考察 70
5.4.1 「*バ→テ」の誤用例 70
5.4.2 「*バ→テ」の誤用傾向と要因 71
5.5 まとめ 72
5.5.1 テ形との混用から見た誤用傾向と要因 72
5.5.2 学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方 73
5.5.3 学習者における条件の捉え方 74
第6章 「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用に関する考察 77
6.1 はじめに 77
6.2 「*X→テモ」に関する分析と考察 77
6.2.1 「*X→テモ」の誤用実態 78
6.2.2 「*X→テモ」の誤用要因 79
6.3 「*X→時間表現」に関する分析と考察 82
6.3.1 「*X→時間表現」の誤用実態 82
6.3.2 「*ト→ルトキ」の誤用要因 84
6.3.3 「*タラ→テカラ、タトキ」の誤用要因 85
6.4 条件表現の二重使用に関する分析と考察 87
6.4.1 条件表現の二重使用の誤用実態 87
6.4.2 日本語母語話者の使用状況 88
6.4.3 条件表現の二重使用の誤用要因 90
第7章 「なら」と「ば」「たら」及び「は」との混用に関する考察 92
7.1 はじめに 92
7.2 「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」に関する分析と考察 93
7.2.1 「*ナラ→バ」の誤用実態と傾向 93
7.2.2 「*ナラ→タラ」の誤用実態と傾向 94
7.2.3 「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」の誤用要因 96
7.3 「*ナラ→ハ」に関する分析と考察 98

7.3.1　「*ナラ→ハ」の誤用実態と傾向 98
7.3.2　「*ナラ→ハ」の誤用要因 98
7.4　まとめ..... 100
第8章　結論 102
8.1　本研究のまとめ..... 102
8.1.1　「と」「ば」「たら」の間の混用における傾向と要因 102
8.1.2　「と」「ば」「たら」とテ形との混用における傾向と要因 104
8.1.3　「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用における傾向と要因..... 105
8.1.4　「なら」と「ば」「たら」及び「は」との混用における傾向と要因 105
8.2　学習者における条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方..... 106
8.3　今後の課題..... 108
参考文献 109
謝辞 115

図の目次

図 2-1　苏(2018)による「と」「ば」「たら」「なら」の習得過程 25
図 3-1　条件表現の誤用類型 29
図 3-2　条件表現の混用「*X→Y」の内訳 31
図 4-1　「と」「ば」「たら」の間の混用の詳細 40
図 4-2　「*ト→タラ」「*ト→バ」のまとめ 47
図 4-3　石川(2013:56)による日本語母語話者における「と」の捉え方 48
図 4-4　日本語母語話者と学習者における「と」の捉え方(仮説・一般条件など) ... 49
図 4-5　「と」「ば」「たら」の間の混用から見た誤用傾向と要因 60
図 5-1　「と」「ば」「たら」とテ形との混用の詳細 62
図 5-2　鈴木(1986:53)による日本語母語話者における「と」の捉え方(連続・きっかけ) 66
図 5-3　テ形との混用から見た学習者における「と」の捉え方(連続・きっかけ) ... 67
図 5-4　学習者における「たら」の捉え方 70
図 5-5　「と」「ば」「たら」とテ形との混用から見た誤用傾向と要因 73
図 6-1　2 つの条件と結果の関係－日本語母語話者 89
図 6-2　2 つの条件と結果の関係－学習者 90
図 7-1　学習者における「なら」の捉え方 101
図 8-1　「と」「ば」「たら」の間の混用から見た誤用傾向と要因 103
図 8-2　「と」「ば」「たら」とテ形との混用から見た誤用傾向と要因 104
図 8-3　学習者における「なら」の捉え方 106

表の目次

表 2-1　前田(2009:40)による条件表現の分類及び 4 形式の使用可否 9
表 2-2　先行研究における事実条件を表す用法の分類と構文的特徴 12
表 2-3　連続を表す「と」と継起を表すテ形の類似点と相違点 16
表 2-4　「と」「たら」と「とき」の相違点 18
表 2-5　葉(2009)による「たら」「てから」の類似点、相違点及び交換可否 18
表 2-6　「なら」と「は」の相違点 20
表 2-7　邢(2001)による中国語の複文の分類 21
表 2-8　郭(2017)による学習者が理解しなかった点 24
表 2-9　市川(1997、2010)による指導ポイント 26
表 3-1　条件表現間での混用と他の表現との混用の内訳 33
表 3-2　条件表現間での混用の内訳 34
表 3-3　他の表現との混用の内訳 36
表 4-1　文章のジャンル別に見る「*タラ→ト」「*タラ→バ」の詳細 50
表 5-1　学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方 74
表 6-1　「*X→テモ」の詳細 78
表 6-2　「*X→時間表現」の詳細 83
表 7-1　「*ナラ→バ」における前件後件の述語使用 94
表 8-1　学習者における「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方 107

第１章　序論

1.1　研究目的

複文の中で、後件の成立について前件が何らかの関係で条件となっていることを表す表現を条件表現(三井 2002:85)という。日本語の代表的な条件表現として「と」「ば」「たら」「なら」の４形式が挙げられる。「と」「ば」「たら」「なら」は、日本語教育において初級レベルで導入されるが、細かい使い分けがあるため、益岡(1993a)で述べられているように、日本語学習者にとって難しい学習項目とされている。

> 日本語の条件表現の研究は、日本語文法研究における重要課題の一つとして大きな関心が寄せられてきた。その背景には、条件表現に関して日本語が他の言語にはあまり見られない多様な類義表現を有しているという事実がある。すなわち、条件節(条件表現の前件を表す節)が「～れば」、「～たら」、「～なら」、「～と」等の多様な形式で表され、しかも、これらの形式の間には、微妙な使い分けが見られるのである。このような状況のもとでは、日本語の条件表現は外国語の目から見ると理解しがたいものとなろう。日本語学習者にとって条件表現の習得が困難であるのは、無理からぬことであると言える。(益岡 1993a:1)

中国語を母語とする日本語学習者は「と」「ば」「たら」「なら」を使用するとき、誤用がしばしば見られる。例えば、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.12(以下、『YUK 作文コーパス』と略す)には、次のような「と」「ば」「たら」「なら」の間の混用が認められる。(誤用例の表記として、「<__>」は誤用の箇所、「*」は誤用であること、「→」は訂正された結果を示す。)

(１)現実を<*考えないと→考えなければ>、私は通訳者になりたいです。自分の専門なので、その専門を発揮したいです。
(２)小さい時から、いつも両親は私に「大人に<*なると→なったら>、どんな人になりたい」と聞いて、私は迷って考え込んでしまいました。
(３)実は私は仕事に対して情熱的なタイプですが、日本で生活する<*と→なら>、やはり良妻賢母の専業主婦も悪くないと思います。
(４)前書きの著者との対話を<*見れば→見ると>、J.BRIDGE には二つの意味があると考えられる。
(５)このことを知って、私は、とても怒りました。「まだ一歳ですよ、母親に<*なれば→なったら>、とても大変です」と言いました。思った通り、花はすぐ痩せてしまいました。

（6）大学に入ったあと、先生は日本語を〈*習えば→習うなら〉、クラブにも参加しないほうがいいと言いました。ほかの学科より日本語のほうがかかる時間が長かったです。

（7）しかし、日本語、中国語、英語を調べ〈*てみたら→てみると〉、英語名詞句は他動詞能動文における対格が受身文において主格の位置に移動しない現象が殆ど見受けられない。

（8）それゆえ、言語を習うとき、社会文化の背景を無視〈*したら→すれば〉言語の肝心なものを把握し損なう。

（9）もし日本から何かを〈*学んだら→学ぶなら〉、それはまず自然への畏敬する態度、土地に対する節約する態度を学ぶと思います。

(10)もう一つは、「団結就是力量」という諺の正当性です。心を一つにし、力を合わせる〈*なら→と〉、なんでもできます。

(11)いろいろな分野、専攻があり、様々な業績、会社があります。それらのすべてが、私たち自分自身で〈*選択しないなら→選択しなければ〉ダメだと思います。

(12)やっぱり、常に体を鍛えなくてはだめだと分かった。つまり、若いうちによく登山のような運動を〈*するなら→したら〉、体にずいぶんよいと思う。

「と」「ば」「たら」「なら」の間の混用は、数字の上では 12 種類を考えることができるが、（1）-(12)に示したように、その 12 種類全てが観察される。それに加え、テ形、「ても」、「とき」といった表現との混用も認められる。(13)-(15)にその例を示す。

(13)中国でも学校が爆破されたことがあるけど、身近ではなかったから、新聞で〈*見たら→見て〉、「そうか」としか言わなかった。今回はうちの学校なので、やはり怖い。

(14)契約を読みそして検査することはあまりしません。第三は契約の知識を学ぶことです。契約を読みたいけど、〈*読めば→読んでも〉なかなか分からないという人は絶対少なくないと思います。

(15)私が大好きな季節はエアコンをつける季節だ。春みたいな季節にしたい〈*と→時は〉、16 度で加湿にする。夏みたいな季節にしたい〈*と→時は〉、30 度で加湿にする。

このように、学習者が誤って使用した「と」「ば」「たら」「なら」の誤用は多岐にわたっている。「と」「ば」「たら」「なら」の誤用を整理したうえで、誤用実態と傾向を掴み、なぜ誤用が生じるのかを考察することが必要である。近年、条件表現に関わる誤用を扱った先行研究として、市川(1997、2010)、孟(2015、2017、2021)、庵(2017)、廖(2023a、2023b)などが見られるが、いずれも断片的なものである。管見の限り、学習者が誤って使用した「と」「ば」「たら」「なら」の誤用を体系的に論じる研究はまだない。

本研究の目的は、『YUK 作文コーパス』を資料とし、学習者が誤って使用した「と」

「ば」「たら」「なら」の誤用に焦点をあて、どのような誤用がなぜ生じるのかについて分析と考察を行ったうえで、学習者における捉え方を明らかにすることにある。

1.2　研究の意義

学習者を対象とする研究は、通言語的なものと個別言語的なものに分けられる。通言語的な研究は、母語の異なる日本語学習者間における学習問題の共通点と相違点を明らかにする。しかしその半面、特定の言語を母語とする日本語学習者を悩ませる学習問題については深く追求せずに済まされることがしばしばある。それに対し、個別言語的な研究は、当該言語を母語とする日本語学習者が直面する学習問題や、当該言語と日本語の関わりなどを詳しく探ることが可能となる。そして、誤用を分析することで、学習問題のみならず、それに基づいた指導方法の改善も可能となり、「誤用分析によって明らかになったことを教育の場で生かすための方策(例えば、新しい教育方法や教材)を提示する」(長友・迫田 1988:145)ことも可能となる。

本研究の意義として、次の 2 点を挙げることができる。第一の意義は、本研究が個別的な誤用現象にとどまらず、「と」「ば」「たら」「なら」の誤用を体系的に論じることである。本研究は、大型コーパスを資料とし、多様な角度から学習者における「と」「ば」「たら」「なら」の誤用傾向と要因を考察する。このことは、先行研究の不足を補うことができる。第二の意義は、中国語を母語とする日本語学習者に限定するため、彼らが条件表現「と」「ば」「たら」「なら」をどのように捉えているのかを深く追求することができることである。そうすることで、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」に関する指導方法の改善などにも貢献できると考えられる。

1.3　研究資料と研究方法

1.3.1　研究資料

本研究は、『YUK 作文コーパス』を研究資料とする。『YUK 作文コーパス』[1]は、関西学院大学于康研究室によって構築された、ファイル数 5,044、文字数 660 万、誤用タグ数 22 万の大型作文コーパスである。そこに収集された作文は、56 校の大学から集められた中国語を母語とする日本語学習者(学部生、大学院生、日本語教員を含む。以下、「学習者」と略す)が書いた作文に基づき、日本語教育の経験がある日本語母語話者 2 名によって添削されたものである。文章のジャンルについては、「感想文、研究計画書、レポート、宿題、メール、翻訳、外交通訳の録音資料、卒業論文、修士論文、といった文章化されたもので、話し言葉の記録ではないもの」(于 2012:36)である。そして、タグについては、性別、学年、日本語学習歴、滞日年数などの基本情報タグや、誤用の類型、品詞、校閲者に

[1] 日本語誤用と日本語教育学会ホームページ:http://yukang.org/index1.html.(最終参照日:2024 年 7 月 1 日)

よる訂正結果などの正誤タグが付与されている。現時点(2024 年 7 月)では Ver.12 に更新されている。

『YUK 作文コーパス』は、量的に膨大な日本語誤用データを有し、それを用いる研究は個別的な誤用現象を記述するにとどまらず、誤用の一般化的な傾向や要因を突き止めることができるという優れたところがある。条件表現「と」「ば」「たら」「なら」を例にすると、庵(2017)は、『タグ付き KY コーパス』[2]を用いて調べた結果、「誤用」と言えるものは極めて少ない、顕著な誤用はないと述べている。このような結果が得られたのは、OPI(外国語学習者のための口頭能力試験 Oral Proficiency Interview)を基準としたもの、すなわち、『タグ付き KY コーパス』の性質にも関わるが、データ量が少ないことが要因であろう。そのため、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用を体系的に考察するには、膨大なデータを有するコーパスが不可欠である。

そして、『YUK 作文コーパス』は学習者の誤用を全て網羅するものではないが、「非根幹の現象を濾過し、根幹に関わる誤用だけに絞り、誤用の原因について、ケースバイケースといった個別の研究ではなく、数多くの誤用例からパターン化されたデータを中心に典型性を有する規則性を見出し、日本語教育現場に還元できる一般化を求めなければならない」(于 2011:92-93)という点から、『YUK 作文コーパス』は非常に有意義な研究資料である。また、『YUK 作文コーパス』は文章のジャンルが限定されていないため、テーマの広さ、文章スタイルの豊富さという点においても優れている。

他方で、『YUK 作文コーパス』には限界もある。それは、作文の添削やタグの付与は、日本語教育の経験がある日本語母語話者によるものであり、信憑性が高いとは言え、「日本語母語話者によって判断が異なるし、答えも必ずしも一つではないことや、添削した文が作者の意思を十分に表現しきれないこともある」(于 2011:81)といった点である。それに加え、作文コーパスであるため、話しことばの状況を論じることはできないという問題点もある。さらに、学習困難とされる項目は、学習者によって使用されないこと、いわば学習者がその使用を回避することも考えられるが、『YUK 作文コーパス』からはそのような回避の問題を取り出すことはできない。

1.3.2 研究方法

于(2011:81)によって指摘された問題点を考慮に入れ、本研究は、学習者が誤って使用

---

[2] 『タグ付き KY コーパス』は、中国語、英語、韓国語を母語とする日本語学習者それぞれ 30 名ずつを対象に合わせて 90 名分の OPI 音声データを文字化した言語資料である。その 30 名の OPI 判定結果別の内訳は、それぞれ、初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名である。(日本語 OPI 研究会ホームページ:https://www.opi.jp/resources/corpora/. 最終参照日:2024 年 7 月 1 日)

『タグ付き KY コーパス』の規模について、鎌田(2006:43)は、OPI のインタビューにかかる時間の大半が 20～30 分で総数 90 名分であるところから、中間の 25 分×90 名で概算し、『タグ付き KY コーパス』は総時間 2,250 分ほどの音声データを文字化したものといえると述べている。そして、李在鎬(2019)は、UniDic の短単位を基準に計算した結果、延べ語数(形態素)が 189,422 であると述べている。

した条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用に注目し、以下の手順で分析と考察を行いたい。

① 『YUK作文コーパス』を用い、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」に関わる誤用を全て抽出し、そして、その中から、何らかの条件を表す(いわゆる「条件的用法」(前田2009)に関わるもの)、なおかつ、学習者が誤って使用したものを抽出する。
② 誤用数の多い誤用パターンを中心に、どのような誤用傾向があるのかを分析し、なぜ誤用が生じるのかを考察する。
③ 最後に、4形式の誤用を総括的に考察し、学習者における条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方を明らかにする。

1.4 用語の説明

1.4.1 誤用、誤用類型、誤用傾向

外国語を使うとき、学習者は様々な誤りをおかす。日本語教育現場でそのような誤りを「誤用」と呼ぶことが多いが、本研究では、誤用、誤用類型、誤用傾向という用語を用いる。それぞれの用語を以下のように定義する。

「誤用」:

于(2012:34)に従い、「『誤用』とは、『中間言語(interlanguage)』における目標言語話者の殆どが統語論的なおかつ意味論的に加え、語用論上容認困難な言語表現のことである」と定義する。誤用か否かに関する判定は『YUK 作文コーパス』に従う。

「誤用類型」:

『YUK 作文コーパス』における誤用は、混用(「*X→Y」)、過剰使用(「*X→○」)、不使用(「*○→X」)に分けることができる。この 3 類型を誤用類型と呼ぶ。

「誤用傾向」:

学習者の誤用に観察される、特定の方向に傾いた形式的・意味的な傾向を指す。

1.4.2 混用、不使用、過剰使用

混用、過剰使用、不使用は次のように定義する。

混用:

「*X→Y」(X=「と」「ば」「たら」「なら」): 「と」「ば」「たら」「なら」以外の表現がふさわしいにもかかわらず、学習者がその 4 形式のいずれかを使用することによって生じた誤用。

「*X→Y」（X≠「と」「ば」「たら」「なら」、Y＝「と」「ば」「たら」「なら」）：「と」「ば」「たら」「なら」のいずれかがふさわしいにもかかわらず、学習者がその4形式以外の表現を使用することによって生じた誤用。

不使用：

「*○→X」（X＝「と」「ば」「たら」「なら」）：「と」「ば」「たら」「なら」を使用する必要があるにもかかわらず、学習者が使用しないことによって生じた誤用。

過剰使用：

「*X→○」（X＝「と」「ば」「たら」「なら」）：「と」「ば」「たら」「なら」を使用してはならないにもかかわらず、学習者が使用することによって生じた誤用。

1.4.3　条件表現、条件文、条件表現に関わる誤用、条件表現の誤用

条件表現は本章の冒頭で述べたように、「後件の成立について前件が何らかの関係で条件となっていることを表す」（三井 2002:85）表現であるが、本研究では、「と」「ば」「たら」「なら」の 4 形式を指す。条件文は、仮説条件文、反事実条件文、一般条件文のように、条件を表す文の全体について述べるときに用いる。

条件表現に関わる誤用は、学習者が条件表現を使用したり、校閲者によって条件表現に訂正されたり、条件表現に関わる誤用の全てを指す。条件表現の誤用は、狭義的に、条件的用法に関わるもの、なおかつ、学習者が「と」「ば」「たら」「なら」を誤用したもの（すなわち、「*X→Y」（「*X」＝「と」「ば」「たら」「なら」））を指す。

1.5　本研究の構成

本研究は 8 章で構成され、各章の詳細は以下のようである。

第 1 章は序論であり、本研究の研究目的、研究の意義、研究資料、研究方法などについて述べる。

第 2 章では、先行研究を概観する。具体的には、「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法に関する先行研究、「と」「ば」「たら」「なら」と他の表現との類似関係に関する先行研究、中国語の複文及び日中対照言語学に関する先行研究、「と」「ば」「たら」「なら」の習得及び誤用に関する先行研究を整理したうえで、問題点を指摘し、残された課題について述べる。

第 3 章では、『YUK 作文コーパス』から抽出された条件表現「と」「ば」「たら」「なら」に関わる誤用を整理したうえで、研究対象を「条件的用法に関わるもの、なおかつ、学習者が条件表現『と』『ば』『たら』『なら』を誤って使用したもの」とする理由を述べるとともに、誤用実態を概観する。

第 4 章では、「と」「ば」「たら」の間の混用について分析と考察を行い、どのような誤

用傾向が見られるのか、なぜそのような誤用が生じるのかについて論じる。

第 5 章では、「と」「ば」「たら」とテ形との混用について分析と考察を行い、誤用傾向と要因を明らかにしたうえで、学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方と条件の捉え方について論じる。

第 6 章では、「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用について論じ、多角的に条件表現の誤用を見ることで、学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方を検証し、第 4 章と第 5 章で論じたもの以外に何か要因があるのかについて論じる。

第 7 章では、「なら」と「ば」「たら」及び「は」との混用について分析と考察を行い、誤用傾向と要因を明らかにしたうえで、学習者における「なら」の捉え方を明らかにする。

第 8 章では、第 4 章から第 7 章の内容をまとめたうえで、総括的に考察を行い、結論を述べる。最後に、今後の課題について述べる。

第 2 章　先行研究

本章では、先行研究を概観する。2.1 節では、「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法に関する先行研究を整理する。2.2 節では、「と」「ば」「たら」「なら」と他の表現との類似関係に関する先行研究を見る。2.3 節では、中国語の複文及び日中対照言語学に関する先行研究を見る。2.4 節では、「と」「ば」「たら」「なら」の習得及び誤用に関する先行研究を取り上げる。2.5 節では、先行研究の問題点及び残された課題について述べる。

2.1　「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法に関する先行研究

本節では、まず、本研究で用いる 4 形式の用法分類を示す。次に、「と」「ば」「たら」「なら」について多く議論されてきた「と」「ば」のモダリティ制約、事実条件を表す「と」「たら」、主題、対比を表す「なら」、「と」「ば」「たら」「なら」の特徴、使用場面による使い分けに関する先行研究を取り上げる。

2.1.1　「と」「ば」「たら」「なら」の用法分類に関する先行研究

本研究は、伝統的な国文研究(大槻 1897、松下 1930 など)や歴史的変遷を見る研究(阪倉 1993、小林 1996、矢島 2013 など)とは異なり、学習者の誤用に焦点をあてたものである。そのため、ここでは現代日本語における「と」「ば」「たら」「なら」の用法分類を概観する。その代表的な研究として、国立国語研究所(1964)、益岡・田窪(1992)、庵(2001)、中島(2007)、日本語記述文法研究会(2008)、前田(2009)が挙げられる。

国立国語研究所(1964)は、条件を表す客観的用法を大まかに捉えたものであるが、「前件のおこる『時』」に関する視点及び条件の周辺にある前おきなどの用法に関する考察は、それ以降の研究に大いに示唆を与えている。益岡・田窪(1992)は前件後件の依存関係を重要視したものであり、庵(2001)は真偽命題を重要視したものである。中島(2007)は、事実条件を表す「と」の構文的特徴について詳しく述べたうえで、対照言語学の立場から日中の条件表現について論じている。日本語文法記述研究会(2008)は、条件文の分類を中心に、「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法を述べている。そして、前田(2009)は、事態と言語の関係「レアリティー」という新しい視点を提示している。

「と」「ば」「たら」「なら」の用法は、研究者によって定義や分類基準に違いがあるが、いずれも説得力があるものに違いない。その中で、近年注目を集めているのは、日本語文法記述研究会(2008)と前田(2009)である。両者を見ると、用語の使用も条件文の分類も類似したところが多いが、前田(2009)によって提唱された事態と言語の関係「レアリティー」は学習者の誤用を見るうえで非常に役立つものである。さらに、前田(2009)は、用法分類のみならず、「と」「ば」「たら」「なら」の使用可否や使い分け(その詳細は表 2-1 に示す)も細かく論じている。したがって、本研究は、前田(2009)の分類に従い分析と考察を行う。

表 2-1　前田(2009:40)による条件表現の分類及び 4 形式の使用可否

					レアリティー					
					前件	後件	なら	ば	たら	と
条件的用法	仮定的	反事実		事実的	事実	反事実	○	×	×	×
					反事実	反事実	○	◎	◎	■
		仮説			仮説	仮説	◎	◎	◎	○
				事実的	事実	仮説	○	○	○	○
	非仮定的	多回的	一般・恒常		(不問)	(不問)	×	◎	■	◎
			反復・習慣		事実	事実	○	◎	■	◎
		一回的	様々な状況	連続			×	△	△	◎
				きっかけ			×	○	◎	◎
				発現			×	△	◎	◎
				発見			×	○	◎	◎

◎＝使用が十分に可能

○＝一定の用例があり、使えると判断できる

■＝不可能ではないが、用例はほとんどない

△＝近い用例はあるが、制限がある

×＝使えない

ただし、「事実的な仮説条件文」と「仮説的用法」、「事実的な反事実条件文」と「反事実的用法」は前件が事実的かどうかをもとにした細分類にすぎないため、学習者の誤用を見るときには、前者を「仮説条件文」と呼び、後者を「反事実条件文」と呼ぶ。そして、「様々な状況」という用語の代わりに、日本語文法記述研究会(2008)が使用する用語「事実条件文」を援用する。また、本研究は、何らかの条件を表す「と」「ば」「たら」「なら」の誤用について論じるものであるため、条件表現形式をとりながら条件を表さない非条件的用法の整理を省略する。

2.1.2　「と」「ば」のモダリティ制約に関する先行研究

「と」「ば」の文末に願望、命令などのモダリティを使用してはいけないという制約があることは、久野(1973)、稲葉(1990)、前田(1995)、堀(2004a)、ソルヴァン・前田(2005)など、多くの先行研究に指摘されている。

久野(1973)は、「と」のモダリティ制約について、「S1[＝前件]ト S2[＝後件]」は習慣的・必然的な先行条件・結果の関係を表すが、命令、要求、決意を表すことができないと論じている。稲葉(1990)は、「と」は「事実文」(描写文)のみが許容され、「ば」は前件述語が動作性の場合「事実文」しか表せないが、状態性の場合「意志文」「希望文」「命令文」「依頼文」「忠告文」も表せると指摘している。そして、前田(1995)は、前件と後件の主

体が異なる場合には働きかけや表出の表現も「ば」条件文に現れることができると主張している。堀(2004a)は、日本語母語話者に対する適格性判断調査に基づき、次を指摘している。①多くの場合は「ば」条件文の文末に断定、推量、判断を表す表現が来ること。②前件が状態性の述語、無意志動詞と他動性の低い動詞の場合は、相手に対する価値判断や弱い働きかけ(依頼)なども可能であること。③無意志動詞と他動性の低い動詞の場合でも、命令、禁止のような強い働きかけや相手の意志に関わる勧誘・意志が来ることができないこと。一方、ソルヴァン・前田(2005)は、前件述語が動作性で主節末のモダリティが表出や働きかけである場合にも許されることがあり、それは「ば」条件文が誘導推論の解釈、交換条件の解釈や時間的な解釈などに関連すると論じている。

このように、「と」は、モダリティ制約を受け、文末に願望、依頼、命令、意志などのモダリティは現れない。しかし、「ば」は、前件が動作性述語の場合には「と」と同様にモダリティ制約を受けるが、前件が状態性述語、無意志動詞と他動性の低い動詞の場合や前件後件が異主体の場合には緩和される。

2.1.3　事実条件を表す「と」「たら」に関する先行研究

事実条件を表す「と」「たら」に関する先行研究として、久野(1973)、豊田(1978、1979a、1979b、1982、1983)、蓮沼(1993)、中島(2007)、日本語記述文法研究会(2008)、前田(2009)、宮部(2011、2017)などを取り上げる。

久野(1973)は、「と」「たら」が過去の出来事を表すときの制約について指摘している。具体的には、「S1[＝前件]ト S2[＝後件]」には、「S1 と S2 の表す出来事は同じ観察者が同じ場所で観察できるものでなければならない」「S2 は聞き手にとって新しいインフォメーションでなければならない」「S2 は観察者が客観的に観察し報告し得る出来事を表していなければならない」などの制約がある。そして、久野(1973)は、「S1 タラ S2」について、「S1 が完了してから S2 が起こる」と「たら」の時間的前後関係を指摘したうえで、過去の出来事を表す場合に、「S1 が表す動作・出来事と、S2 が表す動作・出来事との間に、意図的・計画的な時間的前後関係があってはならない」と指摘している。

豊田(1978、1979a、1979b、1982、1983)は、連続を表す「と」、発見をみちびく「と」、後件の行われる時を表す「と」、後件の行われるきっかけを表す「と」、因果関係を表す「と」という 5 つの用法について論じたうえで、構文的特徴を提示している。

蓮沼(1993)は、事実条件を「発見」「発現」「時」「反応」「連続」の 5 つの用法に分け考察し、「と」は「前件の事態が成立した状況における、後件の事態の成立、あるいはそれに対する認識の成立を、話し手が外部からの観察者の視点で語る場合に使用される」と指摘している。そして、「たら」には連続の用法がないと主張したうえで、「たら」の特徴について、「前件の事態が成立した状況において、後件の事態を話し手が実体験的に認識するといった関係を表す場合に使用される」と述べている。

中島(2007)は、「と」の用法として一般条件、継起、発見、きっかけ、「トキ」、過去の

習慣を提示し、それぞれの構文的特徴を示し、「と」とテ形の互換性の有無について論じている。その結果として、テ形は、継起、同時進行、様態、手段・方法という順序で前件後件の緊密度が高くなり、それにつれて「と」と交換できる許容度が低くなる。

宮部(2011、2017)は、事実条件[1]を「連続」「きっかけ」「認識・発見の状況」に分けている。そして、「と」については、従属節と主節が「同時・直前」の時間的関係にあることや、話し手(語り手)が「二つのことがらをひとつづきのものとしてさしだすことを表す」ことを指摘し、視点は普通観察者から述べるものが多いが、話し手が動作主から述べる場合その時話し手と動作主が二つの存在と認める必要があると述べている。一方、「たら」については、連続の用法がないと主張し、事実条件の場合、「時間＝条件的な関係」を表すに加え、話し手が見たことや経験したことを表すと指摘している。

蓮沼(1993)、宮部(2011、2017)と異なり、日本語文法記述研究会(2008)と前田(2009)は、「たら」には連続の用法があり、後件が意志性の低い述語の場合には可能であると指摘している。それに加え、前田(2009:75)は、「たら」によって表されるものについて、「前件によって後件が引き起こされたと言う関係が見られる点であり、単に連続する意志的な二つの事態を並べるものではない」と述べている。そのため、「たら」は常に強い驚き、意外感といったニュアンスを帯びる。

以上、事実条件を表す「と」「たら」に関する先行研究を見た。豊田の一連の研究をはじめとする多くの先行研究は、事実条件を表す用法の分類と構文的特徴を提示している。それをまとめると、表 2-2 のようになる。(「-」は当該研究では明確に示されていないことを表す。そして、中島(2007)における「P」と「Q」は前件と後件を表す。)

表 2-2 から分かるように、事実条件を表す「と」「たら」は様々な視点から分類されているが、大体 4 つか 5 つの用法に分かれており、対応する部分も多い。本研究は、前田(2009)に従い、事実条件を表す用法を連続、きっかけ、発見、発現に分ける。そして、後件が意志性の低い述語の場合、「たら」も連続を表すことができることに賛同する。

2.1.4　主題、対比を表す「なら」に関する先行研究

「なら」の意味・用法をめぐって、様々な議論が行われている。その中には、主題、対比を表す「なら」の位置づけについて論じているものが多い。代表的な先行研究として、丹羽(1993)、高梨(1995)、前田(2009)などを挙げることができる。

[1] 宮部(2011、2017)では、「すでにあることがらを表す場合」と呼ばれている。

表 2-2　先行研究における事実条件を表す用法の分類と構文的特徴

<table>
<tr><td rowspan="6">豊田
(1978 など)</td><td>用法</td><td>働きかけ</td><td>主体</td><td>前件</td><td>後件</td></tr>
<tr><td>連続</td><td>なし</td><td>同主体</td><td>動作</td><td>動作</td></tr>
<tr><td>きっかけ</td><td>あり</td><td>－</td><td>動作</td><td>動作・反応</td></tr>
<tr><td>発見</td><td>なし</td><td>－</td><td>人の動作</td><td>状態</td></tr>
<tr><td>時</td><td>なし</td><td>－</td><td>状態・継続</td><td>動作の開始</td></tr>
<tr><td>因果</td><td>あり</td><td>－</td><td colspan="2">構文的因果文、転生因果文</td></tr>
<tr><td rowspan="6">蓮沼
(1993)</td><td>用法</td><td colspan="2">前後事態の関係</td><td>前件</td><td>後件</td></tr>
<tr><td>連続</td><td colspan="2">同主体</td><td>動作</td><td>動作</td></tr>
<tr><td>反応</td><td colspan="2">前件に反応して後件が起こる</td><td>動作や変化</td><td>動作や変化</td></tr>
<tr><td>発見</td><td colspan="2" rowspan="2">前件の行為によって後件の事態を認識する</td><td>動作</td><td>状態</td></tr>
<tr><td>発現</td><td>継続・状態</td><td>動作</td></tr>
<tr><td>時</td><td colspan="2">時間の推移に伴う新たな事態の出現や状況の進展変化</td><td>時間の推移</td><td>事態の出現や状況の変化</td></tr>
<tr><td rowspan="5">中島
(2007)</td><td>用法</td><td colspan="4">類型</td></tr>
<tr><td>継起</td><td colspan="4">P〈＋動作〉　ト、Q〈＋動作〉〈＋完了〉</td></tr>
<tr><td>きっかけ</td><td colspan="4">P〈＋動作〉　ト、Q〈＋心的〉〈-意志〉〈＋完了〉</td></tr>
<tr><td>発見</td><td colspan="4">P〈＋動作〉　ト、Q〈-動作〉〈＋完了〉</td></tr>
<tr><td>「トキ」</td><td colspan="4">P　ト、Q 〈＋動作〉〈＋変化〉〈＋完了〉
P　ト、Q 〈＋動作〉〈＋開始〉〈＋完了〉
P　ト、Q 〈＋動作〉〈＋移動〉〈＋完了〉</td></tr>
<tr><td rowspan="4">宮部
(2011、2017)</td><td>用法</td><td>因果関係</td><td>主体</td><td colspan="2">アスペクト</td></tr>
<tr><td>連続</td><td>なし</td><td>同主体
(異主体)</td><td colspan="2">完成相＋完成相
(完成相＋継続相)</td></tr>
<tr><td>きっかけ</td><td>あり</td><td>異主体
(同主体)</td><td colspan="2">完成相＋完成相
(継続相＋完成相)</td></tr>
<tr><td>認識・発見の状況</td><td>不問</td><td>異主体</td><td colspan="2">完成相＋継続相
継続相＋完成相</td></tr>
<tr><td rowspan="5">日本語文法記述研究会
(2008)</td><td>用法</td><td>因果関係</td><td>主体</td><td>前件</td><td>後件</td></tr>
<tr><td>連続</td><td>直接的な因果関係なし</td><td>同主体</td><td>動作</td><td>動作</td></tr>
<tr><td>きっかけ</td><td>あり</td><td>異主体</td><td>－</td><td>－</td></tr>
<tr><td>発見</td><td>あり</td><td>－</td><td>動作</td><td>状態</td></tr>
<tr><td>時</td><td>なし</td><td>－</td><td>継続・状態</td><td>動作</td></tr>
<tr><td rowspan="5">前田
(2009)</td><td>用法</td><td>因果関係</td><td>主体</td><td>前件</td><td>後件</td></tr>
<tr><td>連続</td><td>なし</td><td>同主体</td><td>動作</td><td>動作</td></tr>
<tr><td>きっかけ</td><td>あり</td><td>異主体</td><td>動作</td><td>動作</td></tr>
<tr><td>発見</td><td>あり</td><td>異主体</td><td>動作</td><td>状態</td></tr>
<tr><td>発現</td><td>基本的になし</td><td>同主体
異主体</td><td>継続中の動作</td><td>存在・状態・新たな認識</td></tr>
</table>

丹羽(1993)は、条件を表す「なら」と主題、対比を表す「なら」は連続的であると述べている。主題を表す「なら」は、「相手を受けた表現でなければならない」「既にお互いの間で主題として確立している場合は用いられない」「自分から主題を持ち出すことはできない」という制約があると指摘し、「受取主題」と特徴づけている。他方、対比を表す「なら」は、「可能な選択肢から当該項目を選ぶ」というものであるため、「肯定的な事態でないと用いられにくいという傾向がある」と指摘している。

高梨(1995)は、事態を表すか否かによって、「条件節の X[＝前件]ナラ」「非節的な X ナラ」に分類している。そのうえで、「非節的な X ナラ」の場合、「X なら Y[＝後件]」は文全体で 1 つの事態を表していると指摘し、「主題の受取り」と「焦点」に細分類している。

前田(2009)は、「なら」には直接名詞に接続し、提題の機能を果たす場合があると指摘し、それは「と」「ば」「たら」との相違点の 1 つと認め、「条件文と連続的であるとして扱うことが適切であろう」(p56)と述べている。

これらの研究は、主題、対比を表す「なら」と条件を表す「なら」とは連続的であると捉えている。一方、主題、対比を表す「なら」を提題助詞またはとりたて助詞として扱う研究として、益岡・田窪(1992)、日本語記述文法研究会(2009)もある。本研究は、前田(2009)に従うため、主題、対比を表す場合はあくまでも「なら」の 1 つの用法にすぎないと位置づけ、主題を表す「なら」は「受取主題」、対比を表す「なら」は「～であるために～を選ぶ」と特徴づける。

2.1.5　「と」「ば」「たら」「なら」の特徴に関する先行研究

4 形式の特徴、すなわち、4 形式の基本的・本質的な意味について論じた研究がある。国立国語研究所(1964)は、次のように「と」「ば」「たら」の特徴を述べている。

「ば」:条件を表す(そのうらに「～でなければ後件はおこらない」を含む)。
「と」:客観的な継起を示す。
「たら」:個別的・その都度的な状況を示す。

山口(1969)は、「と」は「単なる時間的関係から帰結に先行するにすぎないという条件の軽さ」、「ば」は「条件の性質が一般的非個別的である」、「たら」は「条件の性質が実際的である。個々の事象に即した表現」、「なら」は「事象そのものより判断に即した表現。思考的である」と述べている。

益岡(1993a)は、「と」「ば」「たら」「なら」それぞれに「現実に観察される継起的な事態の表現」「一般的因果関係の表現」「時空間に実現する個別的事態の表現」「ある事態を真であると仮定して提示する表現」と特徴づけている。さらに、益岡(1993b、1997)は、「条件節の分化は文の概念レベルを反映する」ということに基づき、「ば」は命名のレベ

ル、「たら」は現象のレベル、「なら」は判断のレベルに対応すると指摘している。

2.1.6　使用場面による使い分けに関する先行研究

使用場面に着目し、4 形式の使い分けについて述べた研究として、堀(2004b)、中島(2007)、叶希(2018)などがある。

堀(2004b)は、日本語母語話者を対象に、「電話会話コーパス」「インタビューコーパス」「口頭発表コーパス」「学術論文コーパス」を用いて調査を行い、その結果を次のように述べている。「たら」は、内容・改まり度も関わっているため、電話会話、インタビューでは使用が多いが、口頭発表では少なく、論文ではほとんど使用されない。「ば」は、論文でもっとも頻度が高く、前置き表現としては「と」と比べると頻度が低い。「と」は、特に口頭発表と論文では条件文としても前置き表現としても多く使用される。最後に、「なら」は全体的に使用が少ない。

中島(2007)は、自然談話録音資料、国語教科書とシナリオを用いて調べている。その結果は次のようにまとめられる。「と」は、書きことばでは事実条件を中心的用法とし、話しことばでは一般条件のほうに多く使われる。「ば」は、書きことばでも話しことばでも一般条件を中心的用法とする。「たら」は、仮定条件が中心的用法で、話しことばではもっとも使われ、書きことばでも多用される。「なら」は、話しことば、書きことばともに仮定条件のみに使われる。

叶希(2018)は、ビジネス文書、ビジネス会話(経済ドラマ、職場の自然談話録音)を資料とし調査している。その結果として、ビジネス文書では「ば」「たら」は多用されるが、「と」「なら」は希少である。経済ドラマのビジネス会話では「ば」は圧倒的に多用されるが、「と」「なら」は少なく、「たら」はその中間にある。職場の自然談話録音のビジネス会話では「と」「ば」「たら」は多用され、「なら」は希少である。

2.2　「と」「ば」「たら」「なら」と他の表現との類似関係に関する先行研究

2.2.1　テ形との類似関係に関する先行研究

日本語記述文法研究会(2008)によると、テ形は「事態と事態との関係」を基準に、並列、対比、前触れ、継起、原因・理由、付帯状況など、8 つの用法に分けることができる。8 つの用法には、継起[2]を表すテ形と連続を表す「と」が(1)のように言い換えができることがある。(「〰」は筆者による。)

(1)音はおじさんの家の前まで来て/来ると、ぴたりと止まりました。(豊田 1978:35)

[2] 継起とは、「時間の流れに沿って順に生起する複数の事態をつなぐ」(日本語記述文法研究会 2008:283)という用法を指す。

それについて論じた先行研究として、国立国語研究所(1964)、中島(2007)、前田(2009)、宮部(2017)などを挙げることができる。

国立国語研究所(1964)は、テ形と「と」が置き換えられる条件として、①過去のできごとである、②前件・後件とも意志的動作である、③前件と後件の主体が同じであると指摘している。

中島(2007)は、「と」とテ形の相違点を次のように指摘している。①「と」は前件と後件に切れ目があり、テ形は前件と後件とが切れずに続いていく。②「と」は前件と後件の 2 つの事態を話し手が外側から眺めてそれを客観的に描写するものであるのに対し、テ形は前件と後件の 2 つの事態を話し手が内在的に関係づける。③テ形は後件に話し手の主観的な判断や意志的態度などのモダリティが許容されるが、「と」は許容されない。④「と」は前件が後件に先行する時間的関係となることが要求されるが、テ形は必ずしもそのような時間的関係に従わなくてもいい。

前田(2009)は、「と」とテ形の相違点について、①テ形は 3 つ以上の動作を連続させることができるのに対し、「と」で表せるのは 2 つの動作の連続のみであること、②テ形は前件と後件が切れず一連の動作が 1 つの大きな場面で行われることを表すのに対し、「と」は前件と後件との間に切れ目があり一連の動作を 2 つの場面に大きく分けること、③「と」は外部からの観察者の視点で語るのに対し、テ形は話し手が内的に関係づけることといった 3 点を指摘している。

宮部(2017)は、「できごとをどのようにとらえ、どのようにさしだすのか」という視点から、「と」とテ形の相違点を指摘している。具体的には、「と」は「二つのできごととしてとらえる」「二つのできごとがひとつづきのものであるとしてさしだす」のに対し、テ形は「(人間が視覚でとらえる場合のように)まるごとの一つのできごととしてとらえる」「話し手がとらえたまま、まるごとのできごととしてさしだす」という。そして、「と」は同主体の場合も異主体の場合も使用されるが、テ形は同主体の場合が圧倒的に多いと述べている。

以上に基づき、連続を表す「と」と継起を表すテ形の類似点と相違点を示すと、表 2-3 のようになる。

また、日本語記述文法研究会(2008)、前田(2009)によれば、「たら」は、後件が意志性の低い場合には連続を表すことができる。ただし、その場合は、「前件が『契機』となって、後件が生じたことを表す。そこでの契機とは、一つは原因として、後件にとって直接影響を及ぼす事態として後件を引き起こすが、もう一つは、後件事態の直前の動作として、いわば『合図的』な契機として、後件がその後で引き起こされると言うことを表す」(前田 2009:77)ということである。さらに、「と」の外部からの観察視点と異なり、「たら」で表せるのは、実体験的で話し手による新たな認識が成立する(蓮沼 1993)ものである。

表 2-3　連続を表す「と」と継起を表すテ形の類似点と相違点

		「と」	テ形
類似点		過去の出来事で、前件の動作が起こった後、続いて後件の動作が起こるという時間的前後関係を表すことができる。	
相違点	中島(2007)	•前件と後件に切れ目がある •外側から客観的に描写する •主観的な判断や意志的態度などのモダリティが許容されない •時間的前後関係が要求される	•前件と後件に切れ目がない •内在的に関係づける •主観的な判断や意志的態度などのモダリティが許容される •時間的前後関係が要求されない
	前田(2009)	•2 つの動作の連続のみ •2 つの場面に分ける •外部からの観察者の視点で語る	•3 つ以上の動作の連続可能 •1 つの大きな場面 •話し手が内的に関係づける
	宮部(2017)	•2 つのできごと •異主体も同主体も表せる	•まるごとの 1 つのできごと •同主体が圧倒的に多い

2.2.2　逆接条件表現「ても」との類似関係に関する先行研究

逆接条件文[3]は、「結果的に条件文が成立しないことを推意している文」(小泉 1987:4)であり、条件文と真逆の論理方向にあるものと位置づけられる。しかし一方、逆接条件表現「ても」は、仮説条件のみならず、(2)のように、反事実条件を表せるため、条件文に近い性質を示す。それは、「反事実的な事態を表せるかどうかは、仮定的条件文がほかの複文と違うものであることを示す、もっとも重要な性質である」(日本語文法記述研究会 2008:94)ということが関わる。

(2)手術を受けても、助からなかっただろう。　　(日本語文法記述研究会 2008:94)

そして、日本語文法記述研究会(2008)によると、「ても」はテ形にとりたて助詞「も」がついたものであるため、条件的な関係の否定にならず、条件を並べることも可能である。(3)はその例である。

(3)a. 4 を自乗すれば、16 になる。
　b. -4 を自乗すれば、16 になる。
　c. 4 を自乗すれば/しても、16 になるし、-4 を自乗しても、16 になる。
(日本語文法記述研究会 2008:150)

さらに、前田(2009:193)によれば、「並列条件において並べられる新たな条件・状況が、一般的には主節の事態の成立を阻害する事象である」という条件の並列と逆接条件両方が含まれる場合もある。(4)はその例(前田(2009:193)より引用)である。

[3] 小泉(1987)では、「譲歩文」という用語が使用されている。

（4）ところが矛盾したことだが、結婚生活もまた人間の本性なのである。人生何事かを為せば悔恨あり、何事をも為さざればこれもまた悔恨という言葉があるが、同様に、結婚すれば悔恨あり、結婚しなくても悔恨ありということになるのではなかろうか。

（石川 達三『結婚の生態』）

2.2.3　時間表現との類似関係に関する先行研究

継起を表すテ形のほかに、「主節の動きや状態が成立する時を別の事態との関係によって限定する」（日本語文法記述研究会 2008:165）時間節を導く時間表現「とき」にも、「と」「たら」との類似関係を見ることができる。例えば、豊田（1977）は（5）における「と」と「とき」について、両者はほとんど同じ意味を表すと述べている。

（5）a. 先生と話していると、山田さんが来た。
　　b. 先生と話している時、山田さんが来た。　（豊田 1977:90）

そして、（6）のように、事柄の時点を特定する「と」も「たとき」に言い換えても特に問題ない。

（6）a. 頂上に着くと、雨が降り出した。
　　b. 頂上に着いたとき、雨が降り出した。　（中島 2007:237）

ただし、中島（2007）は、「とき」は同時を表し、「と」は継起を表すと両者の違いを指摘している。馬（2021）は、同時的時間関係において、「と」は部分的同時性、接触的同時性を表す場合には用いられるが、「前後件には接触点がなく、依存関係が基本的に存在しない〈重複的同時性・全体的同時性〉の場合」（p134）には用いられないと述べている。

同様に、「たら」を「たとき」に言い換えできることもある。（7）と（8）は、その例である。

（7）a. 喫茶店でコーヒーを飲んでいたら、モーツアルトの曲が流れてきました。
　　b. 喫茶店でコーヒーを飲んでいた時、モーツアルトの曲が流れてきました。

（戸村 1988:3）

（8）a. 図書館に行ったら、山田さんに会いました。
　　b. 図書館に行った時、山田さんに会いました。　（戸村 1988:3）

戸村（1988:4）は、「時を表す『たら』」を考察し、次のことを明らかにしている。「たら」は、前件の主語が一人称の場合、後件は話者の意志・意図によって影響を受けるものであ

ってはならないという制約を受けるが、「たとき」はその制約を受けない。そして、前件の主語が一人称でない場合、「たら」の文では、前件後件の時間的間隔が比較的広い場合も狭い場合も表せるが、「たとき」の文では、間隔の狭い場合しか表せない。さらに、前件が属性を表す場合には「たら」は用いられない。

これらの先行研究に基づき「と」「たら」と「とき」の相違点をまとめると、表 2-4 のようになる。

表 2-4　「と」「たら」と「とき」の相違点

中島 (2007)	「と」:継起	「とき」:同時
馬 (2021)	「と」:部分的同時性、接触的同時性	「とき」:重複的同時性・全体的同時性、部分的同時性、接触的同時性
戸村 (1988)	「たら」: •前件主語:一人称の場合 後件:話者の意志・意図が不可 •前件主語:一人称でない場合 時間的間隔:狭い・広い	「とき」: •前件主語:一人称の場合 制約を受けない •前件主語:一人称でない場合 時間的間隔:狭い

葉(2009)は、テ形、「たら」、「てから」を比較したものである。葉(2009)で述べられた「たら」「てから」の類似点、相違点及び交換可否を示すと、表 2-5 のようになる。

表 2-5　葉(2009)による「たら」「てから」の類似点、相違点及び交換可否
(葉(2009)に従い筆者作成)[4]

		「たら」	「てから」
類似点		前件と後件が前後して発生する時間的前後関係を表す。 連続使用が不可、テ形との併用が可能	
意味的相違		前件の完了・成立	後件の発生する時間的な起点
焦点		後件	前件
交換可否	時間的継起関係	同主体で無意志事態の場合、置き換えが可能	
	起　因	「てから」との置き換えが困難	
	契　機	「てから」との置き換えが不可能	

まず、連続使用・併用できるかどうかを整理した結果、テ形は連続使用・併用ができるが、「たら」も「てから」もテ形との併用のみが可能であるという。そして、「たら」は前件の完了・成立を前提とし後件の展開について述べることを中心とするため、焦点が後件の動作の生起を強く要請する時は、起点を示す「てから」に言い換えることができないことや、実現済みの事態を表す場合同じ動作主で、無意志事態であれば「てから」との言い

[4] 時間的継起関係、起因、契機は葉(2009)による分類であり、それぞれ前田(2009)の連続、きっかけ、発見に対応する。

換えが可能であることを指摘している。

2.2.4　「なら」と「は」との類似関係に関する先行研究

主題、対比[5]を表す「なら」は、「は」としばしば置き換えることができる。泉原(2007:36-37)によると、「は」と互換性がある「なら」とは次のようなものである。(筆者が一部抜粋。)

(9)①:A＋なら＋B

Aについての聞き手の問いかけに、話し手がBで回答する場合

Q:源氏物語、作者は誰ですか。

A:源氏物語＋なら/は、紫式部ですよ。

②:A＋なら＋Bが/けど、X＋なら＋Y

AとXが対比関係になる場合

Q:中国語のできる人、いないでしょうか。

A:(中国語はダメですが)英語＋なら/は＋話せる人がいますよ。

③:A＋なら＋Bだ

Aの中で、Bが一番という場合

日本人はすぐ「山＋なら/は＋富士、花＋なら/は＋桜」と言う。

「なら」と「は」の違いについて、丹羽(1993)は、「相手を受けた表現でなければならない」「既にお互いの間で主題として確立している場合は用いられない」「自分から主題を持ち出すことはできない」という「なら」の使用場面制約を提示している。それに加え、丹羽(1993)は、ニュアンスの違いについて、「なら」は望ましくない事態に使用されにくいのに対し、「は」は中立的(望ましい事態でも望ましくない事態でも可能)であると指摘している。

高梨(1995)は、主題を表すとき、話し手が相手の意図を推察している場合「は」は多少不自然さが生じると指摘している。そして、対比を表すとき、「X なら Y」は「Y であるために積極的に X を選んだ」というニュアンスが生じるが、「X は Y」は単に対比の意味で「XについてYである」ことを述べるだけであると指摘している。

江田(2005)は、「なら」は対比の文脈が必要であるため、文脈上あるいは社会的常識上そのものと対比できない場合、相手から提示された事柄でもおかしくなると指摘し、「なら」による主題は、「は」よりもっと対比のコントラストが強いと指摘している。

また、日本語文法記述研究会(2009:245)は、主題を表す「なら」について、「名詞にしか接続せず、また、聞き手の発言を受けたり意図を推察したりする場合にのみ用いられる

[5] 「なら」の用法について、主題は丹羽(1993)では「受取主題」、高梨(1995)では「主題の受取り」、対比は丹羽(1993)では「選択」、高梨(1995)では「焦点」と呼ばれている。

という点で、使用範囲は『は』に比べて、ずっと狭い」と述べている。日本語文法記述研究会(2009:42)は、対比を表す「なら」について、「X なら P」は「その文脈の中で望まれている P を成立させる要件として、同類のものから X を取り出して示すものである。つまり、『P であるために X を選ぶ』といった意味をもつ」と述べている。一方、「は」は、単なる対比的な意味であり、対比される 2 つの要素を明示するものである。

先行研究に従い、「なら」と「は」の相違点をまとめると、表 2-6 のようになる。

表 2-6　「なら」と「は」の相違点

	「なら」	「は」
丹羽(1993)	•場面制約ある •望ましい事態	•場面制約ない •中立的
高梨(1995)	•～であるために積極的に～を選ぶ	•単なる対比の意味 •相手の意図を推察する場合は不自然
江田(2005)	•「なら」は対比の文脈が必要である •「なら」は「は」より対比のコントラストが強い	
日本語文法記述研究会(2009)	•使用範囲が狭い •～であるために～を選ぶ	•単に対比される 2 つの要素を明示する

2.3　中国語の複文及び日中対照言語学に関する先行研究

中国語の複文は、複数の語句によって形成されることに加え、邢(2001)によると、「复句里的分句具有相互独立的和相互依存的特征(複文の各語句はそれぞれ独立しながら、相互に依存するという特徴を持つ)」というものである。ここで言う「相互依存的」とは、①互有关系(一定の相互関係を持つこと)、②往往由特定的关联词语联结起来(多くの場合特定の関連詞によって結ばれること)、③可以互相依赖而有所简省(相互に依存し、簡略したりすることができること)という 3 点を指す。そして、邢(2001)は、前件後件の関係に基づき「因果類」「並列類」「転折類」に大別している。その詳細と関連詞の例を表 2-7 に示す。

そして、中国語の複文は、基本的に関連詞(または関連語と呼ばれる)[6]によって条件関係が表される。関連詞を用いる場合、すなわち、有標形式の場合、普通「副詞 p, 接続詞 q」(李光赫 2011)という形式となり、条件文の代表的な形式として、「如果…,就…」「要是…,就…」「只有…,才…」「一…,就…」などを挙げることができる。

[6] 関連詞とは、「複文の中の文と文をつなぐ役割をしながら、前件と後件の関係を表す」もので、「前件に現れるのは日本語の副詞に当たる語が多く、後件に現れるのは普通日本語の接続詞に当たる語が多い」(李光赫 2011:65)というものである。

表 2-7　邢(2001)による中国語の複文の分類(邢(2001)に従い筆者作成)

因果類	因果句	因为…所以…，由于…因而…，…因此…等
	推測句	既然…就，既…就，…可见…等
	仮設句	如果…就…，要是…就…，假若…就…等
	条件句	只有…才…，只要…就…，惟有…才…，除非…才…等
	目的句	…以便…，…以免…，…借以…，…用以…，…省得…等
並列類	並列句	既…又…，又…又…，也…也，一面…一面等
	連貫句	…接着…，…然后…，…又…等
	遞進句	不但…而且…，不仅…而且…，尚且…何况…，…更…等
	選択句	是…还是…，不是…就是…，要么…要么…等
転折類	転折句	…但是…，…然而…，…不过…等
	譲歩句	虽然…但是…，即使…也…，无论…都…，宁可…也…等
	仮転句	…否则…，…不然…，…要不…，…要不然等

李光赫(2011)は、邢(2001)による中国語の複文の分類に基づき、日本語の条件形式と関連があるのは「因果類」「並列類」であると指摘している。一方、大河内(1967)、小川(2001、2002)、中島(2007)、李光赫(2011)、李・趙(2022)などによると、「と」「ば」「たら」「なら」はいずれも「如果…,就…」「要是…,就…」で表すことが多くあり、日本語と中国語の条件文は形式的・意味的に「一対一」のような対応関係にあるものではない。例えば、(10)は、「要是…,就…」が「と」「ば」「たら」「なら」のいずれにも訳すことができる。

(10)要是你不去，我也就不去。

a. あなたが行かないと、私も行きません。

b. あなたが行かなければ、私も行きません。

c. あなたが行かなかったら、私も行きません。

d. あなたが行かないなら、私も行きません。　(中島 2007:250)

また、中国語の複文には関連詞を用いない、いわゆる無標形式がある。姚(2008:19-20)によると、日常生活の使用において、無標形式は 7 割以上を占め、有標形式を大いに上回っている。そして、無標形式の場合、文脈によって様々な解釈が可能である。そのため、次のような例は、日本語にするとき、複数の表し方が考えられる。

(11)有党支持，他拦不住啊。

(因果)党が支持しているんだから、かれはじゃまだてできないよ。

(条件)党の支持があるなら、かれはじゃまだてできないよ。

(譲歩)たとえ党の支持があっても、かれは(この陰謀を)阻止できないよ。
(転折)党の支持があるんだが、しかしかれには阻止しきれないよ。

(大河内 1967:2)

このような無標形式の複文の理解は、文脈に強く頼る[7]ため、それを読み取るときは、まず文脈を明らかにし(「明确语境」)、それから関連詞を付け加える(「配上标志」)という手順(邢 2001)が必要である。

こうしてみると、日本語では条件接続形式なしに条件を表すことができないが、中国語ではそれなしに条件を表すことが可能であるというように、両言語には大きな違いが見られる。

2.4 「と」「ば」「たら」「なら」の習得及び誤用に関する先行研究

2.4.1 「と」「ば」「たら」「なら」の習得に関する先行研究

益岡(1993a)に指摘されているように、「と」「ば」「たら」「なら」は学習困難の項目であるため、日本語学習者を対象とした習得研究が盛んに行われている。その代表的な研究として、稲葉(1991)、ニャンジャローンスック(1999、2001)、ソルヴァン(2006)、堀(2007)、劉(2016)、郭(2017)、苏(2018)、市江(2020)を取り上げる。

稲葉(1991)は、初級後半と中級前半の英語を母語とする日本語学習者を対象に文法性判断テストを行い、「と」「ば(動作性)」の習得が困難な理由として、日本語と英語における文末のモダリティ制約の違いを指摘している。

ニャンジャローンスック(1999)は、タイ語を母語とする日本語学習者を対象に、文法性判断テストのみならず、学習者に正しいと判断した文をタイ語で言う場合、どのような表現を使用するかを記述させるという調査方法も用いている。そして、ニャンジャローンスック(1999)は、条件表現が習得困難な要因として、モダリティ制約以外に、母語であるタイ語の干渉を指摘し、タイ語を母語とする日本語学習者における条件表現の中間言語モデルを構築している。また、ニャンジャローンスック(2001)は、OPI データを使用し、習得が促進されない用法として、「反事実(-過去)」「反事実(+過去)」を挙げており、その理由として、学習者の想像力負荷が大きいからであると述べている。

ソルヴァン(2006)は、日本語母語話者と中国語・英語・韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、モダリティ制約と時間的前後関係制約について文法性判断テストを実施している。その結果、母語と関係なく、学習困難には「と」「ば」のモダリティ制約が大いに関与しており、学習者には働きかけ・表出モダリティを許容する傾向があると述べている。そして、「ば」の場合は英語を母語とする日本語学習者の習得、「と」の場合は韓国語を母

[7] 中島(2007:261)は、(11)のような無標形式がどの意味に解釈されるのかについて、もっとも重要なのは文脈であろうと指摘している。

語とする日本語学習者の習得が遅れること、時間的前後関係制約は英語を母語とする日本語学習者にとって困難であることを指摘している。

堀(2007)は、中国語・韓国語・英語・タイ語を母語とする日本語学習者を対象としたものである。全体的に見ると、韓国語を母語とする日本語学習者と中国語・英語・タイ語を母語とする日本語学習者との間に有意差が認められなかったため、母語としての韓国語は負の影響とはならないと述べられている。他方で、4 言語ともに仮定条件文にモダリティ制約がないことや得点平均が低いことから、学習者にとって「ば」のモダリティ制約が困難であることが述べられている。

劉(2016)は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、文法性判断と複数選択という 2 つの問題形式を用い、「と」「ば」「たら」「なら」の文法知識、意味領域、意味特徴がどのぐらい・どのように理解されているのかを調査し、日本語母語話者との比較を通じて、次を明らかにしている。①4 形式の文法知識については、学習者全体が習得している、または、高い割合で日本語母語話者と同様の判断をしていたのは「たら」と「なら」、及び「ば」の仮定的因果関係用法である。他方で、「と」「ば」のモダリティ制約、事実条件文が習得困難である。②学習者が 4 形式の互換性をどのぐらい理解しているのかについては、日本語母語話者の回答が 1 つの形式に集中する傾向が認められる場合、学習者の回答は分散する傾向を示し、日本語母語話者の回答が 2 つか 3 つである場合、学習者の回答は 1 つ形式に集中する傾向が認められる。特に、「と」「ば」のモダリティ制約に関する認識、「と」と「たら」及び、「ば」「たら」と「なら」の表す意味領域の違いに関する認識は日本語母語話者と大きく異なる。③学習者が 4 形式の独自の意味特徴をどのぐらい理解しているのかについて、学習者は「ば」の「後件の期待する目標を達成するための必要条件を前件に示す」という意味特徴や、「と」の「望ましくない結果を述べる文脈に最も適切である」という意味特徴を習得していない。

郭(2017)は、翻訳調査、アンケート調査[8]、インタビュー調査を実施している。翻訳調査については、「と」は発現ときっかけに、「たら」は発見、一般条件文と連続に、「ば」は反事実条件文、過去の反復・習慣を表す条件文と疑問詞のある「ば」条件節に、「なら」は前件が後件より後に発生する複雑な推論を表す条件文に誤訳が多く認められる。特に、使用制約が少なく学習しやすい文法項目とされた「たら」についての理解には間違いが多かったことが指摘されている。

そして、アンケート調査の結果に基づき、郭(2017:168-169)は、学習者が理解しなかった点を表 2-8 のように指摘している。

---

[8] 翻訳調査について、調査協力者は、日本語の学習歴が 5 年以上、日本留学経験が 1 年以上、日本語能力試験 N1 に合格した中国人日本語上級・超級学習者または教師・研究者 20 名である。

アンケート調査は、日本語母語話者と、中国の大学で日本語を専攻としている大学二年生の学習者 112 名を対象としたものである。

表 2-8　郭(2017)による学習者が理解しなかった点(郭(2017)に従い筆者作成)

「と」について	「ば」について
• 反事実条件文では使えない。 • 文末に意志・願望・命令などのモダリティが使えない。 • 前件が事実である反事実条件文では、場合によって使える。	• 文末に意志・願望・命令などのモダリティがある場合、使用条件が限られる。 • 主節の事柄がマイナスの意味あるいはプラスの意味を持つ条件文では使用が適切である。 • 反復・習慣の条件文では使える。 • 発見の条件文では使えない。 • きっかけの条件文では場合によっては使える。 • 相手の発話を引き継ぐ場合、使えない。 • 主節の事柄の発生時間が従属節より先である条件文では使えない。 • 前件が事実で後件が反事実である反事実条件文では使えない。
「たら」について	「なら」について
• 前件が確定的なことである場合の仮説条件文では使える。 • 前件と後件とも連続の意志動詞を表す条件文では使えない。 • 相手の発話を引き継ぐ場合、使えない。 • 主節の事柄の発生時間が従属節より先である条件文では使えない。 • 前件が事実で後件が反事実である反事実条件文では使えない。	• 反復・習慣、一般条件、連続を表す条件文では一般的に「なら」が使えないこと以外、「なら」、「たなら」、「のなら」の使用について理解できていない。

アンケート調査後、郭(2017)は、学習者調査協力者 10 名に対し、フォローアップインタビューを実施している。その結果に基づき、郭(2017)は、学習者にとってもっとも使いやすいのは「と」であり、それは「と」の前には基本形を使うため、形を間違えることがないといった点を指摘したうえで、次のように述べている。①4 つの条件表現について、学習者は「と」の恒常条件をよく理解しているが、他の用法や使用制限について理解していない。②「ば」の仮定の用法以外は理解していない。③「たら」は前後関係を表す条件表現だと理解しており、その口語性や使用制限が少ないことについて理解していない。④「なら」の意味・用法をほとんど理解していない。⑤例文は学習者の学習に強い影響を及ぼしている。⑥覚えやすい例文は文法の理解と産出に非常に役に立つ。⑦例文の使う文脈から説明する必要がある。⑧中国語の影響も注意する必要がある。

苏(2018)は、構文文法(Construction Grammar)に着目し、複文の習得において「□接続助詞□」というスロット付き表現が考えられ、学習者は「と」「ば」「たら」「なら」使用するとき、独自のコロケーションを持つ可能性があると述べている。そして、苏(2018)は、『HUN-CJS』[9]を用いて考察した結果、図 2-1 のように「と」「ば」「たら」「なら」の習得過程を提唱している。

[9] 『HUN-CJS』とは、『湖南大学中国人日语学习者中介语语料库』であり、湖南大学 2009 年入学日本語専攻学生 90 名を対象に、2009 年 11 月から 2012 年 12 月にかけて収集した縦断的な言語データである。言語データは会話資料と作文資料からなる。

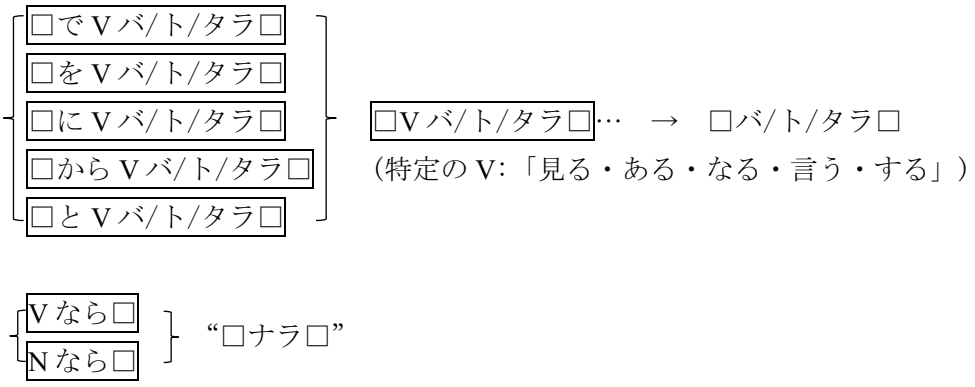

図 2-1　苏(2018)による「と」「ば」「たら」「なら」の習得過程
(苏(2018:168-170)に従い筆者作成)

市江(2020)は、日本語条件表現を習得するときに見られる概念差による通言語的な影響を考察している。考察結果は、次のようである。①仮説、一般、時間の「概念差」について、仮説条件は母語による違いが見られないが、一般条件は、韓国語を母語とする日本語学習者は条件節、英語を母語とする日本語学習者は時間節を高く受容している。しかし、中国語を母語とする日本語学習者だけは条件節と時間節の受容度に違いが認められない。②どのような知識を持っているのかという「知識面」については、通言語的な影響が見られない。③「理解面」については、日本語母語話者は「もし」の有無や位置が文処理過程に影響を与えなかったが、日本語学習者は母語と関係なく、「もし」があることで文処理が促進され、読み時間が短くなり正答率が高くなる。④「産出面」については、中国語を母語とする日本語学習者は「もし」を過剰使用し、仮説条件のみならず、事実的な一般条件までに「もし」の使用を付随させる。このような結果に基づき、市江(2020)は、中国語を母語とする日本語学習者だけに「概念の転移」が見られると指摘し、その要因として、中国語における事実と仮定の概念差が他の言語に比べ曖昧であることを指摘している。

2.4.2　「と」「ば」「たら」「なら」の誤用に関する先行研究

「と」「ば」「たら」「なら」の誤用に関する先行研究として、市川(1997、2010)、孟(2015、2017、2021)、廖(2023a、2023b)を取り上げる。

市川(1997、2010)は、「と」「ば」「たら」「なら」それぞれの誤用を整理し、誤用の解説をしたうえで、表 2-9 のように指導ポイントを指摘している。

表 2-9　市川(1997、2010)による指導ポイント(市川(1997、2010)より抜粋、筆者作成)

「と」の指導ポイント	「ば」の指導ポイント
•「と」の前に来る語の形が正しく作れない学習者が多い。 •「と」は前件と後件に強い依存関係(因果関係)(すぐに・必ず)が存在し、主節末に無意志表現が来る。 •「と」の後件(主節)には副詞(すぐ、必ず)が来やすい。 •「と」には物事(後件)の生起・実現や、継起を表す用法もあり、前者は「たら」と後者は「て」と似通っている。 •「と」節内の主語は「が」が用いられる。	•「ば」が正しく作れない学習者が多いので、十分に練習させる。 •「ば」の基本は一般的な条件を表すことである。書きことば的であり、また、主節末には意志表現はあまり来ない。 • ただし、前件と後件が異主語である場合、また、「形容詞＋ば」のように「ば」が状態性表現をとる時は、主節末に意志表現も来ることができる。 •「ば」の文は、前件に適切な助言内容を含めて助言する場合に適している。 • 一般条件「ば」と逆接条件「ても」を混同する学習者がときどき見られる。 •「ば」が可能形と似ているために、可能形との混乱が起きてしまうこともあるので注意する。
「たら」の指導ポイント	「なら」の指導ポイント
• 動詞・形容詞・「名詞＋だ」のタ形に「ら」が付くタラ形が正確に作れない学習者が多い。 • タラ形は肯定形だけでなく、否定形も十分練習させる。 • 学習者は「たら」を使い過ぎる傾向がある。話しことばで用いられるので論文やレポートなどでは使用しないことを徹底する。 •「たら」は話ことば的で、主節末に意志、無意志どちらの表現もとることができる。また、1回きりの個別的な事態を表す。 •「たら」の基本的な意味は「きっかけ→結果」であるので、その時点を問題にする「とき」や原因・理由を表す「から・ので」と異なることに注意させる。 •「たら」節内の主語は「が」をとる。	•「なら」の前に来る語の形が正確に作れない学習者が多い。 •「なら」が十分指導されていないためか、どう使ってよいかわからない学習者が多い。 •「なら」と「と」「ば」「たら」は大きく異なる。「なら」は基本として「それが真実であれば」という仮定を表す。主節末に意志・無意志どちらもとることができる。 •「なら」のもう一つの用法は、相手のことば・情報を受けて、「そうであるなら」の意味で用いる方法である。 •「なら」節内の主語は「が」をとる。

孟(2015、2017、2021)は、『KY コーパス』[10]と『YNU 書き言葉コーパス』[11]を資料とし、事実条件文の使用状況を考察している。孟(2015、2021)は、『KY コーパス』を用い、英語・韓国語を母語とする日本語学習者と比べ、中国語を母語とする日本語学習者には事実条件文の誤用が多く認められることを指摘している。そして、事実条件文の誤用を「接続の間違い」「用法の誤用」「文が長すぎる。適当な完結がない」といった問題点を指摘し、その要因が「教科書の指導における問題点」などにあると述べている。孟(2017、2021)は、『YNU 書き言葉コーパス』を用いて日本語母語話者の使用状況と比較し、中国語を母語

[10] 『KY コーパス』と『タグ付き KY コーパス』の違いは、『タグ付き KY コーパス』には品詞や意味分類のタグが付与されているという点にある。

[11] 『YNU 書き言葉コーパス』は、日本人大学生(30 名)と同大学に所属する留学生(中国語・韓国語を母語とする日本語学習それぞれ 30 名)を対象に、12 のタスクによる書きことばの資料、計 1080 編を集めたもの(金澤編 2014:3)である。その特徴は、「レベル別」と「タスク別」という点にある。「レベル別」は母語別に被調査者を上位群 10 名、中位群 10 名、下位群 10 名に分け、「タスク別」は実際に起こり得る依頼、励まし、説明、描写、意見などの場面に分けて学習者の使用状況を見ることができる。

とする日本語学習者は事実条件文の用法をほぼ理解しているが、日本語母語話者のように使うことまではできず、文脈や文体などに間違いが見られることを明らかにしている。それに加え、日本語母語話者と比べ、中国語を母語とする日本語学習者は「たら」形式を多く使用していること、日本語母語話者が事実条件文を使用する文脈に、中国語を母語とする日本語学習者は「結局」「時」といった表現を使用する、あるいは、2 つの文にすること、母語の干渉により事実条件文を回避することなどが観察されると述べている。孟(2017、2021)はその原因は、事実条件文の用法・形式が多いこと、母語の干渉により習得が難しくなること、教科書の内容が不十分であることにあると指摘している。

廖(2023a、2023b)は、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.10 から抽出された「*テ→ト」「*ト→テ」を考察している。「*テ→ト」は、「習慣」「発見」「きっかけ」「仮定」「発現」という意味用法上の混用であり、その中で「発見」がもっとも多く認められる理由を、「前後件を異主語が表す別々の 2 事態の継起関係として捉え、『て』を用いている可能性が考えられる」と述べている。そして、「*ト→テ」は、「因果」「1 つの場面における一連動作の描写」「条件表現の二重使用」「2 つの動作の連続のみ可」という 4 つの混用パターンに分かれている。誤用数のもっとも多い「因果」を中心に考察し、「前後件の主語が一人称で、前件に知覚動詞、後件に感情表現が現れる」という組み合わせが多く見られることを明らかにしたうえで、学習者が「と」を使用する理由を、「一人称による前件の知覚と後件の感情の発生とが同時に起きる近接継起関係として捉えられ、『発見』の『と』を使っている可能性がある」と述べている。さらに、テ形とその他の接続助詞との捉え方の違いについて、「学習者は前後件の事態に関連性を感じず、単に時間的な流れに沿って展開する別々の 2 場面と見て、『テ』を用い、その 2 場面を繋げている」「前後件の事態に関連性を感じ、その前後を 1 つのまとまりとして 1 場面の中で捉えているため、学習者は最も使いやすい『テ』ではなく、それ以外の接続助詞を使用している」と指摘している。

2.5　先行研究の問題点と課題

以上、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」に関する先行研究を概観してきた。条件表現「と」「ば」「たら」「なら」はいずれも複数の意味・用法を持ち、しかも他の表現との間にも意味領域の重なりがあるため、学習者にとって 4 形式の学習は容易ではない。条件表現の学習問題をめぐって様々な議論が行われており、おびただしい成果が上がっているが、次のような問題点がある。

第一に、「と」「ば」「たら」「なら」の学習問題は 4 形式内部の問題にとどまらず、他の表現との類似関係にも影響される可能性が高い。しかし、先行研究では 4 形式の使い分けに中心が置かれ、他の表現との類似関係などに関連する学習問題は重要視されていない。

第二に、学習者における「と」「ば」「たら」「なら」の誤用実態が十分に反映されてい

るとは言えない。先行研究の多くは、2.4 節で見たように、文法性判断テストやアンケート調査によるものであり、4 形式の意味・用法の枠の中で学習困難が起こり得るところをあらかじめ予測したものである。しかし、学習者は必ずしも 4 形式の枠内で使用しているわけではないため、文法性判断テストやアンケート調査に条件表現の誤用実態が如実に反映されるのかという疑問が生じる。したがって、学習者に視点を置き、彼らの誤用実態をより重要視することが求められる。

第三に、「と」「ば」「たら」「なら」の誤用に関する分析と考察が十分ではない。管見の限り、4 形式の誤用を扱った先行研究は少なく、いずれも断片的なものである。市川(1997、2010)は、誤用例を列挙しているが、誤用の現象を説明するにとどまっている。孟(2015、2017、2021)は、事実条件文のみを研究対象とし、しかも、誤用例が極めて少ないため、個別的な誤用の現象を記録したものにすぎないと言える。廖(2023a、2023b)は「*テ→ト」「*ト→テ」について考察を行っているが、議論は「と」とテ形に関わる誤用にとどまっている。

以上に挙げた 3 つの問題点は研究内容や研究方法に関わるが、一貫したものと言える。学習者が誤って使用した「と」「ば」「たら」「なら」の誤用をより体系的に考察する必要があるという課題が残されている。

第 3 章　条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用実態概観

本章では、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用を概観し、第 4 章以下で議論することの橋渡しとする。3.1 節では、条件表現に関わる誤用の全体像を見る。3.2 節では、条件表現の混用「*X→Y」の内訳を見たうえで、「条件的用法に関わる、なおかつ、学習者が誤って条件表現を使用したもの」に焦点をあてる経緯について述べる。3.3 節では、条件表現間での混用と、他の表現との混用に分け、誤用実態を述べる。そして、3.4 節では、本章の内容をまとめる。

3.1　条件表現に関わる誤用の全体像

『YUK 作文コーパス』には、接続助詞に関わる誤用が 5,345 例ある。その中に、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」に関わる誤用は 1,209 例あり、接続助詞に関わる総誤用数の 22.62%を占める。これらの誤用を類型別(混用「*X→Y」、不使用「*○→X」、過剰使用「*X→○」)に見ると、図 3-1 のようになる。

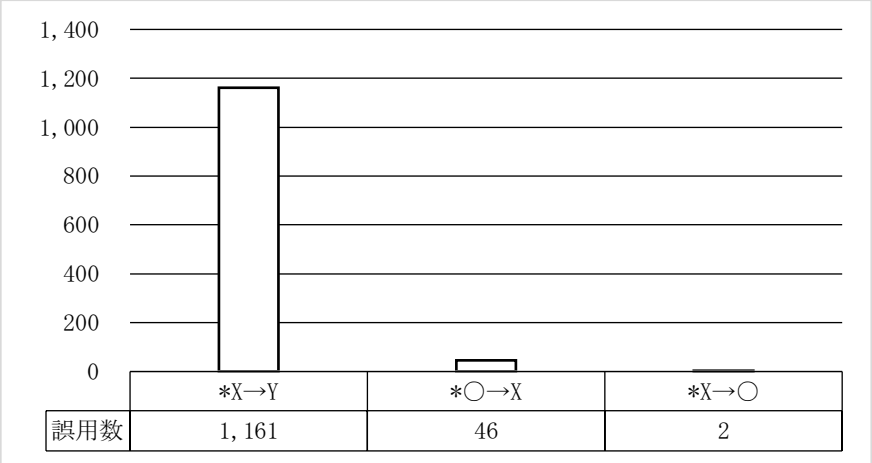

図 3-1　条件表現の誤用類型(単位:例)

図 3-1 によると、混用「*X→Y」は 1,161 例あり、不使用「*○→X」と過剰使用「*X→○」と比べ格段に多い。その理由は、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」が前件と後件を繋ぐ接続助詞という点にあるであろう。(1)-(4)には混用「*X→Y」の例、(5)と(6)には不使用「*○→X」[1]の例、(7)と(8)には過剰使用「*X→○」の例を挙げる。

[1] 図 3-1 に示したように、「*○→X」が 46 例ある。その内訳は、「*○→ト」が 36 例、「*○→ナラ」が 8 例、「*○→タラ」が 2 例である。「*○→X」で代表的なのは、(5)と(6)のように、1 文が 2 つに分かれているものである。その誤用数は 21 例あり、「*○→X」の 47.83%を占める。

（1）当時、まだ小さかったので、手術を受けるにはもうちょっと待ったほうがいいと考えました。今年の秋に〈*なると→なったら〉、学校に通い始める予定で、その前に、手術を受けて、病気を直す必要があります。

（2）小倉朗さんの「日本の耳」という文章を〈*読んだら→読んで〉、彼の繊細な心と感性は本当に素晴らしいと思いながら、自分はどれだけ世俗な人なのかを自覚した。

（3）しかし、ネットを〈*使って→使えば〉、いろいろな人と喋ることができるだろう。例えば、最近よく○○のファンである若い子たちと喋る。

（4）最後は、ある学校で自分が好きな中国文化と言語の授業をする。毎日、学生たちと一緒に〈*生活して→生活すると〉楽しいと思う。授業の合間に、両親と恋人と旅行したい。ただ、座って話しているだけでも幸せだと思う。

（5）小さい庭付きの家の鉄製の黒ゲートを叩く〈*○→と〉、「誰？」という祖父の声が聞こえる。「おじいちゃん、開けて！」と、私が全身の力を出し、大声で答える。

（6）電車の中で、青年 A が年をとったあるおばあさんに席を譲る〈*○→と〉、そのおばあさんが青年 A に「すみません」と応じる。

（7）一般的に〈*見ると→○〉豊かな社会とは人々が裕福で安定した生活をしているということだ。

（8）キャンパス内の自転車はアリペイを通じてスキャンしないと使えないそうです。また、スマートフォンの電源が切れる〈*と→○〉、或いは、ネットがないと、バーコードがスキャンできなくなり、サービスが使えなくなります。

（1）は、時間の経過につれて実現する事態である。堀(2005:36)によると、「前件が未成立だが、いずれ成立すると話者が確信している」ときに、使用できるのは「たら」のみであるため、「と」は誤用となる。（2）は、後件に意志的な表現が使用されている。前田(2009)によると、「たら」は動作の連続を表すとき、後件に意志性の高い表現は使われにくいため、（2）は誤用となる。（3）は、「ネットを使う」が後件を引き起こす条件に相当し、「と」「ば」「たら」のいずれもがふさわしい。（4）も、前件は後件を引き起こす条件であるが、後件に「楽しい」が使用されており、「と」あるいは「のは」などに訂正する必要がある。（5）と（6）は、「と」が使用されておらず、文が 2 つに分かれている。（7）は、「見ると」を削除しても、その前に位置する「一般的に」がそのまま副詞の働きをす

これらの誤用で注目に値するのは、読点「、」の使用である。水野(2000)は、句点「。」の打ち方について、中国語では意味が完全な文の文末に現れるのに対し、日本語では文の終わりに境目として現れ、言わんとする内容が完全でなくても打つことができると述べている。北村(1995)は、学習者が日本語の作文を書くとき、意味の関連がある場合は句点でなく読点を用いて文を続けることを指摘し、その原因は中国語の影響にあると述べている。薄井・佐々木(2013)は、学習者と日本語母語話者の間に句読点の使い方の判断が異なる原因として、中国語の「標点符号」の影響を述べている。こうしてみると、（5）や（6）のような誤用は、学習者における句読点の捉え方と大いに関与し、意味の関連があり言わんとする内容が完全でないところに読点「、」を打つことに要因があると考えられる。

る。(８)は、「電源が切れる」に接続している「と」を削除することで、「電源が切れる」と「ネットがない」を並列的に表現できる。

以下、誤用が最も多い類型である混用「*X→Y」に目を向け、その詳細を見る。

3.2　条件表現の混用「*X→Y」の詳細

図 3-1 に示したように、条件表現の混用「*X→Y」が 1,161 例ある。条件表現の混用「*X→Y」は、条件節の述語使用に関わる誤用(25 例)、非条件的用法に関わる誤用(168 例)、条件的用法に関わる誤用(968 例)に分けることができる。そして、条件的用法に関わる誤用は、さらに学習者が誤って条件表現を使用した誤用(545 例)と、学習者は使用していないが校閲者によって条件表現に訂正された誤用(423 例)に分けることができる。その内訳を示したのが、図 3-2 である。(「(　)」に誤用数を示す。)

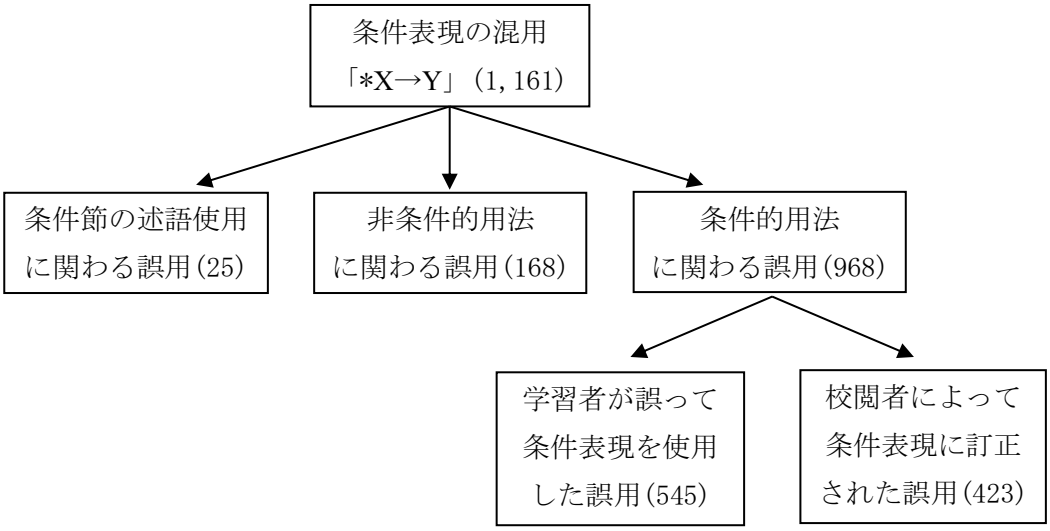

図 3-2　条件表現の混用「*X→Y」の内訳(単位:例)

以下、図 3-2 に従い、条件表現の混用「*X→Y」の詳細について述べる。

3.2.1　条件節の述語使用に関わる誤用

『YUK 作文コーパス』には、図 3-2 のように、条件節の述語使用に関わる誤用が 25 例ある。(９)と(10)にその例を挙げておく。

(９)読者はただ残されていた一枚の写真を通して春琴のきれいな姿と顔つきを想像した。彼女がずっと平穏無事〈*すれば→であれば〉、ゆっくりと老人になり、彼女の美しさと青春は必ず無くなったであろう。

(10)もしみんな夏にエアコンを 28 度にして、冬に 20 度に〈*つければ→すれば〉、年間で二酸化炭素の排出量は 31 キロ削減し、電気代も 2 千元節約できる。

(9)は、ナ形容詞「平穏無事(な)」に「する」を接続し、サ変動詞として使用したものである。(10)は、「エアコンをつける」というコロケーションから派生した誤用である。このような訂正は述語のみに行われたものであるため、条件表現の誤用とは認めにくい。したがって、本研究では、(9)と(10)のように、述語のみが訂正された誤用は分析と考察の対象から除外する。

3.2.2　非条件的用法に関わる誤用

非条件的用法に関わる誤用は、図 3-2 のように 168 例ある。その誤用例として、(11)-(14)のように、「～によると/によれば」「～というと/といえば/といったら」「～から見ると/から見れば」「も…ば…も」などに関わるものが認められる。

(11)具体的な時間が明確に出来ないが、正史〈*によって→によれば〉、歴書が欽明天皇十四年(553 年)に初めて日本に伝えた。
(12)大学生活〈*と言ったら→と言えば〉、もう四年間が立ち去った。大学生活を振り返って見ると、人生に深い影響を与えることがいっぱいあるでしょう。
(13)研究の初めはお金がさっぱりなかったのに、鈴木さんは研究に熱中し、仕事に対する愛着が続いてきた。私〈*から見れば→からすれば〉、化学者にとって、真理を追い続けることは非常に重要かつ難しいことである。
(14)キョシンは中国漢字で「許慎」と書き、東漢時代の語学家でも〈*あれば→あり〉、作家でもある。彼は語学家として中国漢字の歴史の中で非常に大切な辞書を編纂した。

ただし、「～によると/によれば」「～というと/といえば/といったら」「～から見ると/から見れば」「も…ば…も」などは、条件表現形式を持つが、文法化が進んでおり条件の意味が薄くなっている。これらは、「仮定性も因果関係も持たないため、『条件』とは呼びにくく、ほとんどが固定的でイディオマティックであって、『条件』とは別個の表現として捉えるのが適切だ」(前田 2009:51)と言える、いわゆる非条件的用法である。また、これらはそれぞれ、1 つの文法として学習されるため、学習者が実際に使用する時、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方と異なるという可能性が考えられる。したがって、以下、(11)-(14)のような非条件的用法に関わる誤用も分析と考察の対象から除外する。

3.2.3　条件的用法に関わる誤用

条件節の述語使用に関わる誤用と非条件的用法に関わる誤用を除くと、条件的用法に関

わる誤用は図 3-2 のように 968 例ある。その中に、学習者が誤って条件表現を使用したもの(545 例)と、学習者は使用していないが校閲者によって条件表現に訂正されたもの(423 例)がある。例を次に挙げておく。

(15)日常生活には、友達と約束して、外で待ち合わせることが多いでしょう。しかし、もし誰かが遅刻し〈*たら→て〉、相手を怒らせた時、その人はどうすべきなのでしょうか。

(16)みんな止まってイノシシを見ていた。よほどの大雨でイノシシが山から出たと思われる。買い物から〈*帰って→帰ったら〉もうイノシシはいなかった。

(15)は、「なぜ学習者が『たら』を使用するのか」という立場からの考察を必要とする誤用例であり、(16)は、「なぜ学習者がテ形を使用するのか」という立場からの考察を必要とする誤用例である。ただし、(16)は、「買い物から帰ったとき」などの訂正方法も可能であり、学習者が条件表現を使用していない場合、条件表現に訂正するのかどうか、またどの条件表現に訂正するのかは、校閲者の判断に委ねられている。そして、「なぜ学習者がテ形を使用するのか」については、廖(2023a、2023b)[2]によって論じられており、検討の余地があるのは、(15)のように、学習者が誤って条件表現を使用したものである。したがって、以下、学習者が誤って条件表現を使用したもの(545 例)に焦点をあて、誤用実態を見る。

3.3　条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用実態

条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用は、図 3-2 のように 545 例ある。学習者の使用と校閲者による訂正結果に従い、「と」「ば」「たら」「なら」という条件表現間での混用と、他の表現との混用に大きく分けることができる。その内訳は表 3-1 に示す。

表 3-1　条件表現間での混用と他の表現との混用の内訳(単位:例)

条件表現間での混用	他の表現との混用
202 (37.06%)	343 (62.94%)

表 3-1 によると、条件表現間での混用は 202 例あり、誤用全体(545 例)の 37.06%を占める。他の表現との混用は 343 例あり、誤用全体(545 例)の 62.94%を占める。以下、両者の実態を見る。

[2] 廖(2023a、2023b)が対象としたのは「*テ→Y」「*X→テ」であり、その中に「*テ→ト」「*ト→テ」が含まれている。今回抽出された条件表現の混用の中には、「*テ→ト」「*テ→バ」「*テ→タラ」「*テ→ナラ」が合わせて 341 例(423 例の 80.61%)あるが、その 7 割弱が「*テ→ト」(236 例)である。

3.3.1　条件表現間での混用

条件表現間での混用(202 例)とは、(1)の「*ト→タラ」のように、学習者がある条件表現を使用したが、校閲者によって別の条件表現に訂正されたものである。条件表現間での混用は種類として、数字の上では 12 種類を考えることができるが、確認した結果、その 12 種類全てが認められる。その内訳を示すと、表 3-2 のようになる。

表 3-2　条件表現間での混用の内訳(単位:例)

*X＼Y	「と」	「ば」	「たら」	「なら」
「と」	–	22	31	7
「ば」	38	–	5	6
「たら」	28	21	–	10
「なら」	5	18	11	–

表 3-2 によると、「*バ→ト」が 38 例で、最も多い。それに続き、「*ト→タラ」が 31 例、「*タラ→ト」が 28 例、「*ト→バ」が 22 例、「*タラ→バ」が 21 例である。(17)に「*バ→ト」[3]の誤用例、(18)に「*ト→タラ」の誤用例、(19)に「*タラ→ト」の誤用例、(20)に「*ト→バ」の誤用例、(21)に「*タラ→バ」の誤用例を示しておく。

(17)収集したデータを分析〈*すれば→すると〉、中日両国の動物の諺のうち、同じ出典のものが相当な比率を占めることが分かる。

(18)まず、家に〈*帰ると→帰ったら〉、病院に行って、ひざの病気を治す。それから、祖父母と一緒に、「平遥古城」に行く。

(19)日本に〈*来たら→来てみると〉、ここには乞食がないことに気付いた。日本は先進国といっても、経済援助が必要な人がないのか。

(20) そして、日本には中国人の観光客がいっぱいで、9 月に〈*なると→なれば〉、大多数が帰国するかもしれないと思って、夏休みにすごく行きたがったが、タイミングを待っている。

(21)邵存林は供給、需要整合という三つの政策を〈*実施したら→実施すれば〉、大学生の就職問題が解決する可能性があると述べているが、私も同意見である。

このように、「と」「ば」「たら」の間の混用が目立つ。「と」「ば」「たら」の間の混用は、第 4 章で論じる。

他方で、表 3-2 によると、「なら」に関わる誤用パターンは 6 つある。6 誤用パターン

[3] 「*バ→タラ」は非常に少ないため、それに関する分析と考察は省く。

は、「*ト→ナラ」「*バ→ナラ」「*タラ→ナラ」と、「*ナラ→ト」「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」に大別できる。前者は、「なぜ学習者が『と』『ば』『たら』を使用するのか」という立場からの誤用パターンとして認められる。この立場からの考察は第 4 章で行う。一方、後者は、「なぜ学習者が『なら』を使用するのか」という立場からの誤用パターンであり、それに関する考察が必要である。しかも、郭(2017)を見ると、学習者における「なら」の使用状況は、「と」「ば」「たら」と異なる可能性が高い。そのため、誤用数の比較的多い「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」を対象とする考察が求められる。(22) に「*ナラ→バ」の誤用例、(23)に「*ナラ→タラ」の誤用例を示しておく。

(22)学習者との共通領域を利用することである。学習者が理解できる簡単な言葉、共通のジェスチャーと図を〈*使うなら→使えば〉、教えた知識は私物化できて、その目的も達成できると思われる。

(23)将来、親しい人達と一緒に暮らし、興味を持っている仕事〈*をするなら→ができたら〉、それは私にとって一番幸せなことである。

このような状況から、学習者が「なら」を使用した誤用は、「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」を対象に、個別に第 7 章で論じる。

3.3.2　他の表現との混用

他の表現との混用とは、(２)の「*タラ→テ」のように、学習者がある条件表現を使用したが、校閲者によって条件表現以外の表現に訂正されたものである。

他の表現との混用は、表 3-1 のように 343 例ある。そこには様々なパターンが認められるが、比較的多く認められるのは、テ形、逆接条件表現「ても」、時間表現との混用である。それに加え、「と」「ば」「たら」の誤用に条件表現の二重使用、「なら」の誤用に「は」との混用も認められる。その詳細を示すと、表 3-3[4]のようになる。(「-」は誤用がない

[4] 条件表現の二重使用は、1 文に条件表現が二重に使用された誤用を指す。「と」「ば」「たら」の誤用に観察されるが、2 つの条件表現のいずれが訂正されたかは文脈によるところが大きい。そのため、表 3-3 に訂正箇所の区別は明示していない。

そして、条件表現の二重使用を見ると、(ⅰ)と(ⅱ)のように、テ形との混用とかぶるもの(18 例)と、時間表現との混用とかぶるもの(2 例)がある。

(ⅰ)仕事を〈*終えると→終えて〉、家に帰ると、父と母が笑顔で出迎えてくれる。

(ⅱ)自分の書いたエッセイを見るたび、「甘いな」「バカじゃないか」とよく思ってしまう。そして、時々気が〈*向いたら→向いたときに〉昔大好きだった作品をもう一回読んだりすると、つまらないと思う経験もあった。

蓮沼他(2001:21)によると、2 つ以上の条件をつなげる場合は(ⅲ)のようになる。そのため、(ⅰ)のように、テ形に訂正されたものが多いのは当然のことと言える。ただし、学習者の使用に重点を置く立場から、なぜ条件表現を二重に使用するのかという課題が浮かび上がる。したがって、本研究では、(ⅰ)

ことを表す。）

表 3-3　他の表現との混用の内訳（単位：例）

Y / *X	テ形	「ても」	時間表現	条件表現の二重使用	「は」
「と」	41	17	20	28	−
「ば」	11	11	3		−
「たら」	41	17	19		−
「なら」	2	2	2	−	14
合計	95	47	44	28	14

以下、表 3-3 に基づき、テ形との混用、逆接条件表現「ても」との混用、時間表現との混用、条件表現の二重使用、「は」との混用の順に誤用実態を見る。

3.3.2.1　テ形との混用

表 3-3 によると、テ形との混用は 95 例あり、主として「*ト→テ」（41 例）と「*タラ→テ」（41 例）に集中している。「*バ→テ」は 11 例観察されるが、比較的少ない。他方、「*ナラ→テ」は 2 例のみで、非常に少ない。(24)−(26)にそれぞれ「*ト→テ」「*タラ→テ」「*バ→テ」の誤用例を示しておく。

(24) 日本にはたくさん美しい景色があり、優しい人がいて、優秀な文化がある。私は日本の美しさを〈*見ると→見て〉、何度も感動している。

(25) 乗るのは「鬼太郎列車」、「猫娘列車」と「目玉おやじ列車」で、到着駅が「霊界駅」である。水産市場に〈*来たら→来て〉、すぐ見えるのは松葉ガニを抱いている鬼太郎の石像である。

(26) お互いを理解することに美徳に見出す傾向があるようである。すなわち、日本人は何も言わずに、目くばせだけ〈*すれば→して〉、相手が自分の意思を分かってくれるのが最もよいと思っている。

このような誤用実態から、テ形との混用に関する考察は、「*バ→テ」も対象とするが、「*ト→テ」「*タラ→テ」を中心に論じる必要がある。「と」「ば」「たら」とテ形との混用は、第 5 章で論じる。

と（ⅱ）のような誤用（合わせて 20 例）は、テ形との混用と時間表現との混用としてではなく、条件表現の二重使用として数える。

（ⅲ）[X1]　テ　[X2]　バ・タラ　Y

3.3.2.2　逆接条件表現「ても」との混用

表 3-3 によると、逆接条件表現「ても」との混用は 47 例ある。「*ト→テモ」「*タラ→テモ」はともに 17 例であり、「*バ→テモ」は 11 例である。「*ナラ→テ」は 2 例のみで、非常に少ない。(27)-(29)にそれぞれ「*ト→テモ」「*バ→テモ」「*タラ→テモ」の誤用例を示しておく。

(27)しかし、学習者として、これらの研究を〈*見ると→見ても〉、「はずだ」が自由に使えるようになったわけではなく、まだ理解できないこともある。

(28)陳先輩と同じように、中国語授業を担当させて〈*いただければ→いただいても〉よろしいでしょうか。

(29)私の場合、その頃、全然分からなかった。今、何で日本語を専門としているのかと聞かれ〈*たら→ても〉、わからない。文学部なので、経済とか、法律とか、政治とか言語とかしかない。

(27)-(29)を見ると、前件後件の順接・逆接関係が問われるべきであるという共通点が認められる。そのため、「*ト→テモ」「*バ→テモ」「*タラ→テモ」はまとめて第 6 章で論じる。

3.3.2.3　時間表現との混用

表 3-3 によると、時間表現との混用は 44 例あり、「*ト→時間表現」(20 例)と「*タラ→時間表現」(19 例)に集中している。それに対し、「ば」と「なら」の誤用はわずか数例にすぎない。(30)と(31)に「*ト→時間表現」と「*タラ→時間表現」の誤用例を示す。

(30)しかし、デジタル化時代の今はぜんぜん違うと思う。今は気分が悪い〈*と→時に〉友達にメールを出しても返事が来る。メールを交わす間に気分がよくなるわけである。

(31)芥川晩年の作品は生死に関わるものがたくさん残っている。彼は中国から帰っ〈*てきたら→てから〉、ずっといろいろな病気に取り付かれ、おそらく、芥川は自殺を考えながら、自分のこれまでの人生を見直した。

このような誤用実態から、時間表現との混用に関する考察は、「*ト→時間表現」と「*タラ→時間表現」を中心に、第 6 章で行いたい。

3.3.2.4　条件表現の二重使用

同時に、「と」「ば」「たら」と他の表現との混用には、次のような誤用も認められる。

(32)表面から見れば、無料で取り替えるのは、生産者側が損を受けるが、実は消費者側がよい消費体験を〈*もらうと→もらって〉、またそのブランドの製品を選んだら、かえって利益を受けるのは生産者側である。

(33)気持ちよく食事をするのは当たり前だと思い、店員さんに怒鳴る人もいる。虫の存在は不快だが、もし指摘〈*したら→し〉店員さんに丁寧に謝罪されれば、許してあげるのはいかがだろうか。

(32)は「と」と「たら」、(33)は「たら」と「ば」が二重に使用されている。このような誤用は、テ形、時間表現との混用以外に、中止形、原因・理由表現との混用などにも認められ、その誤用数は 28 例(5.14%、n=545)である。条件表現の二重使用は、先行研究で論じられていない誤用現象であるため、検討する価値がある。条件表現の二重使用に関する考察も第 6 章で行いたい。

3.3.2.5 「は」との混用

「なら」の誤用には、「は」との混用が多い。表 3-3 によると、「なら」と「は」の混用(「*ナラ→ハ」)は 14 例ある。(34)にその誤用例を示しておく。

(34)さまざまな原因で、医者さんの社会地位も高くなる。弁護士という仕事は中国でも日本でも給料が高いと思う。私〈*なら、→は〉法律あるいは人々の有罪と無罪を証明するのに関するので、ちょっと神聖なる仕事だと思う。

「*ナラ→ハ」は、条件表現の誤用全体(545 例)から見ると多いわけではない。しかし、「なら」の誤用全体(72 例[5])から見ると、その 2 割程度(19.44%)を占める重要な誤用パターンであり、学習者における「なら」の捉え方を明らかにする手がかりとなりうる。「*ナラ→ハ」の考察は、第 7 章で行う。

3.4 まとめ

本章では、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用実態を概観した。その結果として、「と」「ば」「たら」の間の混用が目立つことに加え、「と」「ば」「たら」とテ形、逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用も著しいことが分かった。他方で、「なら」は「は」との混用が目立ち、「と」「ば」「たら」の誤用とは誤用実態が異なることも分かった。

[5] 学習者の使用だけに注目すると、「と」の誤用が 195 例、「ば」の誤用が 107 例、「たら」の誤用が 171 例、「なら」の誤用が 72 例である。

以下、第 4 章から第 7 章において、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用を論じるが、第 4 章から第 6 章では学習者が使用した「と」「ば」「たら」の誤用に焦点をあて、第 7 章では学習者が使用した「なら」の誤用に焦点をあてる。その詳細は、次のとおりである。

第 4 章 :「と」「ば」「たら」の間の混用
第 5 章 :「と」「ば」「たら」とテ形との混用
第 6 章 :「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用
第 7 章 :「なら」と「ば」「たら」との混用及び、「なら」と「は」との混用

第 4 章　「と」「ば」「たら」の間の混用に関する考察[1]

4.1　はじめに

第 3 章で見たように、条件表現の誤用で注目に値するものとして、まず、「と」「ば」「たら」の間の混用を挙げることができる。第 3 章の表 3-2 から、「と」「ば」「たら」の間の混用が非常に著しいことが分かる。「と」「ば」「たら」の間の混用を論じることは、学習者における捉え方の解明につながる。第 4 章では、「と」「ば」「たら」の間の混用を中心に、その誤用傾向や要因を考察する。

「と」「ば」「たら」の間の混用は合わせて 145 例あり、その詳細は図 4-1 のようになる。

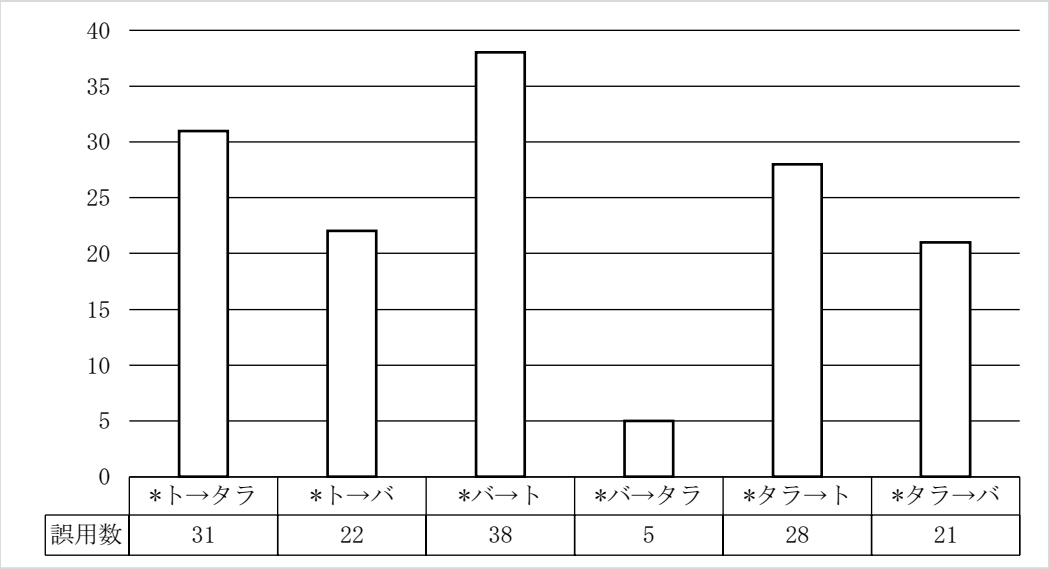

図 4-1　「と」「ば」「たら」の間の混用の詳細(単位:例)

図 4-1 を見ると、「*バ→ト」が 38 例あり、6 誤用パターンの中でもっとも誤用数が多い。それに続くのが「*ト→タラ」の 31 例、「*タラ→ト」の 28 例、「*ト→バ」の 22 例、「*タラ→バ」の 21 例である。他方で、「*バ→タラ」は 5 例のみで、非常に少ない。(1)-(6)に 6 誤用パターンそれぞれの誤用例を挙げる。

(1)そして、もしお金持ちに〈*なると→なったら〉、いつも苦労している両親が休むことができます。

(2)私たちは一緒にデマエを買ったり、ホラー映画を見たり、高校のゴシップを言ったり、試験日に〈*なると→なれば〉必死に勉強したりして、喜びや悲しみを分かち合

[1] 本章は、杜(2022a、2022b)に基づき加筆、修正を加えたものである。

います。息さえしていれば、時間も進みます。

（3）この大学の卒業生の知り合いで、修士学位を取得〈*したら→すると〉、すぐ中国に来たのだ。

（4）いつでもどこでも声を〈*出したら→出せば〉、すぐに返事をしてくれて、本当に幸せだと思いますよ。

（5）びくびくしながら話していた自分がみっともなくて格好悪かったです。今も〈*思えば→思い出すと〉恥ずかしい限りです。

（6）そして、麺類なら、中国の方がかなり美味しいと思う。母国の辛い鍋料理も食べたくてたまらない。帰国〈*すれば→したら〉、全部食べたい。

（1）は、「と」条件文に「もし」は使われにくい（蓮沼他 2001:30）ため、誤用である。（2）は、後件に意志的動作が現れているが、「と」条件文の後件に意志を表す表現は来ない（市川 2010:460）ので、誤用である。（3）は、動作の連続を表すが、後件に意志的動作が現れる場合、「たら」は使われにくい（蓮沼 1993）という制約がある。（4）は、習慣的な出来事を表している。前田（2009）によると、「たら」は反復・習慣条件文を表しにくいため、「たら」は不適切である。（5）は、後件は昔を顧みることによって生じた感情を表す。しかし、後件が望ましくないため、期待性のある「ば」は落ち着かない。（6）は、後件に「たい」が使用されている。「主節が行為要求や希望・意志の表現の場合、『ば』は、従属節の述語が状態性の場合には用いることができるが、動作性の場合には用いられない」（日本語記述文法研究会 2008:101）というモダリティ制約を受けるため、（6）は誤用と認められる。

さらに、「と」「ば」「たら」の間の混用を観察すると、次のような誤用例がある。

（7）一般的に、「だよ」「だね」の方が男ことばとされているが、「だ」を〈*抜いたら→抜くと〉語気がやわらかくなり、男性のやさしさを感じられるようになる。

（8）日本語漢字の存在は中国の日本語学習者にとって利点で、漢字を効果的に〈*使ったら→使えば〉、学習の能率も高められて、もっと優秀で上品な文章も書ける。

（9）格助詞「に」の場所を表すことに関する用法を詳しく〈*見れば→見ると〉、2 つの用法がある。

（7）-（9）はそれぞれ「*タラ→ト」「*タラ→バ」「*バ→ト」の誤用例であるが、いずれも論文の文章であるという共通点がある。これらの誤用は、文法上の誤りが比較的軽微であり、問題とされるのは、むしろ論文をはじめとする特定のジャンル[2]にあると思われる。文章のジャンルが違うと誤用傾向も違うという可能性が考えられ、「*タラ→ト」「*タラ→バ」「*バ→ト」を分析するときには、ジャンルによって、（3）-（5）のような一般的なジ

[2] 論文のほかには、報告書やレポートなどもある。

ャンルの文章(感想文、宿題、試験問題などがあり、以下、【作文】と記す)と、(7)-(9)のような論文などの文章(以下、【論文】と記す)に分けて考察するのが有益である。

「と」「ば」「たら」の学習問題について、これまでに「と」「ば」のモダリティ制約をめぐって多くの議論(稲葉 1991、ソルヴァン 2006、堀 2007 など)が行われている。そして、市川(1997、2010)や孟慧(2017、2021)では学習者における「たら」の使い過ぎが指摘されているが、誤用現象の指摘にとどまっており、学習者が「と」「ば」「たら」を使用するとき、どのような誤用がなぜ生じるのかまでは検討されていない。

本章では、「と」「ば」「たら」の間の混用について考察する。ただし、「*バ→タラ」は非常に少ないため、それに関する分析は対象外とする。以下、4.2 節では「*ト→タラ」「*ト→バ」について、4.3 節では「*タラ→ト」「*タラ→バ」について、4.4 節では「*バ→ト」について分析し、誤用実態と傾向を明らかにしたうえで、なぜ誤用が生じるのかについて論じる。そして、4.5 節では本章での議論をまとめる。

4.2 「*ト→タラ」「*ト→バ」に関する分析と考察

4.2.1 「*ト→タラ」の誤用実態と傾向

4.2.1.1 「*ト→タラ」の誤用例

「*ト→タラ」(31 例)は、学習者が「と」を使用したが、校閲者によって「たら」に訂正された誤用パターンである。(1)のほかに、(10)-(13)のような誤用例がある。

(10)人生の道を選ぶ時、私は会社員になると決心した。今から、私は目標に向かって準備している。会社員に〈*なると→なったら〉、私は更に努力して立派な人になりたい。

(11)これは残念です。良い成績を取るために、三年生に〈*なると→なったら〉、私はぜひ N1 の取得を目指して、精一杯努力します。

(12)彼女はもう二回、中国の大学院の受験を受けて、失敗していた。もし次回もうまく〈*いかないと→いかなかったら〉、大きな挫折になるかも。

(13)その中で、一番印象的だったのは、潘ちゃんとパブで歌ってみたことです。潘ちゃんがいなかっ〈*たと→たら〉、私は一人で勇気がありませんでした。

(10)は、文末の「たい」が願望を表すモダリティであり、「と」条件文に現れにくい。(11)は、「三年生になる」が「前件が未成立だが、いずれ成立すると話し手が確信している」(堀 2005:36)場合であり、このようなとき使えるのは「たら」のみである。(12)は、

副詞「もし」が使用されることで、仮定を強く表す不適切な文になっている。(13)[3]は、副詞「もし」の使用に加え、反事実条件を表すものであるが、「と」には「基本的に反事実条件文を表しにくい」(日本語文法記述研究会 2008:105)という制約がある。

「*ト→タラ」は、事態と言語の関係である「レアリティー」から、事態が未実現かどうかによって、大きく仮説条件・反事実条件を表すものと事実条件を表すものに分けられるが、その中の 29 例が仮説条件・反事実条件を表す。以下では、仮説条件・反事実条件を表すものを中心に論じたい。

4.2.1.2 「*ト→タラ」の誤用傾向

「*ト→タラ」を観察すると、前件述語と後件モダリティに誤用傾向が認められる。まず、前件述語を見ると、動詞「なる」の多用が著しく、13 例に及ぶ。その前に現れるのは、「会社員」「三年生」「大人」「母」など社会身分を表す名詞(9 例)に集中している。社会身分を表す名詞において「大人」「三年生」は勿論のこと、「会社員」「母」なども現在ではなく将来の社会身分であり、いずれも時間変化の性質[4]を持つと言える。そのほかには時間名詞(3 例)の「九月」「今年の秋」「退職の年齢」と、「大きく」(1 例)がある。(10)と(11)に「なる」が使用された誤用例を示したが、それ以外の誤用例を(14)と(15)に挙げる。

(14)九月に〈*なると→なったら〉、学校に通うことになりますので、その前に、勉強は何か、学校で何をするかを前もって教える必要があると思う。

(15)幼い時から、父、母の話を聞いて、大人に〈*なると→なったら〉、社会に役立つ人になりたいと思っていた。

「なる」の次に目立つのは「～ない」である。(12)のほかに、(16)と(17)のような誤用例がある。

(16)本当かどうかわからないが、サボテンが長く〈*生きないと→生きなかったら〉、たぶん放射線に耐えられなくて死んでしまったのではないかと冗談を言う人もいる。

(17)本日は休日と書かない。お客と商店の間に売買の利益関係が存在する。もし客が〈*

---

[3] (13)は、「と」の前にタ形が使用されている。(13)のような誤用について、市川(2010:459-460)は、「過去の事柄であるために、過去にしたのかもしれない」「特に、後件(主節)が過去になっていると『タ形＋と』としたがるようだ」と述べており、「誤形成」(形態的な誤り)と位置づけている。

(13)のような誤用は 4 例あるが、いずれもほかの表現に訂正されており、文法的にも間違っていると思われる。

[4] また、「取る」が使用された 2 例はいずれも「年を取る」であり、「なる」と同じく時間変化の性質を持つと言える。(ｉ)にその例を示す。

(ｉ)一番重要なことは勉強だとわかった。将来、優秀な翻訳家になりたい。そして、年を〈*取ると→取ったら〉教師になりたい。

ないと→いなかったら〉、商店は生存できない。

次に、後件モダリティを見る。日本語文法記述研究会(2003)と仁田(2009)を参考に見ると、「*ト→タラ」の後件には、願望、意志、推量、勧誘、当為評価を表すモダリティが認められ、その数は合わせて 21 例ある。その中でもっとも多いのは願望(10 例)であり、特に「たい」(9 例)が多く観察される。その次に多いのは、意志(6 例)であり、意志動詞ル形(4 例)に集中している。推量[5]は 3 例、勧誘と当為評価はそれぞれ 1 例である。(10)-(12)に願望、意志、推量の誤用例を示したが、そのほかに(18)-(22)のようなものがある。

願望:

(18)学生たちは純粋で、私の生活は楽しくなると思う。私はその仕事が好きになるだろう。退職の年齢に〈*なると→なったら〉、自分の花屋を経営したい。

(19)自分の会社を作るのは難しいと思うが、私たちの夢だから、一度してみたい。最後に、私たちは年を〈*取ると→取ったら〉、農村へ行きたい。

意志:

(20)仕事に対して、私は真面目にやり、生活において、私は楽に毎日を送りたい。次に、十分なお金が〈*蓄めると→貯まったら〉、私は一年間あるいは二年間の旅行に出かけようと思う。なぜかというと、私は旅行が大好きだからだ。

(21)母に〈*なると→なったら〉、自分の子供に中国の古い詩とか中国近代の文学を読ませる。できれば、子供に楽器を習わせたい。

推量:

(22)その次に、気になるところまた出てきた。そもそも、下人は「門の上の楼を上がらない」と、老婆と〈*出会わないと→出会わなかったら〉、この悲劇起こらないだろう。

久野(1973)、日本語文法記述研究会(2008)、前田(2009)などによると、主観性の強いモダリティの意志、願望、勧誘などは、「と」条件文の後件に現れにくい。当為評価を表す「べき」も「その事態が妥当であるという話し手の評価を表す」(日本語文法記述研究会2003:106)ものであり、「と」条件文の後件に使われにくいと思われる。このように、「*ト→タラ」には、モダリティ制約に違反したものが 18 例あり、1 つの誤用傾向として捉えられる。

---

[5] 日本語文法記述研究会(2003)によれば、「だろう」は「断定と推量」を表し、「かも(しれない)」と「はず」は「蓋然性」を表すという違いがある。しかし、学習者における「と」の誤用を見ると、それらの使用は、いずれもその事態が成立する可能性が高いと推測したものである。

一方、「*ト→タラ」には、後件に「だろう」「かも」「はず」の使用も認められるが、グループ・ジャマシイ編(1998)、堀(2007)などによると、「と」条件文において、推量のモダリティの使用は不可能ではない。例えば、グループ・ジャマシイ編(1998:289)は次のような例を挙げている。(「〰」は筆者による。)

(23)この小説を読むと、世界観が変わるかもしれません。

(22)と(23)を比べると、(23)は「ある程度決まっていること、予測できること」(蓮沼他 2001:28)であるが、(22)は予測がつきにくい仮定性の強い事態である。(22)が誤用と認められるのは、このような違いがあるためであろう。

以上をまとめると、「*ト→タラ」においては、前件述語には「なる」と「〜ない」が比較的多く観察され、後件モダリティには願望、意志、推量が多く観察される。そして、これらの誤用はほとんどの場合、予測がつきにくい仮定性の強い事態を表している。

4.2.2 「*ト→バ」の誤用実態と傾向

4.2.2.1 「*ト→バ」の誤用例

「*ト→バ」は、学習者が「と」を使用したが、校閲者によって「ば」に訂正された誤用パターンを指す。「*ト→バ」は 22 例あり、(2)のほかに、(24)-(26)のような誤用例がある。

(24)そんな退学の勇気はちっともありませんでした。「このままではいけないよ！四年間だよ！もし、退学の勇気が〈*ないと→なければ〉、必死にやってみようよ！自暴自棄になってはならないよ！」

(25)私たちは本当に気概があれば中国をどんどん発展させて、日本人にびっくり〈*させると→させれば〉いいんじゃないか。一切の原因は前の中国が弱すぎたんだ。

(26)春節のうち、二人は時間が〈*あると→あれば〉、一緒に旅行する。

(24)は、文末に勧誘のモダリティが使用されているため、誤用と認められる。「ば」もモダリティ制約を受けるが、前件が状態性の場合はその制約が緩和される。(25)は、学習者自身の主張を表すものであり、「と」条件文としては不適切である。(26)は、後件に意志的動作が現れている。「と」の後件には、意志を表す表現は来ない(市川 2010:460)ため、「と」は不適切である。

そして、「レアリティー」を見ると、「*ト→バ」には、仮説条件のほかに、一般条件や反復・習慣条件も多く見られる。このことは、「*ト→タラ」(仮説条件や反事実条件)とは異なるため、校閲者は訂正するとき、どのような条件が表されるのかも考慮に入れていると思われる。

4.2.2.2　「*ト→バ」の誤用傾向

「*ト→バ」を観察すると、前件述語と、後件におけるモダリティ及び思考を表す表現の使用に誤用傾向が認められる。以下、その詳細を述べる。

まず、「*ト→バ」の前件述語に注目すると、動詞ル形と「～ない」が顕著である。動詞ル形は「*ト→タラ」のように特定の動詞に集中することはないが、「～ない」の誤用数は7例に及ぶ。(24)のほかに、(27)と(28)のような誤用がある。

(27)出産、病気の世話、新改築の手伝い、水害時の世話、年忌法要、旅行は昔の人の生活のすべてであり、皆の助けが〈*もらえないと→得られなければ〉村で生活することは殆ど不可能である。

(28)風景はきれいだから、毎日散歩したいです。週末は天気が〈*悪くないと→悪くなければ〉、友達と一緒に遠足に行くのは、とても楽しいです。

「～ないと」は、「勉強しないと、合格できないよ」のように、警告や義務を表すことができる。このような使い方の影響を受け、学習者は、「～ないと」をひとまとまりとして使用している可能性がある。

次に、「*ト→バ」の後件を見ると、モダリティとして勧誘(2 例)、主張(2 例)、意志(2例)、推量(1 例)、願望(1 例)、問いかけ(1 例)が観察されるが、特定のモダリティに集中することはない。ただし、主張、意志、勧誘、願望は、強い主観性を持つため、「と」条件文に使用するには不適切である。また、推量と問いかけも予測がつきにくく仮定性の強い事態を表すため、「と」条件文の後件に使われにくい。

モダリティのほかに、「*ト→バ」の文末に多く観察されるのは、「思う」「信じる」などの思考を表す表現である。その誤用例として、(29)と(30)を挙げる。

(29)どんな大学生になりたいかということもよく考えた。考えても考えても、よくわからないので、当時は、まあ、〈*入ると→入れば〉すぐわかると思った。しかし、まだわからないうちに、大学時代はもうすぐ終わる。

(30)私は以前よりも頑張りました。最後に女子試合に勝ちました。このことを通して、〈*努力すると→努力すれば〉、収穫があることを信じています。

このような誤用は、思考を表す表現の使用によって、文の帰結が主観的になり、「と」条件文として許容されにくいものである。ただし、(29)と(30)のように、思考を表す表現は、「ば」の後件ではなく、そのさらに後ろに現れることがある。

以上から、「*ト→バ」の誤用傾向として、前件は「～ない」の多用、後件は勧誘、主張、意志などのモダリティや思考を表す表現の多用が挙げられる。

4.2.3　「＊ト→タラ」「＊ト→バ」の誤用要因

以上、「＊ト→タラ」「＊ト→バ」それぞれの誤用実態と傾向を見た。「＊ト→タラ」「＊ト→バ」の前件述語を見ると、「なる」「～ない」が比較的多く観察される。そして、後件を見ると、多少違いが見られる[6]が、主観的な判断(願望、意志、主張などのモダリティや思考を表す表現)を表すものが多く観察される。したがって、「＊ト→タラ」「＊ト→バ」は、図4-2 ように図示できる。

□なると
□ないと
└、～［主観的な判断］。

図 4-2　「＊ト→タラ」「＊ト→バ」のまとめ

なぜ学習者が「と」を誤用するのか。まず、「と」の前に来る表現が大きく関与していると思われる。この点は、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の学習において、それらが特定の動詞と組み合わされ、学習者には独自のスロット付き表現[7]が形成されるという苏(2018)の指摘によって裏付けられる。図 4-2 を見ると、「□なると」「□ないと」のようなスロット付き表現が形成され、それをひとまとまりとして使用することが誤用の産出に関わっていると考えられる。

次に、モダリティ制約の違反について、勧誘の 3 例を除き、いずれも対事的モダリティであり、この点は、学習者が事態をどのように認識しているのかの反映であると考えられる。また、「＊ト→タラ」「＊ト→バ」には予測がつきにくい事態を表すものが多い。そうすると、前件後件がどのような関係によって表現されるのかを問う必要がある。

前件後件の関係について、日本語文法記述研究会(2008)によると、「と」は、一般条件

---

[6] 「＊ト→タラ」には願望、意志などのモダリティが多く観察され、他方「＊ト→バ」には勧誘、意志などのモダリティと思考を表す表現が多く観察される。「たら」も「ば」も同じく条件表現であるが、「ば」は後件にモダリティ制約を受けるのに対し、「たら」はそうではない。また、「＊ト→タラ」は、「たい」をはじめとするモダリティが多いのに対し、「＊ト→バ」は、一般条件や反復・習慣条件を表しているものや、後件には望ましい事態が現れるものが多い。こうしてみると、「たら」に修正するか「ば」に修正するかは、後件に左右されるところが多いと思われる。

[7] Weinert(1995)、橋本(2011)などによると、固まり習得には、次のように、完全な固定表現とスロット付き表現という 2 種類があるとされている。

> 完全な固定表現は、*How are you?*など、日常よく使用されるような挨拶などがこれに相当する。そして後者のスロット付き表現は、*Can you _?*などが相当し、さまざまな語句を挿入するスロット付きの結合パターンからなるものである。(橋本 2011:17)

苏(2018)は、橋本(2011)に基づき、「□接続助詞□」というスロット付き表現を用いて、学習者における「と」「ば」「たら」「なら」の学習過程の図式を提示している。

と反復・習慣条件を表すときは勿論のこと、「1 回の仮定的な事態間の因果関係を表すこともあるが、その場合でも従属節の事態が起こると主節の事態も必ず起こるという法則的な関係がある」(p102)というものである。つまり、このような関係は、「過去の経験や知識を、そのまま未来にして『A[＝前件]＋と＋B[＝後件]』という判断をしている」(泉原 2007:436)、「一度だけのことではなく何度も繰り返される」(石川 2013:56)ということになる。そのため、「と」は、「前件が成立すれば、いつもそうなる、自然にそうなる」のような事態を表すときによく使われる。日本語母語話者における「と」の捉え方は、石川(2013:56)の図式を援用すると、図 4-3 のようなものである。

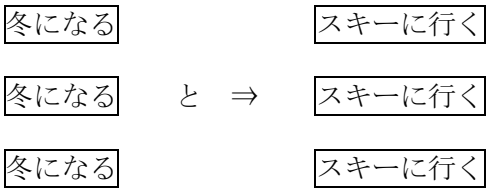

図 4-3　石川(2013:56)による日本語母語話者における「と」の捉え方
(仮説・一般条件など)

一方、学習者はどのように「と」を使用しているのか。ここで再度、(31)-(33)に「*ト→タラ」「*ト→バ」の誤用例を示す。

(31)それぞれの段階に合わせて、設計する必要がある。私は子供の時、絵をかくことが大好きだったから、「大きく〈*なると→なったら〉、画家になりたい」と思って、暇な時によく絵画教室へ絵画を習いに行っていた。

(32)努力しても、必ずしも成功するとはいえないが、もし努力し〈*ないと→なければ〉、絶対に成功しない。だから、成功しても、しなくても、私は情熱を持って、努力していこう。

(33)今でもとても後悔していて、もしあの時その子猫の様子をちょっとでも〈*見ると→見ていたら〉、なにかに食べられるというような、かわいそうな死亡方は絶対に起こらなかったはずだ。

(31)-(33)は、予測がつきにくい事態が表されるとともに、願望の「たい」や仮定性を強める「もし」などが使用されている。このことから、学習者が捉えた前件後件のつながりは、過去の経験や知識に基づくものでも何度も繰り返されるものでもなく、おのおの生起する「前件のため、後件は実現確率が高い」というものである。このようなの意味は、「前件の事態が成立する場合に必ず後件の事態が成立する」という意味から派生したものと思われるが、学習者自身の主観的な体験と見解から述べるものであるため、「いつもそうなる」「自然にそうなる」という意味は成り立ちにくい。したがって、学習者における

「と」の捉え方は、日本語母語話者の「いつも・自然に」という捉え方と異なり、自らの主観的な判断に基づき、前件後件の強関連性を表すものであると考えられる。

そこで、図 4-3 を参照にし、日本語母語話者と学習者における「と」の捉え方を示すと、図 4-4 のようになる。(「P」と「Q」はそれぞれ前件事態と後件事態を示す。)

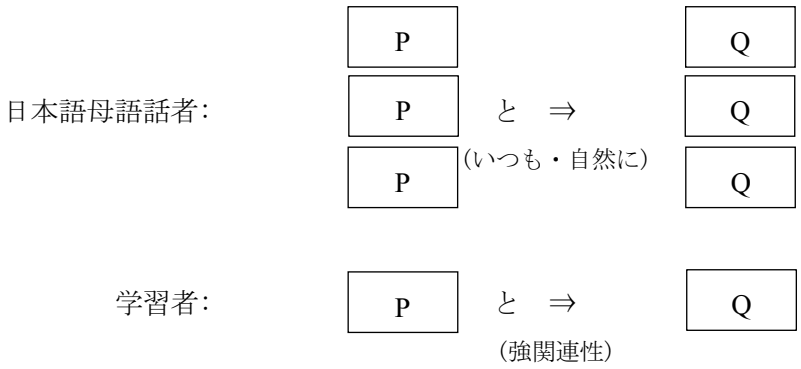

図 4-4　日本語母語話者と学習者における「と」の捉え方
(仮説・一般条件など)

そして、学習者における「と」の捉え方は、(34)のような文と関わると考えられる。

(34)春になると、花が咲きます。

(34)のような文は、中国で使用される教科書《新编日语》《新综合日本语 基础日语》[8]などに例文として取り上げられているものであり、「と」「ば」「たら」「なら」の使い分けを指導するとき日本語教師がよく使う例文でもある。普段どのように条件表現を使用するのかについて質問すると、筆者の周りには(34)のような文を例に挙げる学習者は意外と多い。郭(2017:171)のインタビュー調査を見ても、使いやすい条件表現についての質問に、「と」をよく使うと答えた学習者が一番多く、その理由として、「と」の前に基本形を使うから、形を間違えることがないという指摘がなされている。そして、学習者からは次のような回答も得られている。

学習者:我平时最喜欢用那个「と」和「ば」、然后那个「たら」和「なら」不怎么用、因为我搞不清楚。(略)以前学过一个句子、什么“春天来了花就开了”然后这个印象特别深刻、就喜欢用它。
訳:普段「と」と「ば」の使用が一番好きです。「たら」と「なら」はあんまり使っていないです、わからないので。(中略)以前習った文があって、なんか「春になると

[8] 周平、陈小芬編著(2016)《新编日语》(『新編日語』)上海外語出版社.
李筱平総主編(2009)《新综合日本语　基础日语》(『新総合日本語　基礎日語』)大連理工大学出版社.

花が咲きます」。その印象がとても深いから、「と」の使用が好きです。

(34)のような文は、条件が成立した場合結果が必ず成立することを表す代表的な文であるが、文脈に応じて仮説条件、一般条件、習慣・反復条件を表すものなどと解釈される。そのような意味が、学習者によって拡大解釈され、「実現確率が高い」として予測がつきにくい事態までに使用されるようになったと考えられる。

また、前件の時間的局面、すなわち、アスペクト(日本語文法記述研究会 2007:3)を見ると、出来事や状況がどれだけ進展し、どのように変化するのかが具体的に表されている。そして、前件後件の関連性が強いことから、前件後件は時間的に接近している、いわゆる「同時に起きる近接継起関係」(廖 2023a、2023b)が認められる。もっとも典型的な「大人になると」を例とすると、「大人になった」のように前件が終わったより、むしろ、「大人になると同時に」「大人になって、大人でいるとき」のように前件が完了していないことを考えることができる。こうしてみると、学習者における「と」の捉え方は、前件のアスペクトと強く関連すると考えられる。

4.3 「*タラ→ト」「*タラ→バ」に関する分析と考察

「*タラ→ト」「*タラ→バ」は、学習者が「たら」を使用したが、校閲者によって「と」「ば」に訂正されたものである。4.1 節で述べたように、「*タラ→ト」「*タラ→バ」は、文章のジャンルによって、【論文】での誤用と【作文】での誤用に分けられる。その詳細を示すと、表 4-1 のようになる。

表 4-1 文章のジャンル別に見る「*タラ→ト」「*タラ→バ」の詳細(単位:例)

	【論文】	【作文】	合計
「*タラ→ト」	13(46.43%)	15(53.57%)	28
「*タラ→バ」	15(71.43%)	6(28.57%)	21

「*タラ→ト」を見ると、【作文】での誤用は 15 例で、「*タラ→ト」の 5 割強を占める。【論文】での誤用は 13 例で、「*タラ→ト」の 5 割弱を占める。そして、「*タラ→バ」は、その中の 15 例(71.43%)が【論文】での誤用である。

以下、【論文】での誤用については、「*タラ→ト」「*タラ→バ」を対象に、【作文】での誤用については、「*タラ→ト」のみを対象に分析を行う。

4.3.1 【論文】での誤用

4.3.1.1 「*タラ→ト」の誤用例

「*タラ→ト」における【論文】での誤用例として、(7)のほかには、(35)-(38)のよう

なものがある。

(35) しかし、日本語、中国語、英語を調べ〈*てみたら→てみると〉、英語名詞句は他動詞能動文における対格が受身文において主格の位置に移動しない現象が殆ど見受けられない。

(36) その二つの資料を〈*比べたら→比べると〉、中日両国の各数字に対する観念が明らかになった。

(37) (27)のような問い掛けの場合、もし第二人称「あなた」を加え、「あなた、どこへいきますか」と〈*聞いたら→聞くと〉、唐突で、不自然に感じられ、他人に強いて答えさせた感じも与えてしまう。

(38) 一般的に、「だよ」「だね」の方が男ことばとされているが、「だ」を〈*抜いたら→抜くと〉語気がやわらかくなり、男性のやさしさを感じられるようになる。

これらの誤用を見ると、「たら」は、(35)と(36)のように、「調べてみた/比べた結果」を導き出す前置き表現に近いものや、(37)と(38)のように、「前件は成立した場合後件は必ず成立する」という一般条件を表すものとして使用されている。これらの誤用は、「たら」は改まった文章に使われにくい(堀 2004b)という使用場面の制約が関わっている。

「*タラ→ト」をまとめると、前件述語は一定の表現に集中することはないが、後件は、(35)-(38)に示したように、「～れる/られる」「なる」などの表現が 9 例あり、比較的多い。また、「前件が成立したあと」という時間的関係が明確に表され、文の焦点は結果としての後件に置かれる。

4.3.1.2 「*タラ→バ」の誤用例

「*タラ→バ」の誤用例は、(８)のほかに、(39)-(42)のようなものがある。

(39) 授業の内容だけではなく、授業以外の資料やビデオや、ライブの日本語を〈*勉強したら→勉強すれば〉、用法の把握は、たやすくなるのではないだろうか。

(40) ゆるい生き方は会社を家にし、常にサービスで殘業をする日本人の伝統とは全く異なる。このような状況が〈*続いたら→続けば〉、日本は未来の世界的競争の中で劣勢に立たされることになるかもしれないと指摘した経済学者もいる。

(41) 二つとも愛情について新しい女性のことを描写する。彼らの創作観を比較して〈*みていたら→みれば〉、当時中日両国の社会風情と新しい思想などについての研究に役に立つと思われる。

(42) 今、中国でも長期の就職指導を〈*実施したら→実施すれば〉、学生たちの総合的な素質と仕事の能力を向上させることができるようになるだろう。

(39)-(42)も、「たら」は改まった文章に使われにくいという使用場面の制約に違反している。そして、「*タラ→バ」は、前件は特定の表現に集中することはないが、後件は「～れる/られる」「なる」が合わせて11例あり、比較的特定の表現に集中している。

また、「*タラ→バ」は「*タラ→ト」とは異なり、その「たら」が(39)-(42)のように、「もし前件が成立した場合」のように仮説条件として使用され、後件には望ましい事態が多く現れている。そうすると、「*タラ→バ」においても「前件が成立したあと」が表されているが、期待性(久野 1973、McGloin 1976-1977 など)並びに誘導推論(坂原 1985)の働きにより、文の焦点は、条件としての前件に置かれていると思われる。

4.3.1.3 【論文】での誤用のまとめ

以上、「*タラ→ト」「*タラ→バ」における【論文】での誤用を見てきた。【論文】での誤用において、後件には「～れる/られる」と「なる」(いわゆる[可能][変化])が多く見られるため、次のようにまとめることができる。

(43)～たら、～[可能・変化]る。

「*タラ→ト」は前置き表現に近いものや一般条件が多く、「*タラ→バ」は仮説条件が多いという違いがある。他方で、これら【論文】に観察される 2 誤用パターンは、文法上の誤りが軽微であり、「と」「ば」「たら」の使用場面上の使い分けと関わるものである。使用場面上の使い分けについて、堀(2004b)は、日本語母語話者を対象に、「電話会話コーパス」「インタビューコーパス」「口頭発表コーパス」「学術論文コーパス」を用いて調査し、「たら」は「口語的」のみならず、「改まり度が高く、論理的な内容を持つ論文では基本的に使用されない」(p40)と述べている。そして、「と」は、口頭発表と論文では条件文としても前置き表現としても多く使用されていることや、「ば」は、論文でもっとも頻度が高く、前置き表現としては「と」と比べると頻度が低いことについて指摘している。こうしてみると、学習者は、「たら」を広範囲に使用しており、日本語母語話者のように文章のジャンルによっての使い分けをしていないことが分かる。

そして、訂正方法が「と」と「ば」に分けられるが、この 2 誤用パターンをまとめて見ると、いずれも「前件が生じたあと」という時間的前後関係が強く読み取れる。この傾向は、次に見る【作文】での誤用にも認められる。

4.3.2 【作文】での誤用

「*タラ→ト」における【作文】での誤用は 15 例ある。(3)以外の誤用例を示すと、次のようなものがある。

(44)今の流行語でいえば、まるで女神のようです。そして、三浦友和と結婚<*したら→

すると〉、全盛期の仕事を捨てて主婦になりました。

(45)チベットは世界の屋根と呼ばれ、憧れの場所である。いつか行きたいという夢が胸の底にあったので友達に〈*誘われたら→誘われると〉、すぐ行くことを決めた。

(46)10 月 1 日、天安門広場に 1 万 5000 人が動員され、ここ数年で最大規模の閲兵式となりました。閲兵式が〈*終わったら→終わると〉、市民 10 万人規模のパレードが続きました。

(47)夜に〈*なったら→なると〉、ちょうちんが付けられて、赤く輝いた。寒かったけど、さらににぎやかになった。

(44)と(45)は、後件に意志的動作が現れたため、誤用と認められる。(46)と(47)は、後件に意志的動作が現れていないが、同一場面に起きる順当な連続的変化を表す。「たら」は、「と」と比べ、「両動作の分断はもっと強く、前件から続いて後件が起こったことが『意外である・予想外である』と言う驚きのニュアンスが強い」(前田 2009:76)というものである。「たら」が落ち着かないのは、前件後件の区切りやニュアンスが関わると思われる。

「*タラ→ト」の前件述語を観察すると、特定の動詞に集中することはなく、様々な動作や変化(主として動作)が現れている。そして、後件を見ると、感情表現の 3 例を除き、何かの動作を表すものが 12 例観察され、いずれもタ形で用いられている。(44)-(47)のほかに例を挙げると、(48)と(49)のような誤用例がある。

(48)それから標高 5000 メートル以上の峠を〈*通ったら→過ぎると〉きれいな「羊卓雍錯」という湖に出た。細長いこの湖は青くて宝石のようである。

(49)チベット族衣装は 2 着、ウイグル族衣装は 2 着、漢服は 5 着、合計 21 着の衣装が揃いました。衣装の準備が〈*出来たら→出来ると〉、次は衣装を着る人を探しました。いろいろ工夫しましたが、18 人のボランティアが見つかりました。

このように、「*タラ→ト」において、【作文】での誤用は、前件にも後件にも動作が現れること、そして文末がタ形であることといった誤用傾向が認められる。このように、「*タラ→ト」は、次のような構文パターン[9]が特徴的である。

---

[9] また、ニュアンスの違いは生じるが、「*タラ→ト」は基本的にテ形にも訂正できる。(44)-(49)を例とすると、次のようになる。(「?」は「やや不自然」を表す。)

(ⅰ)そして、三浦友和と結婚して、全盛期の仕事を捨てて主婦になりました。
(ⅱ)いつか行きたいという夢が胸の底にあったので友達に誘われて、すぐ行くことを決めた。
(ⅲ)閲兵式が終わって、市民 10 万人規模のパレードが続きました。
(ⅳ)夜になって、ちょうちんが付けられて、赤く輝いた。
(ⅴ)それから標高 5000 メートル以上の峠を過ぎてきれいな「羊卓雍錯」という湖に出た。
(ⅵ)?衣装の準備が出来て、次は衣装を着る人を探しました。

(50)～[動作]たら、～[動作]た。

(50)に示したように、これらの誤用は、いずれも既に起きた一回の出来事を表すため、「レアリティー」から、前件後件が連続し生起した事実条件であると認められる。「たら」と「と」は、いずれも事実条件を表すことができるが、「たら」は、後件に意志的動作があると使いにくい。そして、蓮沼(1993:79-80)は、「たら」は「前件の事態が成立した状況において、後件の事態を話し手が実体験的に認識するといった関係を表す場合に使用される」と指摘し、「と」は「語りもの」[10]という特性を持ち、「外部からの観察者の視点で語るような場合に使用される」と指摘している。そのため、既に起きた、単に時間的に連続する事態でも、「と」で表すことができる。

4.3.3　「*タラ→ト」「*タラ→バ」の誤用要因

以上、「*タラ→ト」「*タラ→バ」の誤用傾向を見てきた。【論文】での誤用と【作文】での誤用には構文パターンに違いが見られるが、前件後件の関係を見ると、時間的前後関係の明確さが特徴的である。すなわち、文章のジャンルを問わず、前件が先に生じ、その後、後件が生じるという点はつながっている。他方で、「*タラ→ト」「*タラ→バ」は、「～あと」の意味が明確的であることから、前件のアスペクトを見ると、動作や変化が終結したという展開が認められる。

学習者によって時間的前後関係が明確に表されるのは、「たら」を使用するとき、それに前接する語をタ形に活用させる必要があることに関連する。それに加え、もともと「『タラ』の『タ』が完了を表す『タ』である」(久野 1973:109)ということもあり、「たら」は仮説条件文の場合も事実条件文の場合も、後件には、「S1[＝前件]が完了してから S2[＝後件]が起こる」(久野 1973:113)ということが要求される。そのため、前件の「完了」が強く捉えられるのは無理もないことであろう。この点は、郭(2017)によるインタビュー調査結果[11]からも裏付けられる。こうしてみると、学習者は「たら」の「完了」の意味を強

(ⅰ)-(ⅵ)の中で、(ⅰ)-(ⅴ)はいずれも自然な文である。このことから、【論文】に見られる「*タラ→ト」の誤用は「*タラ→テ」と類似していると分かる。

[10] 「語りもの」について、蓮沼(1993:88)は次のように述べている。

> 「語りもの」においては、語り手は物語世界に対して「全知のもの」といった地位を占めるものである。そこにおいては、語り手は、登場人物の行動や、感情、感覚といった、通常はその人に帰属するような直接経験的な情報についても、それをすべて知っているという立場で語ることができる。つまり、「語りもの」は、他者に帰属する情報を、伝聞やモダリティ形式の付加によって間接化することが、そもそも要請されないという特性を備えた談話のジャンルなのである。

[11] 郭(2017)は、「『たら』は前後関係を表す条件表現だと理解しており、その口語性や使用制限が少ないことについて理解していない」と述べている。

く捉え使用することも誤用の産出に関わっていると考えられる。

日本語母語話者はどのように「たら」を捉えているのか。森田(1967:36)は、「事がらが起こってしまった場合を想定して(中略)。条件が起こうてしまった時と場に立って、話し手はそこに生起する事態を眺める」と述べている。しかし、学習者の使用において、完全に間違っていないが、「たら」の「完了」は、「既に起きた事態を表す」のように、過剰に使用される傾向があると考えられる。

そして、「たら」は、「意味・機能が広いこと、比較的早い段階で教えられること、学習者が日常的によく聞く表現であるためか、『たら』の多用が見られる」(市川 1997:370)という。それに加え、「日常会話、特にくだけた会話には、『～ば』『～と』『～なら』に比べ、『～たら』の使用率が比較的高いと思われる。この傾向は、中国における日本語学習者の学生たちの日本語運用にも反映されている。その結果、学生たちは、無意識のうちに、普段使い慣れている『～たら』を各自の卒業論文に使ってしまったのではないかと思われる」(王崗 2013:112)という。このように、「たら」が学習者にとって汎用性の広く便利な表現であるということも誤用の産出に関わっていると考えられる。

4.4 「*バ→ト」に関する分析と考察

4.4.1 「*バ→ト」の誤用例

「*バ→ト」(38 例)は、学習者が「ば」を使用したが、校閲者によって条件表現「と」に訂正されたものである。(5)と(9)以外の誤用例として、次のようなものがある。

(51)入手した中日両国の諺を〈*見れば→見ると〉、「虎」という動物の諺の意味について、中日両国はほぼ同じで、強くて、凶暴な点が共通している。

(52)中山大学付属第五病院の社員食堂、四川省の SARS の時に隔離されたある団地の住民たちに配ったお弁当を〈*考察すれば→考察すると〉、次の同じような料理の名前が出る。

(53)人に懐かしい感覚を喚起させる時代は一体どのような時代なのかと考えてしまいます。あると思って、よく〈*考えれば→考えてみると〉、建国初期かもしれません。

(54)教師資格証の取得に向かって努力している。もし先生になったら、日本語とぜんぜん関係ないんです。そう〈*思れば→思うと〉、残念なことです。

(51)と(52)は、【論文】での誤用である。(51)は、中日両国の諺に共通点があるという結果を導き出す文である。(52)は、「社員食堂」や「お弁当」を研究することで、「次のような結論が出される」という事態を表している。(51)と(52)のような場合、焦点が後件

に置かれる[12]「と」がふさわしい。これらの誤用は、文法上の間違いではなく、場合によって「と」も「ば」も使えるが、主として論文における「と」と「ば」の使い分けに関わるものである。(53)は、考えることによって思いついた答えを表すものである。この場合、「と」がふさわしい。(54)は、思うことで感情が芽生えるという出来事を表している。しかし、「残念なこと」は、マイナス評価の表現であるため、「ば」は使用しにくい。

このように、「*バ→ト」は、文章のジャンルによって、【論文】と【作文】に分けることができる。誤用数を見ると、前者は 23 例あり、後者は 15 例ある。以下、【論文】での誤用と【作文】での誤用に分け誤用傾向を見る。

4.4.2 【論文】での誤用

「*バ→ト」には、【論文】での誤用は 23 例ある。(51)と(52)にはその例を示したが、そのほかに、(55)-(58)のような誤用例がある。

(55)そして、促音を付ける単語を〈*見れば→見ると〉、促音は一般的に、/p、t、s、k/の前だけ現れる。

(56)表 4 を〈*見れば→見ると〉、「ABAB 型」の擬態語の訳し方は豊富で数が多い。まとめると四つの種類がある。

(57)それらの諺の形、意味、修辞手法、動物イメージを観察〈*すれば→すると〉、共通している点もあるが、異なる点も少なくない。

(58)そのなかで、このテレビ小説が多くの人に好かれる原因をまとめて〈*みれば→みると〉、二つあると思っている。一つは小説の内容である。

(55)は、促音の現れる位置に関する結論を導き出す文である。(56)は、「表 4」を見ることで、「『ABAB 型』の擬態語の訳し方は豊富で数が多い」という結論が出されるという事態を表している。(57)と(58)も同様に、焦点が後件に置かれる「と」がふさわしい。これらの誤用は、(51)と(52)と同様、場合によって「と」も「ば」も使用可能であるが、文章のジャンルによってその使い分けが生じる場合もある。

---

[12] 「ば」と「と」は、焦点の位置に相違があることが石川(2013)、リグス(2013)などによって指摘されている。リグス(2013)は、「ば」と「と」における焦点の位置の相違を次のようにまとめている。

「ば」と「と」における焦点の位置の相違(リグス(2013)より、一部抜粋・調整)

条件形式	焦点の位置	前件/後件の焦点度
ば	前件	とても高い/非常に低い
と	後件	非常に低い/とても高い

このように、「ば」は前件の焦点度がとても高いのに対し、「と」は後件の焦点度がとても高いという焦点の位置に相違がある。(51)と(52)のように、結論が後件に表される場合、焦点は後件に置かれるのが一般的であり、「と」がふさわしい。

【論文】での誤用にどのような誤用傾向が見られるのか。前件述語を観察すると、基本的には「判断」を表すと言える。その詳細を見ると、まず、「見る」が 13 例あり、単なる視覚での認識ではなく、「何らかの判断をするために物事の状態や動きを把握する」[13]という意味で使用されている。そして、「～する」が 5 例、「～てみる」が 2 例あり、その前に接続するものは「観察」「研究」「分析」「考察」「翻訳」などである。そして、後件を見ると、いずれも「結論」が表されている。その中には、「～れる/られる」「～ている」「同じ」「危ない」といった表現のほかに、「ある」「多い」「少ない」など存在の意味を表すもの(10 例)が比較的多く、状態性の「結論」である。

このように、「*バ→ト」における【論文】での誤用は、前件に「判断」を表す表現が現れ、後件に状態性の「結論」が現れるという誤用傾向が認められる。前件における「判断」は、その前に来る内容をもとに判断しているものであるため、開始や終結など具体的な展開を持たず、一定の時間をまたがって成り立つ事態を描き出すものとなる。

4.4.3 【作文】での誤用

【作文】での誤用は 15 例ある。(53)と(54)以外の例を挙げると、次のようなものがある。

(59)電車での地図で確認〈*すれば→すると〉、自分のミスに気付いた。
(60)最初から「あ、い、う、え、お。」と教えてもらい、そして単語、文法を学びました。わからないことを先生に質問〈*すれば→すると〉熱心に説明してくれます。
(61)時は矢の如し、私の大学生活はそろそろ閉幕しなければならない。今三年半の大学生活を〈*振り返れば→振り返ると〉、複雑な気持ちになる。
(62)しかし、私たちは知らなかったから、その時人形を作らなかった。今〈*思い出せば→思い出すと〉、すこし残念な気持ちだ。機会と時間があれば、もう一回行きたい。

(59)は、既に起きている過去一回の出来事であるため、「ば」は使いにくい。(60)は、仮定的な意味がなく、「～と、いつも～」という必然を表す場合(市川 2010:614)であり、「と」がふさわしい。(61)と(62)は、思い出すことで感情が生じるという出来事を表している。しかし、「複雑な気持ちになる」「残念なこと」はいずれもプラス評価の表現でないため、「ば」は使用しにくい。

【作文】での誤用の中に、(59)のように、文末においてタ形をとったものが 2 例、そうでないものが 13 例ある。ここでは、タ形でないもののみを対象に分析を行う。そして、既に起きている出来事を表すため、「レアリティー」を見ると、事実条件に対応する可能性が高い。

[13] 国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp）（最終参照日:2024 年 7 月 1 日）

前件を観察した結果、一定の動詞に集中してはいないが、思考を表す表現の使用が著しい。その誤用数は 9 例あり、「思う」「考える」「振り返る」[14]「思い出す」などが認められる。また、(59)と(60)は、「確認すれば」「質問すれば」が使用されており、思考を伴う動作と言っていい。このように、思考を表す表現の多用が誤用傾向の 1 つとして認められる。

そして、後件を見ると、感情表現として、「残念な気持ち」「くらい気持ち」「複雑な気持ち」「何ともいえない気持ち」「恥ずかしい」「残念」「後悔」が認められ、いずれも望ましくないマイナス評価の感情である。(61)と(62)のほかに、次のような誤用例がある。

(63) 日本語は鍵のように、新しい世界に繋がる扉を私に開けてくれた。でも、今〈*思えば→振り返ると〉、最初の新鮮感の代わりに、後悔がある。しかし、私たちは知らなかったから、その時人形を作らなかった。

(64) なぜなら、日本のドラマを〈*みれば→みると〉、なんかくらい気持ちになるからだ。

このように、「*バ→ト」における【作文】での誤用は、前件は思考を表す表現、後件は感情を表す表現であるという形にまとめることができる。そして、第 5 章で論じる「*ト→テ」「*タラ→テ」(前件に思考、後件に感情が現れる場合、文末はタ形であること)と異なり、「*バ→ト」における【作文】での誤用は、文末には基本的にタ形が現れない。それに加え、(63)のように、「今」「今も」「今まで」などと共起する誤用は 5 例ある。そうすると、【作文】での誤用において、「思考」は、過去一回の出来事でなく、発話時の前後を含む一定の時間をまたがって成り立つものであり、具体的な動作の展開を感じられないものである。

4.4.4 「*バ→ト」の誤用要因

以上、文章のジャンル別に「*バ→ト」を見てきた。【論文】での誤用について、前件に「見れば」「分析すれば」など判断を表す表現が使用され、後件に「結論」が表されるという誤用傾向が見られる。【作文】での誤用について、前件に思考を表す表現、後件に感情を表す表現が使用されるという誤用傾向が見られる。そして、【論文】での誤用と【作文】での誤用を合わせて見ると、「*バ→ト」の前件における「判断」も「思考」も、頭を働かせることに共通点があるため、まとめて「判断・思考」と表すことができる。そして、「感情」を「思考の結論」と見なすとすると、「*バ→ト」の後件は、「結論」とまとめられる。そうすると、「*バ→ト」は次のように示すことができる。

(65) ～[判断・思考]ば、～[結論]。

---

[14] 「振り返る」は、『広辞苑　第六版』によれば、「背後をふりむく」と「過去をかえりみる。回顧する」を表すが、(61)の意味は後者のほうである。

「*バ→ト」で見た「判断・思考」は、特定の時と場に行われるものであり、「個別的」という性格が強い。そして同時に、前件は、一定の時間帯をわたって成り立つということが著しい。しかし、「ば」の特徴について、山口(1969)は「条件の性質が一般的非個別的である」と位置づけている。「ば」の「一般的である」とは、自然の法則や科学的な法則のように、過去、現在、未来の時間に関わらず成立すると考えられる場合(日本語文法記述研究会 2008:106)である。このように、学習者が「一般的である」という「ば」の特徴を理解していないことが誤用の産出に関わると思われる。また、アスペクトを見ると、「*バ→ト」の前件に、具体的な動作や変化が述べられていない。例えば、多く観察される「判断・思考」は、動作がどこまで進んでいるのかを表すことなく、その事態を全体的に述べるのである。すなわち、「*バ→ト」の前件は、具体的な進展を持たず、状況を通じて一貫した事態を表すことが特徴的である。

ただし、なぜ前件が「判断・思考」と結び付けられるのかという疑問が残されている。馬(2013)、劉(2013、2016)、郭(2017)が行った教科書に関する考察を見ると、中国で使用される教科書における「ば」の部分には、「判断・思考」と直接関連づけられる例文も用法の説明も取り上げられていない。したがって、「ば」と「判断・思考」が結び付けられた経緯は教科書以外にあると考えられるが、3 つの可能性を指摘することができる。1 つ目は、学習歴を確認すると、【論文】か【作文】かを問わず、「*バ→ト」は「3-4 年」「4-5 年」に集中している点に鍵がある。大学 4 年生、大学院 1 年生の学習者が論文やレポートを執筆するとき、「判断・思考」の過程とそれによって得られた「結論」を客観的に述べる役割を「ば」に付与し、拡大解釈してしまったという可能性が考えられる。2 つ目は、「ば」には、条件的用法のほかに非条件的用法として、「思えば」(前置き表現としての用法)、「～ば～ほど」(「考えれば考えるほど」「思えば思うほど」)や「～から見れば」(「田舎の人から見れば」)などがあり、その使用は「判断・思考」を表すときに近い。学習者がそこから影響を受けたという可能性がある。そして、3 つ目は、中国語表現の影響が考えられる。例えば、誤用例に見られる「今思えば」「時々思い出せば」は、中国語で言うと、「现在想起来(的话)」「有时回想起来(的话)」といった表現に、「表 2 を見れば」「中日両国の諺を見れば」などは「观察表 2(的话)」「观察中日两国谚语(的话)」[15]といった表現に対応する。これらの可能性については、今後検証を行いたい。

4.5 まとめ

本章では、「と」「ば」「たら」の間の混用について分析と考察を行い、次の 3 点が明らかになった。

第一の点は、「*ト→タラ」「*ト→バ」は、その前件述語に「なる」や「～ない」が現れ、後件にモダリティなどが現れる場合に誤用が生じやすいという傾向があることである。誤

[15] ここでの「观察」は、単に目で見るのでなく、目的を持つ知覚活動に加え思考を伴う行為を指す。

用の要因としては、「□なると」「□ないと」といったスロット付き表現が形成されたこと、それに加え、日本語母語話者における「いつも・自然に」という捉え方と異なり、学習者は自らの主観的な判断に基づき「前件後件の強関連性」で「と」を使用することが挙げられる。さらに、「春になると、花が咲きます」という教科書に出てくる定型例文の影響も考えられる。

第二の点は、「*タラ→ト」「*タラ→バ」は、文章のジャンルによって【論文】と【作文】に分けられることである。【論文】での誤用は「～たら、～[可能・変化]る」、【作文】での誤用は「～[動作]たら、～[動作]た」という構文パターンにまとめられるが、前件後件の時間的前後関係が明確である。このことから、学習者によって、前件の「完了」が強く捉えられていることが示唆される。それに加えて、汎用性があることが、学習者が「たら」を過剰に使用する一因であると考えられる。

第三の点は、「*バ→ト」も文章のジャンルによって【論文】と【作文】に分けられることである。前件を見ると、【論文】の場合は「見れば」「分析すれば」など判断を表す表現、【作文】の場合は「思えば」など思考を表す表現が多く観察される。後件を見ると、「結論」が表される。このような誤用傾向に基づき、「*バ→ト」は、「～[判断・思考]ば、～[結論]」とまとめられる。「ば」の誤用は、誤用要因として、まず、「□見れば」「思えば」などのスロット付き表現が形成され、「判断・思考」と結び付けられたことが考えられる。それに加えて、学習者によって、個別的で一定の時間帯で成り立つ事態が「一般的である」と間違って捉えられていることに起因すると考えられる。

第 4 章の考察をまとめると、図 4-5 のようになる。

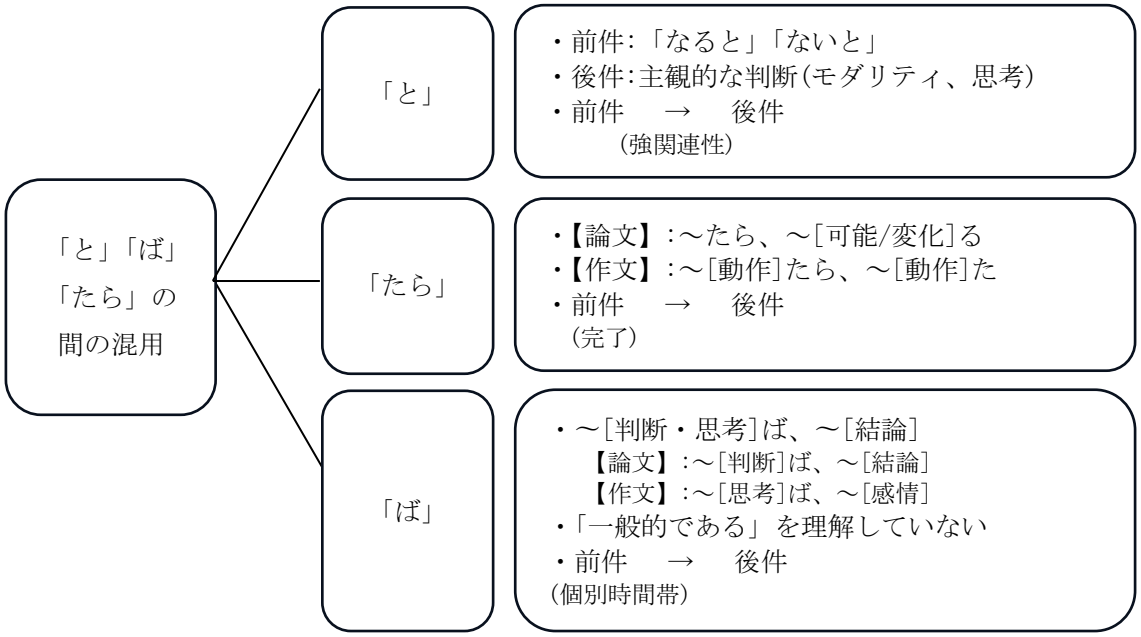

図 4-5 「と」「ば」「たら」の間の混用から見た誤用傾向と要因

図 4-5 に基づき、学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方を見ると、後件とも無関係ではないが、前件に重点が置かれているように見える。そこで、前件に焦点をあてると、学習者における「と」「ば」「たら」のアスペクトの捉え方が注目に値する。ただし、本章で扱ったのは、「と」「ば」「たら」の間の混用のみであるため、更なる検証が必要である。次章では、テ形との混用について分析し、誤用傾向と要因を明らかにしたうえで、学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方や条件の捉え方について論じる。

第 5 章　「と」「ば」「たら」とテ形との混用に関する考察

5.1　はじめに

第 3 章の表 3-3 によると、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」とテ形との混用は 95 例ある。テ形との混用は、条件表現間での混用に劣らず重要なものであり、それに関する考察は、学習者における条件の捉え方を明らかにする重要な手がかりになりうる。

テ形との混用 95 例を見ると、「と」「ば」「たら」との混用が 93 例ある。第 5 章では、その「と」「ば」「たら」とテ形との混用(以下、それぞれ「*ト→テ」「*バ→テ」「*タラ→テ」)を考察する。「*ト→テ」「*バ→テ」「*タラ→テ」の詳細は、図 5-1 のとおりである。

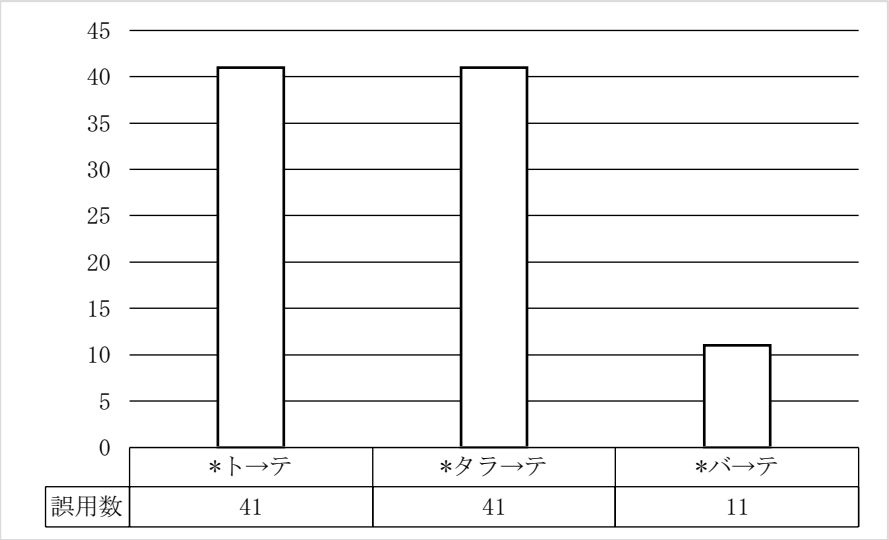

図 5-1　「と」「ば」「たら」とテ形との混用の詳細(単位:例)

図 5-1 を見ると、「*ト→テ」は 41 例、「*タラ→テ」は 41 例、「*バ→テ」は 11 例である。テ形との混用のうち「*ト→テ」「*タラ→テ」は合わせて 82 例あり、88.17%(n=93)を占める。したがって、以下では、「*バ→テ」も対象とするが、「*ト→テ」と「*タラ→テ」を中心に考察を行いたい。

「*ト→テ」「*タラ→テ」「*バ→テ」の例を示すと、(1)-(3)のようになる。

(1)日本にはたくさん美しい景色があり、優しい人がいて、優秀な文化がある。私は日本の美しさを〈*見ると→見て〉、何度も感動している。

(2)私が始めて日本に出会ったのは高校時代です、その時、友達の影響を〈*受けたら→受けて〉、私も「コナン」というアニメを見始めました。

（3）一人称の多様化なども今の習得状況を考察する上で意義がありますが、日本語教育文法から〈*考えれば→考えて〉、一番接触しやすい省略ということに決めました。

（1）は、「日本の美しさを見る」は「何度も感動している」という感情の生じた原因である。市川(2010:461)によると、「自然に起こる感情表現などでは、それらを引き起こす『源』は『て』で表されることが多い」ので、（1）は誤用となる。（2）は、後件に意志的動作を表しているが、同主体の意志的行為の連続は「たら」が使いにくく(蓮沼 1993)、誤用となる。（3）は、過去一回の出来事を表す。蓮沼他(2001)によると、「ば」はこのような事実条件を表すとき使用できない。

「と」「たら」とテ形との類似関係は、国立国語研究所(1964)、中島(2007)、日本語記述文法研究会(2008)、前田(2009)、宮部(2017)などによって論じられている。そして、金澤(2008)は、「『て』→『と』の誤用」の傾向について、前件後件の主語の相異に加え、共に人間であることや、後件の述語が自動詞や名詞・形容詞類になっていることを指摘している。廖(2023a、2023b)は、テ形の誤用について論じ、「学習者は前後件の事態に関連性を感じず、単に時間的な流れに沿って展開する別々の 2 場面と見て、『テ』を用い、その 2 場面を繋げている」「前後件の事態に関連性を感じ、その前後を 1 つのまとまりとして 1 場面の中で捉えているため、学習者は最も使いやすい『テ』ではなく、それ以外の接続助詞を使用している」と述べている。ただし、廖(2023a、2023b)が論じたのは、「*ト→テ」の一部であり、学習者がどのように「と」「ば」「たら」を使い分けているのかまでは考察していない。

学習者が「と」「ば」「たら」を使用している以上、何らかの条件が表されているのではないかと考えられる。そうすると、「と」「ば」「たら」とテ形との混用を考察することは、学習者における条件の捉え方の解明につながる。

本章では、「*ト→テ」「*タラ→テ」「*バ→テ」を対象とし、誤用傾向や要因を明らかにしたうえで、学習者がどのように「と」「ば」「たら」を捉えているのかについて論じる。以下、5.2 節では、廖(2023a、2023b)を参照し、「*ト→テ」について考察する。5.3 節では、「*タラ→テ」について、5.4 節では、「*バ→テ」について分析し、誤用傾向や要因を明らかにする。5.5 節では、テ形との混用から見た誤用傾向や要因をまとめたうえで、学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方と条件の捉え方について論じる。

5.2 「*ト→テ」に関する分析と考察

「*ト→テ」(41 例)とは、学習者が「と」を使用したが、校閲者によってテ形に訂正さ

れた誤用パターンを指す。廖(2023a、2023b)[1]は、「*ト→テ」(42 例)を「因果」「1 つの場面における一連動作の描写」「条件表現の二重使用」「2 つの動作の連続のみ可」に分け、その中で最も多く確認された「因果」(23 例)に焦点をあてている。考察の結果、「因果」の中で過半数を占める「前後件の主語が同主語の一人称で、前件の動詞が知覚動詞[2]、後件の述語が感情表現である」という構文パターン(13 例)に基づき、「*ト→テ」の要因として「学習者によって、一人称による前件の知覚と後件の感情の発生が同時に起きる近接継起関係として捉えられ、『発見』の『ト』が使われている」(p102)ことを指摘している。

筆者は廖(2023a、2023b)に賛同するが、廖(2023a、2023b)が論じたのは「同主語の一人称で、前件の動詞が知覚動詞、後件の述語が感情表現」という構文パターン(「*ト→テ」の 3 割強)である。本節では、廖(2023a、2023b)が考察対象から除いた誤用も含め、分析する。

5.2.1 「*ト→テ」の誤用例

「*ト→テ」(41 例)の誤用例を挙げると、(1)のほかに、(4)-(7)のような誤用例がある。

(4)これを〈*見ると→見て〉、すごく感心しました。
(5)でも、このままではいけないだろう。もしある日、河に落ちたら、どうする？そう〈*考えると→考えて〉、挑戦して一回の水泳の授業を受けようと思った。
(6)だんだん大きく〈*なると→なって〉、中学の時、日本は環境を守ることがとても上手だと聞きました。
(7)中国人の経営方法を学び、少しずつお金を稼ぐ。一生懸命〈*働くと→働いて〉、2、3 年後に自分の店を開く。小さいかも知れないが大きくなっていくと思う。

(4)は、前件に意志的動作が現れ、後件に感情表現が現れている。自然に起こる感情を表すため、この場合はテ形がふさわしい。(5)は、「私」の 2 つの連続する動作であるが、蓮沼他(2001:34)によると、「話し手が実際に直接体験した事実で、話し手しか分からない出来事であるという意味が強い場合には、トは使いにくい」ことになる。(6)は、前件後件には特に依存関係がないため、「と」は不適切となる。(7)は、動作の連続を表すが、非過去であるため、「と」は使いにくい。

---

[1] 廖(2023a、2023b)は、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.10 を用いている。バージョンの違いがあるため、本章における「*ト→テ」の詳細は、廖(2023a、2023b)と異なるところがある。
[2] 廖(2023a、2023b)における「知覚動詞」は、「見る」「聞く」などの視覚動詞や聴覚動詞を指す。本研究では、「知覚動詞」を援用する。

5.2.2　「＊ト→テ」の誤用傾向

廖(2023a、2023b)を参考とし、まず、前件に注目すると、「知覚」(16 例)、「思考」(9 例)、「変化」(8 例)、「外的行為」(8 例)を表す動詞[3]が認められる。ここには相違点もある。「外的行為」の場合、後件にも「外的行為」が多く現れ、文末はル形である。しかし、「知覚」「思考」「変化」の場合、文末はタ形[4]であり、「知覚」「思考」の場合は後件に「感情」「思考」が多く現れ、「変化」の場合は後件に「変化」が多く現れる。こうしてみると、「＊ト→テ」は基本的に、連続またはきっかけ[5]を表すと思われる。(4)-(7)に誤用例を示したが、さらに(8)-(11)のようなものがある。

(8)彼の話を〈＊聞くと→聞いて〉、すごく感動した。それは「活到老、学到老」であると感じた。

(9)成績がそんなにあがらなかったし、おまけに、彼みたいな人とも付き合えなかった。よく考えて〈＊みると→みて〉、やっと分かった。

(10)私は日本語の専攻を選び、日本語ガイドの資格免許を取った。自分の夢に向かってますます頑張った。四年生に〈＊なると→なって〉、就職活動が始まった。私は上海の旅行会社に採用された。私はとてもうれしかった。

(11)この峰の頂上に、いくつかの寺があって、毎日山に〈＊登ると→登って〉、寺の中の菩薩を拝む人が多いと言われる。

次に、前件後件の主体を見ると、上に挙げた誤用例のように、同主体で一人称主体の誤用が多く、その誤用数は 34 例あり、「＊ト→テ」(41 例)の 8 割以上を占める。したがって、「＊ト→テ」の構文パターンは(12)のようにまとめることができる。(「A」は主体(主語)を表す。)

---

[3]「思考」には、「思う」「考える」のほかに、回顧するという意味で使用される「振り返る」「顧みる」が認められる。「行く」「登る」「働く」などは、「知覚」「思考」のように主に心や頭の中で行われる活動やプロセスと異なり、身体的に見られる活動や行為を表すものであるため、ここではまとめて「外的行為」と呼ぶ。また、「変化」には、「四年生」や「春」などに接続し、主として社会身分や時間の変化を表す「なる」と、「高校を卒業し大学生になる」という意味で使用される「大学に入る」がある。

[4]「外的行為」の場合、後件にタ形が使用されたのは 2 例、ル形が使用されたのは 6 例である。一方、「知覚」は 13 例、「思考」は 8 例、「変化」は 6 例が、後件にタ形が使用されたものである。

[5] 前田(2009)によると、事実条件を表す用法は、次のように分けることができる。(「A」「B」は主体(主語)を表す。)

連　　続:A は 〜する と 〜した
きっかけ:A が 〜する と B が・は〜した
発　　見:A が(発見動作)する と B が〜していた
発　　現:A が〜している と B が〜していた

(12)Aは～[知覚・思考]と、～[感情・思考]た。

Aは～[変化]と、～[変化]た。

Aは～[外的行為]と、～[外的行為]る。

5.2.3　「＊ト→テ」の誤用要因

廖(2023a、2023b)は、「同主語の一人称で、前件の動詞が知覚動詞、後件の述語が感情表現」という誤用を通じ、中国語の「就」との対照から、「学習者によって、一人称による前件の知覚と後件の感情の発生が同時に起きる近接継起関係として捉えられ、『発見』の『ト』が使われている」と述べている。上の(８)と(９)に基づくと、廖(2023a、2023b)が言う「同時に起きる近接継起関係」という見方は適切と思われる。ここでは、「＊ト→テ」に関する考察を補う。

まず、日本語母語話者における「と」の捉え方を確認する。鈴木(1986:55)は、「と」が連続やきっかけを表すときの「視点独立型」を提示し、「その視点は、前後句事態とは独立したところにある」と指摘している。同様に、蓮沼(1993:80)は、事実条件を表す「と」の特徴について、「外部からの観察者の視点で語るような場合に使用される」と述べている。このような捉え方があるため、「『と』が用いられるのは、通常の日常会話ではなく、小説や紀行文のようなものである。(中略)文中の自分をもう一人の自分があたかも映画の1 シーンのように客観的に主人公の行為を眺めるような効果を与える」(石川 2013:58)という。ここで、鈴木(1986:53)の図を引用する。

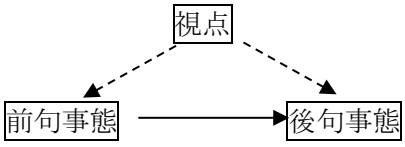

図 5-2　鈴木(1986:53)による日本語母語話者における「と」の捉え方
(連続・きっかけ)

学習者における「と」の捉え方を見るために、(13)-(16)に「＊ト→テ」の誤用例を挙げる。

(13)小さいとき、ある日、父は私を連れてプールに行った。最初はとても楽しかったが、深い池を〈<u>＊見ると→見て</u>〉、怖くてなかなか入れなかった。

(14)ナレーターの話によると、それと天安門広場の石獅子は同じ時期、同じ所の作品だそうです。すごいと〈<u>＊思うと→思って</u>〉、石獅子と写真を取りました。

(15)高校を卒業したらすぐアルバイトを始めようと思っていたが、短期アルバイトはなかなか探せなかった。大学に〈<u>＊入ると→入って</u>〉、社会経験を積み重ねたい気持ちは徐々に強くなっている。

(16)年末に、昔の友だちと会って、一緒にご飯を食べる。そして、母と一緒に買い物に〈*行くと→行って〉、きれいなものをたくさん買う。

(13)-(16)を見ると、いずれも学習者自身が経験した、「私」しか分からない事態である。そのため、常に「私」の目から出来事を見ていると言っていい。すなわち、視点は、外部からではなく、事態の内部にあると考えられる。

そして、「と」節の前後を観察すると、時間的に接近しているのみならず、前件が先に生じ、それに伴って、しかも、それがきっかけで後件が生じるという前件後件のつながりが強く読み取れる。そうすると、日本語母語話者の「二つのできごとを何らかの関連性を持つ二者として、その関連性の内実のいかんを問わずに、かつその関連性の内実をについて積極的に表現することなく、結びつける」(鈴木 1986:52)という捉え方と異なり、学習者はその強い関連性を積極的に表現していることになる。さらに、次に見る「*タラ→テ」と比べ、「*ト→テ」は 2 つの節のみで繋ぐものが圧倒的に多い。「2 つの節のみで繋ぐ」とは、「と」によって結ばれる 2 つの節が一体をなし、その前後にもその中間にもほかの節が挿入されにくいということを意味する。この点からも前件後件の強い関連性が窺える。

このように、「と」は学習者によって、視点を事態の内部に置き、前件後件の関連性を強く表現するときに使用される。それを図示すると、図 5-3 のようになる。(「P」「Q」はそれぞれ前件事態と後件事態を表す。)

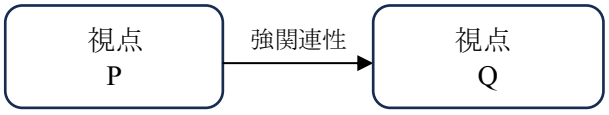

図 5-3　テ形との混用から見た学習者における「と」の捉え方
(連続・きっかけ)

また、アスペクトから「*ト→テ」を見ると、前件に表されたのは具体的な動作や変化である。そして、事態が完了したかどうかというと、(13)-(16)に示したように、前件事態と後件事態はほぼ同時的に発生、すなわち、「同時に起きる近接継起関係」(廖 2023a、2023b)という関係にある。このことから、後件は前件が完了していないうちに生起するということが考えられる。

5.3　「*タラ→テ」に関する分析と考察

5.3.1　「*タラ→テ」の誤用例

「*タラ→テ」(41 例)とは、(2)のように、学習者が「たら」を使用したが、校閲者によってテ形に訂正されたものを指す。(2)のほかには、(17)-(20)のような誤用がある。

(17)人気がある「校内網」というページの中に「80 後」の人たちにとって懐かしいものがいっぱい出てきました。〈*見たら→見て〉涙が出るほど感動しました。

(18)当時は、父と母は仕事でとても忙しく、毎日毎日、私が〈*起きたら→起きて〉学校へ行くときは、寝ていました。毎晩、私が寝るときは、まだ外で仕事をしていました。

(19)安いからたくさん買ったのではないだろう。そして、この人たちはめちゃくちゃ儲かった。他の人がこの光景を〈*見たら→見て〉、PENGYOUQUAN で商売し始めた。

(20)今、違う大学で勉強しているので、一年に二回しか会えません。大人に〈*なったら→なって〉、初めて気づいたのですが、彼らは両親からのプレゼントです。

(17)は、同主体で、前件は後件のきっかけである。「『たら』は前件・後件の動作主体(主語)が異なる場合が多く、同一主語の継起的な『きっかけ→結果』は『て』で表されることが多い」(市川 2010:364)ため、(17)は誤用と認められる。(18)と(19)は、動作の連続を表す。「意志的動作が連続する用法では、原則として『たら』は使われないが、後件が非意志的動作である場合には可能である」(前田 2009:74)という制約があるため、(18)と(19)は誤用と認められる。(20)は、前件後件に特に依存関係がないため、「たら」は不適切である。

5.3.2 「*タラ→テ」の誤用傾向

「*タラ→テ」を観察すると、前件後件の述語使用に誤用傾向が認められる。まず、前件を見ると、「外的行為」(19 例)、「知覚」(16 例)[6]が多く観察される。次に、後件を見ると、文末はいずれもタ形であるが、前件が「外的行為」の場合は「外的行為」が多く見られ、前件が「知覚」の場合は「感情」「思考」「外的行為」が多く見られるという違いが確認される。また、前件後件の主体(主語)を確認した結果、同主体(主語)が 37 例を占める。したがって、「*タラ→テ」は、(21)のようにまとめることができる。(「A」は主体(主語)を表す。)

(21)A は～[外的行為]たら、～[外的行為]た。
　A は～[知覚]たら、～[感情・思考・外的行為]た。

(21)に基づくと、「*タラ→テ」は連続またはきっかけを表す。戸村(1988)、日本語記述文法研究会(2008)、前田(2009)などによると、「たら」は、動作の連続を表すとき、後件

[6] ほかには、「変化」を表す「なる」「(大学に)入る」がそれぞれ 2 例、状態を表す「ある」「～ている」がそれぞれ 1 例ある。

が意志的にコントロールできない動作に限られるという制約があり、そして、きっかけを表すとき主体が主として異主体である。こうしてみると、(21)は、連続またはきっかけを表す「たら」の制約に違反している。(17)-(20)にその例を示したが、ほかにも(22)-(25)のようなものがある。

(22)私はそれを〈*聞いたら→聞いて〉、なぜかショックを受けた。
(23)「体に良さそうな産品ですから、買っておいた」と言った。その言葉を聞い〈*たら→て〉、私は彼女が騙されたことがすぐわかった。祖母に説明した後、彼女はちょっと不安になったようです。
(24)いっぱい遊んで、帰っ〈*てきたら→てきて〉、私たちにユニバーサルの魅力を教えてくれた。めちゃくちゃユニバーサルへ行きたくなってしまった。
(25)授業の後で一緒に自習室へ行った。時間は早い。それで 30 分もかかった。先生は直し終わって、もう一度確認〈*したら→して〉、わたしの手に渡した。私は「先生、一緒に食堂へ行きませんか」と聞いた。

5.3.3 「*タラ→テ」の誤用要因

なぜ「*タラ→テ」が生じるのか。「*タラ→テ」の要因を考えるとき、(24)と(25)のように、3 つ以上の動作の連続を表す誤用(15 例)から示唆を得ることができる。そのような誤用例として、さらに(26)-(28)がある。

(26)話し〈*終わったら→終わって〉、火鳥は羽を広げ、霧の中へ飛んでいった。
(27)肖という社会ニュースの記者がそのことを〈*聞いたら→聞いて〉、夫婦にインタビューしてから、父親に手術に関する状況を聞いて、直接ニュースを書いて新聞に載せた。
(28)確かに、最初は私も基礎知識なら、自分でできるだけ多くの本を読んで、要点を〈*まとめたら→まとめて〉、学習するという計画を立てた。

(26)-(28)は、3 つ以上の動作の連続を表すものであり、「たら」の位置はそれぞれ「話し終わったら」「聞いたら」「まとめたら」にある。(26)において、「話し終わったら」は時間的な限界点を持つ動作であり、「羽を広げ、霧の中へ飛んでいった」という 2 つの動作は、「話す」が完了したあとの動作である。同様に、(27)は、「たら」の前に表される動作は、「そのことを聞いて知る」というもので、「たら」の後に表される動作は「夫婦にインタビューする」から「新聞に載せる」というものである。前後は、「たら」によって時間的な切れ目が入れられ、前件の完了が明確である。(28)は、「多くの本を読んで、要点をまとめる」が終わったあと、学習するという事態であると思われる。これらの誤用の共通点として、「たら」によって隔てられる動作は継起的であり、前の動作が終わったあと、

後ろの動作が始まるということにある。すなわち、「たら」は、前件の「完了」を明確に表す働きとして使用されると思われる。

では、3 つ以上の動作でない場合はどうであろう。(29)-(32)にその例を示す。

(29)今、違う大学で勉強しているので、一年に二回しか会えません。大人に〈*なったら→なって〉、初めて気づいたのですが、彼らは両親からのプレゼントです。

(30)前の題目を書くとき、その作文の構想はもうあなたの心で無意識に成長しています。前の題目が〈*終わったら→終わって〉、作文を書き始めるとき、その構想はすでに一部分を完成しています。

(31)しかし、彼は若くして自殺してしまった。そのニュースを〈*聞いたら→聞いて〉、誰もがとてもおどろいた。人間は彼の死によって彼を忘れない。彼は人々の心で永遠にすばらしいひとだ。

(32)小さいとき、私の友達はアニメの中のキャラクターでした。私が七歳の時、となりのトトロを〈*見たら→見て〉、トトロが大好きになりました！

(29)は「大人になったあと」、(30)は「終わったあと」について述べるものである。同様に、(31)と(32)は、文脈的には、前文に提示した「聞く」「見る」の内容を「聞いたあと」「見たあと」に生じた感情を表していると捉えられる。これらの誤用も「たら」の前に来る事態の「完了」を著しく表すものである。

また、第 4 章の 4.3.2 節で述べたように、「*タラ→ト」における【作文】での誤用のほとんどがテ形にも訂正できるというものであった。このことから、「*タラ→ト」と「*タラ→テ」は、構文パターンが異なるとしても、誤用要因として前件の「完了」を強く表現するという点で共通している。このような結果に基づき、学習者における「たら」の捉え方は、図 5-4 のように示すことができる。(「P」「Q」はそれぞれ前件と後件を表し、「||」は「完了」を表す。)

図 5-4　学習者における「たら」の捉え方

5.4　「*バ→テ」に関する分析と考察

5.4.1　「*バ→テ」の誤用例

「*バ→テ」(11 例)は、学習者が「ば」を使用したが、校閲者によってテ形に訂正された誤用パターンである。(3)のほかにも、(33)-(35)のような誤用がある。

(33)汶川の大地震の時、皆が気持ちを一つに〈*すれば→して〉、大きな力となった。
(34)父と母は普段忙しいので、家事をする時間がほとんどありません。でも、祖母が家に〈*いれば→いてくれて〉、家事を手伝ってくれるのは大変助かります。
(35)今でも、時々〈*思い出せば→思い出して〉、早く家に帰ればよかったのにと自分を責め始めます。これは私の今までで一番悔しく、辛かったことである。

(33)は、過去一回の出来事であるため、「ば」は許容されにくい。(34)は、前件は後件の成り立つ条件ではなく、既に起きている事態を表すため、「ば」は不適切である。(35)は、後件に意志的動作が使用されており、「ば」のモダリティ制約に違反している。

5.4.2 「*バ→テ」の誤用傾向と要因

「*バ→テ」には、(33)-(35)以外に、(36)-(39)のようなものがある。

(36)一級試験は二回受けて、やっと合格した。第一回目の失敗や復習の辛さを〈*思えば→思い出して〉、自分は本当に強いと自慢しました。
(37)毎回頭を下げる時はいつも慰めてくれました。私のそばにいて、自信をくれました。今も〈*振り返れば→思い出して〉、思わず感動しています。その後、自信を持って練習することができました。
(38)その問題はたいへん大事です。しかし、女性は昔から今までずっと家事を〈*すれば→して〉、女性はずっと卑屈な生活をしてきました。
(39)ご連絡ありがとうございます。書いたものがお役に〈*立てば→立てて〉何よりです。

「*バ→テ」の前件述語を見ると、「思う」「振り返る」などの思考を表す動詞がもっとも多く、その誤用数は6例になる。それに続くのは「～する」の2例、「いる」「付ける」「(役に)立つ」のそれぞれ1例である。

後件を見ると、一定の動詞に集中することはないが、前件によって生じた結果が表されるもので、特に感情を表す表現が多い。また、文末はル形(8 例)に集中しており、主体(主語)は同主体(主語)に集中している。したがって、「*バ→テ」は、(40)のような構文パターンにまとめることができる。

(40)Aは～[思考]ば、～[感情]る。

「*バ→テ」は、第4章で見た「*バ→ト」と同じような構文パターンが見られることから、学習者によって、「ば」は「思考」と結び付けられていると考えられる。そして、これらの誤用は、文末にタ形が現れるかどうかを問わず、いずれも既に起きている事態である。特に、前件が「思考」で後件が「感情」の場合、「*ト→テ」「*タラ→テ」(文末にタ

形が現れる)と異なり、「*バ→テ」は文末にル形が現れるものが多い。それに加え、「今も」「今でも」との共起も確認されることから、「*バ→ト」と同様に、「*バ→テ」における「思考」は個別的な事態であり、一定の時間をまたがって成り立つもの[7]である。このような捉え方は、「時空間を超えて成り立つ一般的な因果関係の前件を表すことを基本とする」(益岡 1993b:25)という「ば」の特徴と異なるため、誤用の産出に関わると考えられる。

5.5 まとめ

5.5.1 テ形との混用から見た誤用傾向と要因

本章は、「と」「ば」「たら」とテ形との混用について分析を行った。その結果、以下の3点が明らかになった。

第一の点は、「*ト→テ」は、「A は～[知覚・思考]と、～[感情・思考]た」「A は～[変化]と、～[変化]た」「A は～[外的行為]と、～[外的行為]る」という構文パターンにまとめられることである。学習者は、「外部から観察する」「前件後件をただ結びつける」という日本語母語話者の捉え方と異なり、学習者は事態の内部に視点を置き、前件後件の強い関連性を積極的に表現する。このような違いがあるため、誤用が生じると考えられる。

第二の点は、「*タラ→テ」は、「A は～[外的行為]たら、～[外的行為]た」「A は～[知覚]たら、～[感情・思考・外的行為]た」という構文パターンにまとめられることである。3 つの動作の連続を表す誤用を中心に見た結果、前件の「完了」をより明確に表現するものとして使用されることが要因であると考えられる。

第三の点は、「*バ→テ」は、「A は～[思考]ば、～[感情]る」という構文パターンが比較的多く見られ、「*バ→ト」と同じ傾向を呈していることである。誤用要因として、「思考」と結び付けられたこと以外に、学習者は、「ば」の「一般的である」という特徴を理解しておらず、個別的で、一定の時間帯をまたがる事態を「一般的である」と捉えていることなどが挙げられる。

このように、「*ト→テ」「*タラ→テ」「*バ→テ」は、いずれもテ形との混用でありながら、異なる誤用傾向と要因が認められる。ここで、テ形との混用から見た誤用傾向と要因をまとめて示すと、図 5-5 のようになる。

第 4 章の図 4-5 と図 5-5 を照らし合わせると、「と」「ば」「たら」の誤用傾向と要因が一貫していると分かる。以下、学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方と条件の捉え方について考察する。

---

[7] 「思考」以外にも確認される。例えば、(38)において、「家事をする」という具体的な動作でなく、「ずっと」のように、事態が全体的に表される。

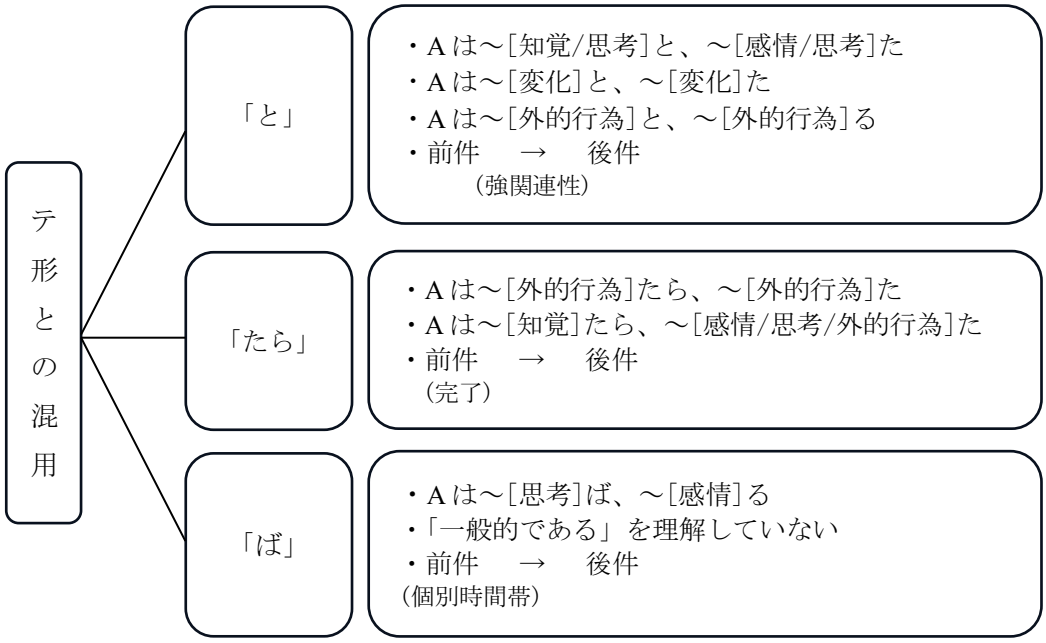

図 5-5　「と」「ば」「たら」とテ形との混用から見た誤用傾向と要因

5.5.2　学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方

第 4 章と第 5 章の考察に基づくと、「と」「ば」「たら」のいずれも一貫して関連するのは、前件の時間的局面の捉え方、すなわち、アスペクトの捉え方である。これまで述べた「と」「ば」「たら」の誤用における前件のアスペクトに認められた傾向をまとめると、次のようになる。

「と」は、具体的な動作や変化を表す。前件が生じるのに伴い後件が生じる、すなわち、前件後件が時間的に近接している。「たら」も具体的な動作や変化を表すが、前件が終わったあと後件が生じるという時間的前後関係を著しく表す。他方で、「ば」は、開始や終結などの展開を表さず、事態を全体的に描き出す。

ここで、3 形式のいずれにも多く観察される動詞「見る」を例とすると、「と」と「たら」の誤用では、「見る」は、「視覚によって人やものの存在を認識する」[8]という意味で使用されている。しかも、「と」の誤用では「見始めると同時に」、「たら」の誤用では「見たあと」のように、動作の展開に違いが認められる。それに対し、「ば」の誤用では、「見る」は、「何らかの判断をするために物事の状態や動きを把握する」という意味で使用されている。このような場合、「判断している」のように、一定の時間帯をまたがって成り立つ事態がまるごと表されており、動作の展開が感じられない。

[8] 「見る」の意味は、国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』（https://verbhandbook.ninjal.ac.jp）（最終参照日：2024 年 7 月 1 日）より引用している。以下同様。

このように、「と」「ば」「たら」の誤用における前件のアスペクトが異なる傾向を示している。そこで、2 つの角度から、学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方を整理することができる。一つは、前件が完了したかどうかである。もう一つは、前件が具体的な動作や変化を表すかどうかである。

前件が完了したかどうかを見ると、「と」と「たら」に違いが認められる。「たら」は「前件が完了した」を表す傾向にあるのに対し、「と」は「前件が完了していない」を表す傾向にある。「完了した」を〔+完了〕と記し、「完了していない」を〔−完了〕と記すと、「たら」は〔+完了〕であり、「と」は〔−完了〕である。

前件が具体的な動作や変化を表すかどうかを見ると、「と」「たら」と「ば」に違いが認められる。「と」と「たら」の 2 形式は具体的な動作や変化を表す傾向にあるのに対し、「ば」は具体的な動作や変化の性質を欠けており、事態全体を表す傾向にある。具体的な動作や変化を表すことを〔+動的〕と記し、そうしないことを〔−動的〕と記すと、「と」と「たら」の 2 形式は〔+動的〕であり、「ば」は〔−動的〕である。

このような違いに基づき、学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方を表 5-1 のように示すことができる。

表 5-1　学習者における「と」「ば」「たら」の捉え方

	〔−完了〕	〔+完了〕
〔+動的〕	「と」	「たら」
〔−動的〕	「ば」	

なぜ学習者がアスペクトに基づいて「と」「ば」「たら」を使用するのか。その可能性として、接続方法との関わりを考えることができる。「と」に動詞基本形で、「たら」にタ形で接続するという接続方法であるが、学習者によって、「動詞基本形が非過去、タ形が過去」と関連づけられたところ、「と」は〔−完了〕、「たら」は〔+完了〕と捉えられている。そうすると、「と」と「たら」に動作や変化を具体的に表す役割を分担させ、その一方で、事態を全体的に描き出す役割を「ば」に振り分けていることになる。

5.5.3　学習者における条件の捉え方

さらに一歩進めると、テ形との混用に基づき、学習者が捉えている条件の意味を考えることができる。もし学習者が日本語母語話者と同じ捉え方をしているとすれば、テ形との混用がこのように数多く観察されることはないはずである。

そこで、「*ト→テ」と「*タラ→テ」に目を向け、学習者が捉えている条件とは何かについて、次のような例を通じて考えたい。

(41) 春に〈*なると→なって〉、恋の季節に入りました。最近社内の女子同僚が恋愛や結

婚などの良いニュースをどんどん聞かせてくれました。

(42) 1月 20 日、私は上海からの列車に乗って、朝８時ごろやっと昆明に着いた。ひどく疲れたから、友達と〈*合ったら→会ってから〉、ただ食べたり、話したりした。夜寝る前に、21 日動物園に行くことになった。

(41)と(42)を例とすると、日本語母語話者は、前件が先に生じ、その後後件が生じたという、ただの時間的前後関係として理解し、前件後件につながりがあるという感じはしないであろう。なぜなら、日本語母語話者が捉えている条件というのは、一般条件や反復条件はともかく、過去一回の出来事を表す事実条件の場合も、「他人から見ても成り立つ」のように、普遍的に成り立つ知識・常識[9]に基づくのが普通である。その裏付けは、「と」「たら」[10]が事実条件を表すときに使用されるのは、基本的に紀行文や小説に限られるという点にある。紀行文は、旅先での経験や感想を文章にしたものではあるが、小説と同じく「『全知のもの』といった地位を占める」(蓮沼 1993:88)という物語世界である。一方、日常生活において、自分自身が経験したことについて、自らの行動、感情、感覚などをそのまま述べる場合、「と」「たら」は使用されにくい。こうしてみると、条件か否かを判断するとき、日本語母語話者は「知識の語り」[11]を基本とする。

しかし、(41)と(42)において、前件後件のつながりは、「春に恋愛や結婚した女性同僚が多かった」「ただ食べたり、話したりしたのは、友達と会った後」というように、学習者自身によって付与されるものと思われる。このような場合は、個人体験や文脈に依存しており、学習者自身にすれば、つながりのあるものであっても、他人にとってはその表現意図が分かりにくいことになってしまう。すなわち、普遍的に成り立つ知識・常識が成り立たないことを意味する。このように、条件か否かの判断は、日本語母語話者は「知識の語り」に基づくが、学習者は「知識の語り」[12]にも「体験の語り」にも基づくという違いが認められる。その結果、学習者における条件の範囲は、日本語母語話者より広範囲なものとなる。

この違いが生じる原因について、1 つの可能性として、中国語の複文の影響を挙げることができる。中国語では、複文を表すとき、関連詞を使用するかどうか、使用した場合それを前件と後件のどこに使用するかは柔軟である。その証拠として、日常生活の話しこと

---

[9] 庵他(2001:398)は、因果関係のうち、条件は、前件が未実現で前件と後件の意味関係が順接(＝社会通念の通り)の場合であると述べている。

[10] 宮部(2011、2017)によれば、「と」は地の文で〈かたりのテクスト〉、「たら」は会話文で〈語り合いのテクスト〉に多用されるという違いがある。

[11] 「知識の語り」と「体験の語り」は、「た」の観察性(言語情報区別)の特徴について述べている定延(2021:6)より援用したものである。

[12] 例えば、第 6 章で時間表現との混用に関する考察において、「＊ト→時間表現」に一般条件や反復・習慣条件を表すものが多く観察される。このことから、学習者は普遍的に成り立つ知識・常識に基づくこともある。

ばにおいて関連詞を一切用いない無標形式を多用すること(姚 2008)を挙げることができる。無標形式の場合、仮説か事実か、条件か逆接条件かなどは、個人体験や文脈に強く依存される。そのため、どのような事態を表しているのかを読み取るには、邢(2001)によると、「明确语境」「配上标志」(まず文脈を明らかにし、それから関連詞を付け加える)という手順が必要となる。こうしてみると、学習者が日本語で表現するときも常に個人体験や文脈に依存する背景として、中国語の言語感覚に影響されていることが考えられる。

第 6 章　「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用に関する考察

6.1　はじめに

第 4 章と第 5 章では、「と」「ば」「たら」の間の混用と、「と」「ば」「たら」とテ形との混用について論じた。そのほかに、数からいうと多いとは言えないが、数十例に達したやや周辺的なものがある。その代表として、逆接条件表現「ても」、時間表現[1]との混用(以下、「*X→テモ」「*X→時間表現」と記す)及び条件表現の二重使用が挙げられる。

第 3 章の表 3-3 によると、「*X→テモ」が 47 例(8.62%、n＝545)あり、「*X→時間表現」が 44 例(8.07%、n＝545)あり、条件表現の二重使用は 28 例(5.14%、n＝545)ある。本章で対象とする条件表現の誤用全体の 5%以上を占めるものであるため、なぜそのような誤用が生じるのかを論じる価値がある。

第 4 章と第 5 章で論じた「と」「ば」「たら」の誤用傾向及び要因は、本章で取り上げるものにも通用する。他方で、条件表現の誤用を多角的に見ることで、第 4 章と第 5 章で述べたこと以外の要因も明らかにすることができる。以下、6.2 節では「*X→テモ」、6.3 節では「*X→時間表現」、6.4 節では条件表現の二重使用を取り上げ、分析と考察を行う。

6.2　「*X→テモ」に関する分析と考察

逆接条件表現「ても」は、「と」「ば」「たら」などによって表される条件文の否定として捉えられることが多いが、前田(1993)は、(1)のように「テモ文を用いても順接の条件文でも、かなり近い意味を表す場合がある」[2]ことを指摘している。

(1)a:そんなこと言われても、困る。
　　b:そんなこと言われたら、困る。　　(前田(1993:151)より引用)

「*X→テモ」を扱った先行研究として、市川(2010:460)は、「学習者の母語で、条件を表す表現に順接と逆接の区別がない場合は、その干渉を受けているのかもしれない」と指摘している。本研究は、学習者の母語を中国語に限定するものであるため、ここでは「*X→テモ」において母語である中国語の影響が見られるか否かを検証したい。

[1] 本研究における「時間表現」とは、時間節を導く表現を指す。
[2] この場合「ても」を使うかどうかは、話し手の受け取り方や心理による(市川 2010:365)という。

6.2.1　「*X→テモ」の誤用実態

第 3 章の表 3-3 によると、「*X→テモ」（X＝「と」「ば」「たら」「なら」）、すなわち、逆接条件表現「ても」との混用は 47 例ある。その 47 例を見ると、「と」「ば」「たら」の誤用が 45 例ある。その詳細は、表 6-1 に示すとおりである。

表 6-1　「*X→テモ」の詳細（単位：例）

*ト→テモ	*バ→テモ	*タラ→テモ
17	11	17

表 6-1 に示したように、「*ト→テモ」と「*タラ→テモ」は 17 例あり、「*バ→テモ」は 11 例ある。（２）と（３）に「*ト→テモ」の誤用例、（４）と（５）に「*バ→テモ」の誤用例、（６）と（７）に「*タラ→テモ」の誤用例を示す。

（２）その中で一番難しい部分は歴史だと思います。事件も人物も多くて日本語を〈*詠むと→読んでも〉理解できないところが少なくないです。これはやはり自分の勉強不足が原因です。

（３）筆者は、「本当につまらない贈り物を〈*貰うと→貰っても〉、相手に感謝するか」という質問を日本人に聞いたら、ほぼ 100％の回答者は「はい、誉める言葉を言う」と答えた。

（４）光陰矢のごとし、確かに、四年間の大学生活はあっという間に過ぎ去っていく。入学式の日、今〈*思えば→思っても〉、ありありと目に浮かぶ。

（５）その最大の特徴は平均時速が 300 キロに達する速度です。高速鉄道は飛行機を除いて、もっとも早い乗り物と〈*言えば→言っても〉、否定する人はいないでしょう。

（６）否定し続けてこそ成長していくことができると思います。最後に、過ちを犯すことはだれでも避けられない為、〈*間違ったら→間違ったとしても〉落ち込んだりする必要はありません。

（７）でも、日本語がぜんぜんわからない私が、そのまま日本へ〈*行ったら→行っても〉、なにもできない。それで私ははっきり分かった。

「と」「ば」「たら」を代表とする条件文は、「前件と後件の因果関係を予測したもの」（小泉 1987：4）である。逆接条件のテモ文は「先行する条件文（または裏にある常識的な条件関係を表す文）における条件・帰結の関係が否定され、通常なら成立しないだろうと予想される事態同士が、条件的な関係を取り結んだもの」（前田 2009：192）である。両者の関係は、（８）のように示すことができる。

（8） 通常の条件文＝ 水にぬれたら こわれる
↓ 《否定》
逆条件文 ＝ 水にぬれても こわれない （前田 2009:192）

このような違いに基づき、（2）を見ると、通常「読むと理解できる」という条件・帰結の関係が考えられる。しかし、（2）は、「事件も人物も多くて」のため、「読んでも分からない」のように、その条件・帰結が否定されるべきである。この場合「と」は不適切である。（3）を見ると、通常「本当につまらない贈り物を貰うと相手に感謝しない」という条件・帰結の関係が考えられる。（3）は、「貰っても感謝するか」のように、その条件・帰結の関係が否定されるべきであるため、「と」は不適切である。（4）-（7）も同様である。このように、「*X→テモ」は否定すべき条件・帰結の関係が否定されていないという点で共通している。

（2）-（7）のように、「*X→テモ」における「と」「ば」「たら」の捉え方にも、第 4 章と第 5 章で論じたことが当てはまるが、その一方で「*X→テモ」には論じてきた誤用パターンと異なる誤用傾向と要因もあり、論じる価値がある。

6.2.2 「*X→テモ」の誤用要因

日本語学習者における条件文と逆接条件文の混用について、市川(2010:365)は、「If it rains, I will go.」という文を挙げ、「『雨が降ったら/降っても行く』の両方で表すことができるので英語話者をはじめ母語にそのような区別を持たない学習者は、順接と逆接の条件文を混同しやすいと思われる」と述べている。

英語のような状況は中国語にも認められるので、「*X→テモ」は中国語の影響に起因する可能性がある。中国語の複文(复句)には、条件複文(条件复句)、仮設複文(假设复句)、譲歩複文(让步复句)などがある。譲歩複文は、「偏句承认某种事实，作出让步，正句从相反的角度说出正面的意思(偏句がある事実を認めて譲歩し、正句が反対の角度から逆の意味を述べる)」(刘他 1983:555)[3]というものであり、日本語の「ても」を代表とする逆接条件文に対応する。しかし、それを仮設複文の下位分類とする研究もあれば（鳥井 2004、王麗英 2010 など)、仮設複文と条件複文と同じように主従複文の下位分類とする研究(刘他 1983、王亜新 2011 など)もあるように、研究者によって譲歩複文の位置づけは異なる。邢(2001)は、その分類の違いについて、前後関係を見ると譲歩複文に分類されるが、前件のみを見ると仮設複文に分類される[4]と指摘している。このように、譲歩複文の位置づけに曖昧なところがあることが分かる。

また、普通順接の仮設複文に使用される関連語句「如果…就」は、日本語に訳する場合、全く「ても」で表現できないわけではない。（9）は、その例である。

---

[3] 訳文は、劉他(1991:738)より引用したものである。
[4] ただし、邢(2001)は、前件のみを見るだけでは「同一性」「徹底性」が不足していると述べている。

(９)a:如果他吃一碗配有黄瓜丝的面条汤,不到两个小时就可以走完腹内全部路程排泄出来…《活动变人形》

b:キュウリの千切りをいれた汁ソバを食べても、二時間もまたずに腹部内の全行程を通って排他されてしまい、…『応報』　　(新田(2021:114)より引用)

(9a)は、「面条汤」を食べると早いうちに消化してしまうことを、順接の関係を表す「如果…就」で表現している。ところが、その順接の関係が(9b)を見ると、「ても」で訳されている。このような訳文ができたのは、文脈に基づいた訳者の判断ではあるが、中国語と日本語において表現の不対応が見られることも否定できない。

「*X→テモ」を見ると、(10)のように、中国語で表現すれば、「如果被问到想成为什么样的人,(我)没有明确的答案」という順接の関係で表すことが可能であるが、日本語では逆接の関係でなければならない。また、(11)は、中国語の「无论…都」などで表現できるが、このような表現は、条件複文の下位分類に位置づけられる「无条件复句(無条件複文)」(刘他 1983)であり、中国語では順接の関係として捉えられやすい。

(10)人の職業、品性、貧富などは外部の原因で変わることがあります。だから、どんな人になりたいかと聞かれ〈*ば→ても〉、明確な答えはまだありません。

(11)いい会社に就職して、自分でお金を稼いで自分を養えばいいのではないでしょうか。自分のお金だから、どう〈*使えば→使っても〉自分の自由です。

さらに例を挙げると、次のようなものがある。(訳文は筆者による。「？」は不自然であることを表す。)

(12)a:何かあったのか、手続きはどうすればよいのか、十日間を超えて、〈*手続きしないと→手続きしなくても〉大丈夫なのか、という不安を持って、大使館に連絡してみました。

b:**如果**不办手续**的话**没事吧?

c:**即使**不办手续**也**没事吧?

(13)a:確かに大学生活は懐かしいが、ひたすら過去のことの思いに〈*浸ったら→浸っても〉何にもならないだろう。

b:**如果**一直沉浸在过去的回忆里**就**毫无意义。

c:**即使**一直沉浸在过去的回忆里**也**毫无意义。

(14)a:人間の欲望があるから、人間の生産力は強くなっています。でも、欲望だけ〈*あれば→あっても〉、人間は人間じゃありません。道徳と哲学などもあります。

b:但是，**如果**只有欲望的话，人**就**不再是人。

c:？但是，**即使**只有欲望的话，人**也**不再是人。

(12)と(13)を見ると、中国語で表現する場合は、順接の「如果…的话…」「如果…就…」でも逆接の「即使…也…」でも自然であるが、日本語で表現する場合は、逆接条件表現「ても」が自然であり、順接の条件表現は不自然である。そして、(14)の場合は、中国語で表現すると、順接のみが自然である。このように、中国語と日本語においては、順接・逆接の表現形式の間に対応していない点があり、それが誤用の産出に関わると考えられる。

「*X→テモ」と対照的な「*テモ→X」(5例)を見ると、次のような誤用がある。

(15)私は５歳で、まだ学校に通っていなかったとき、お父さんに数学を教えられた。「１～10」の数字が覚えられ〈*なくても→なければ〉、ご飯を食べないでください」と言われたこともあった。

(16)しかし、自分のすきなことであっても、たとえすこしだけでもだれかに押し付けられる感じが〈*あっても→あると〉、人間はそれを避ける傾向にあります。これは人間の基本的な心理構造です。

(15)と(16)[5]は、前件後件が順接の関係にあるが、「ても」が使用された例である。高永(2023)は、学習者は対立する２つの事態を述べる場合、前件事態に対し程度の補充説明を行うときには「ても」を使用すると指摘している。そして、順接条件表現との混用要因について、論理的関係の理解や社会的観念に相違があるという可能性を述べている。「*テモ→X」の前件を見ると、確かに(15)には「１～10」、(16)には「すこしだけでも」という程度の低い表現が現れている。したがって、前件に程度の補充説明を表すか否かがポイントであると思われる。

「*テモ→X」を考え合わせると、「*X→テモ」は、邢(2001)による「前件のみを見ると仮説複文に分類される」という指摘が示唆するように次が考えられる。つまり、学習者は「と」「ば」「たら」を使用するとき、前件後件の論理的関係よりも前件に注目し、その結果、学習者は、逆接にあるべきであることに考えが及ばず、ただ仮定の意味を表してしまう。そして、陳(2013)は、「ても」と「如果…也」「即使…也」との対照から、「ても」の不使用は、「極端的な状況」でなく「比較的中立的な状況」であると学習者が認識していることや、中国語では「相手の期待」を考えなくてもよいことが関わると述べている。このことから、学習者が「ても」でなく「と」「ば」「たら」を使用するのは、特に程度の補

---

[5] (15)と(16)のほかに、(ｉ)のような誤用が１例ある。

(ｉ)先生たちに頼んで、お二人と相談しても問題はございませんし、もし先生に頼める人がいれば、〈*推薦していただいても→推薦していただけると〉ありがたいです。

(ｉ)について、高永(2023)は、学習者が２つの事態の並列を表していると指摘している。

充説明を行う必要がないためであると考えられる。

このように、「*X→テモ」は、日本語と中国語に表現形式の不対応があること、学習者が前件に注目した結果、論理的関係に考えが及ばないこと、そして、程度の補充説明を行う必要がないことなどが要因として考えられる。

6.3 「*X→時間表現」に関する分析と考察

条件表現と時間表現の類似関係については、豊田(1978、1979a など)、戸村(1988)、馬(2021)などで多く論じられている。そこでは(17)と(18)のように前件が先に生じてから後件が生じたという時間的関係や、(19)と(20)[6]のように前件の最中に後件が生じたという時間的関係が論じられている。

(17)フレデリックは家に帰ると、まっすぐに寄宿生の部屋に向かった。
(藤嶋美路『小説ショパン』)

(18)ところがどうじゃ、この島に来たら、拙僧良き伴侶に恵まれましたわ。
(鷹野良宏『パレットの指の穴より』)

(19)助手が投票の手順を確認していると、迫撃砲弾の炸裂音が数十メートルの近さで聞こえた。
(川上泰徳『論座』)

(20)ほんの少し前に出ていったって話だったから捜していたら、ギャアギャアわめく声が聞こえたんで。ちなみに言っておくけど、いま街中、君の噂で持ちきりだよ。
(佐々原史緒『かくて背信の旅はおわる』)

仮説条件や一般条件を表すとき、「と」「ば」「たら」はいずれも前件が成立してから後件が成立するという関係を表し、前件後件は時間的前後関係にあると言える。一方、「なら」は、前件が後件に先行するのみならず、前件後件が同時的である、または、後件が前件に先行するという時間的関係も表せる。

6.3.1 「*X→時間表現」の誤用実態

「*X→時間表現」(44 例)には、訂正結果として、「とき(に)」「たびに」「際」「てから」「あと」「前に」が認められる。誤用例を挙げると、(21)-(27)のようなものがある。

(21)例えば、電車に乗るときだ。家から学校まで行く〈*と→時〉、必ず電車に乗る。

(22)これはみんなすでに終わったことなので、日本語に訳す〈*と→際〉全部「た」を使う。

(23)一般的に言えば、ある国の文化について〈*論じれば→論じるとき〉、その国の文学

[6] (17)-(20)は『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』から抽出されたものである。

は必ず口にされる。その違いはその文学に関する知識が多いかどうかという事だ。

(24)その時、日本のドラマやアニメを見る〈*と→たびに〉、登場人物の制服がすごく羨ましかった。

(25)最初は我がクラスはチームワークでも成績でも失敗していたが、黄先生が〈*来たら→来てから〉いろいろ工夫したりみんなと一緒に頑張ったりしたおかげで我がクラスは一番のクラスと言われるようになった。

(26)しかし、買ってきた本にはメモは一つもなかった。やはり自分だけのためではなくて、〈*読んだら→読んだあと〉、他人に読んでもらう時に、他人が読みやすいように、メモをつけないようにしたのだろう。

(27)中国では、長い文明を持つ国だから、いつでも、両親が食べ始める〈*なら→前に〉、子供たちは食べることができません。

(21)-(24)は、「前件・後件に特に依存関係がなく、その『時点』を表せばいいので、『とき』を使ったほうがよい」(市川 2010:460)という例である。(25)と(26)は、「時間的前後関係が明確で、かつ引き続き行う動作」(市川 2010:364)であるため、「てから」「あと」がふさわしい。(27)は、「両親が食べ始めてから子供たちは食べていい」という時間的関係を表すため、「前に」がふさわしい。

「主節の動きや状態が成立する時を別の事態との関係によって限定する従属節」(日本語文法記述研究会 2008:165)という時間節を表す表現は多様であり、その中には、同時を表すもの、期間を表すもの、前後を表すものがある。日本語記述文法研究会(2008)における時間節の分類に基づき、「*X→時間表現」の詳細を見てみると、表 6-2 のようになる。

表 6-2 「*X→時間表現」の詳細(単位:例)

	同時		反復	「あと」類		「まえ」類	合計
	(る)とき	(た)とき	たびに	てから	あと	前	
*ト	13	3	2	-	2	-	20
*バ	2	-	1	-	-	-	3
*タラ	4	5	-	9	1	-	19
*ナラ	1	-	-	-	-	1	2
合計	20	8	3	9	3	1	44

表 6-2 から、「*X→時間表現」は、主に、「と」の誤用(20 例)と「たら」の誤用(19 例)に集中していることが分かる。そして、訂正結果に基づくと、多く見られるのは、「(る)とき」「(た)とき」「てから」である。「(る)とき」は 20 例であり、主として「と」の誤用

(13 例)[7]に現れる。「てから」は 9 例であり、全て「たら」の誤用である。「(た)とき」は 8 例であり、その中の 5 例が「たら」の誤用である。この結果に基づき、「*X→時間表現」は(28)のようにまとめることができる。

(28)a:*ト→ルトキ
b:*タラ→テカラ、タトキ

6.3.2 「*ト→ルトキ」の誤用要因

まず、「*X→時間表現」に多く認められる「*ト→ルトキ」(13 例)[8]について考察する。「*ト→ルトキ」の例として、(21)と(22)のほかに、次のような誤用例がある。

(29)専用の二人称代名詞は特にないが、「あなた」の使用範囲は男性より広い。家族で一般的に妻が夫を呼びかける〈*と→時〉「あなた」を用いることが昔から日本人の特徴になってきた。
(30)前に述べた現象のほかに「了」はまた特有の使い方があり、日本語に訳す〈*と→際〉「た」と訳さない場合もある。
(31)そして、仕事が終わらないほど多い〈*と→時には〉、家に帰れないこともある。しかし、疲れるほど仕事をすれば、給料もそれに応じて上がるはずだ。
(32)それに、こんなにひどい天気に旅をするのはほんとうにたいへんですね。今度、家から苏州へもどる〈*と→時は〉、天気予報を見るほうがいいと思います。

既に述べたように、「と」は仮説条件、一般条件を表すとき、前件が成立してから後件が成立するという時間的関係でなければならない。しかし、(29)-(32)における「*ト→ルトキ」の時間的関係を見ると、(29)は、前件「妻が夫を呼びかける」と後件「『あなた』を用いる」が同時的である。(30)と(31)は、後件が帰結を表す表現は適切であるが、「場合もある」「こともある」を使用したことで帰結になっておらず、さらに前件後件の時間的関係も不明確である。(32)は、「天気予報を見る」のは、「家から苏州へもどる」前、ま

---

[7] 「際」は、「とき」と近い形式であり、文体に特徴がある(日本語記述文法研究会 2008:174)というものである。そのため、「際」に訂正された誤用(2 例)は「*ト→ルトキ」に入れることができる。
[8] ここで、「*トキ→ト」も見ておく。『YUK 作文コーパス』には、「*トキ→ト」が 1 例のみある。

(ⅰ)最初はただお客さんの注文を聞いたり、料理を出したりするだけだから、簡単だと思っていた。しかし、実際に〈*やるとき→やってみると〉、難しい。

(ⅰ)は、「実際にやることによって難しいと気付いた」ことを表すため、「と」がふさわしい。そして、「実際にやる」と「難しい」は、時間的には接近している(すなわち、ほぼ同時的である)が、どのような事態なのかというと、その時の事態である。こうしてみると、学習者における「とき」の使用は、「実際にやる」を明確に述べるかどうかと関わる可能性がある。

たは、その時である。このような場合、「と」は不適切である。

「*ト→ルトキ」にどのような構文パターンがあるのかを見ると、前件が一定の表現に集中することはないが、「外的行為」が 8 例で比較的多い。それに続くのが「～たい」の 2 例、「悪い」と「多い」の 1 例であり、「と」の前にイ形容詞形式が見いだせる。他方、後件は動作(9 例)が比較的多く現れ、文末はル形である。「*ト→ルトキ」は、(33)のように表すことができる。

(33)～[外的行為/状態(イ形容詞形式)]と、[動作]る。

「レアリティー」から見ると、「*ト→ルトキ」は、(29)-(32)のように、一般的に成り立つ事態や繰り返しの事態、すなわち一般条件や反復・習慣条件を表すものが多い。一般条件や反復・習慣条件を表すとき、「と」は前件の完了を条件に含み(久野 1973、前田 2009 など)、前件後件がいつも・自然に成り立つが、通例、同時的時間関係を表すことはできない。しかし、「*ト→ルトキ」を見ると、前件後件の時間的関係は同時的か、不明確である。このような場合なぜ学習者は「と」を使用するのかというと、それは、第 4 章と第 5 章で見た学習者における「と」の「前件後件の強関連性」「前件が完了していない」という捉え方が反映されていると考えられる。それが原因で、学習者が「と」の時間的前後関係に対する意識が欠けていることが考えられる。

6.3.3 「*タラ→テカラ、タトキ」の誤用要因

次に、「*タラ→テカラ、タトキ」を見る。「*タラ→テカラ、タトキ」には、過去一回の出来事を表すものが 13 例、そうでないものが 1 例ある。したがって、以下、過去一回の出来事を表す誤用を中心に考察する。

(25)と(26)のほかに、「*タラ→テカラ、タトキ」の誤用例を挙げると、(34)-(37)のようなものがある。

(34)そうしなければ、午後になると、きっとうとうとと眠気を催してしまう。日本人は昼寝しないということを〈*聞いたら→聞いたとき〉、最初はあんまり信じていなかった。眠くないのだろうか。

(35)ある新聞記事によると、地震が起きた時、彼女と子供はまだ起きていなかったのです。地震だと〈*分かったら→分かった時〉、彼女はとっさに自分の体で子供に覆いかぶさって守りました。

(36)私の父は私にとても厳しい人でした。いつも私を怒りました。でも、私が高校生に〈*なったら→なってから〉、彼がだんだん優しくなりました。

(37)「○○」のメンバーたちは「男子校自習室の日常」という人気番組に出演しました。とても面白くて、これを〈*見たら→見てから〉、「○○」を知って好きになった人は

たくさんいます。

「*タラ→テカラ、タトキ」の構文パターンについて、前件は知覚、思考などを含む動作(11 例)が多く見られる。後件は、(34)-(37)のように、様々な表現が現れるが、文末はタ形(10 例)に集中している。したがって、「*タラ→テカラ、タトキ」は、(38)のようにまとめられる。

(38)～[動作]たら、～た。

「たら」は、前田(2009:77)によれば、事実条件を表すとき単に連続する 2 つの事態を並べるものではなく、「前件が『契機』となって、後件が生じたことを表す。そこでの契機とは、一つは原因として、後件にとって直接影響を及ぼす事態として後件を引き起こすが、もう一つは、後件事態の直前の動作として、いわば『合図的』な契機として、後件がその後で引き起こされると言うことを表す」ことになる。そして、日本語記述文法研究会(2008)によると、「(た)とき」は、後件の事態の成立する時間が前件の事態の成立する時間の直前・直後または同時を表す(p171)表現であり、「てから」は、「単に時間的前後関係を述べるのではなく、2 つの動き、事態の間の順序が重要であることを伝える表現」(p206)となる。

「*タラ→テカラ、タトキ」と対照的な関係にある「*テカラ→タラ」[9]についても見ておこう。「*テカラ→タラ」は 10 例あり、例を挙げると(39)や(40)がある。(39)や(40)が示すように、学習者の誤用において、「てから」は時間的前後関係に加え、「後件が生起するには、前件が先に生起する必要がある」という「順序が重要である」という点に特徴がある。

(39)高校のとき、大学のときの恋愛はもっとも純粋で美しいと言われたので、いつも大学生に〈*なってから→なったら〉、必ず好きな人を見つけて、恋愛をしようと思っていた。

(40)その後、師匠はコップ約三分の一のお湯をコップに注ぎ、コップを洗浄する。洗浄〈*してから→したら〉、水を捨てる。茶勺で茶筒から一定の分量の茶の葉を取ってコップに入れる。

それに対し、「*タラ→テカラ、タトキ」は、(34)-(37)のように、前件が終わって引き続き後件が起こるという単なる時間的前後関係、すなわち「～あとで」を表すものである。このことから、「*タラ→テカラ、タトキ」は、第 4 章と第 5 章で見たように、学習

[9] 『YUK 作文コーパス』に「*タトキ→タラ」は認められなかった。そのため、ここでは「*テカラ→タラ」のみを考察する。

者は「たら」を使用し前件の「完了」をより明確に表現することが要因であると考えられる。

以上をまとめると、「*X→時間表現」は主として「と」の誤用と「たら」の誤用に観察され、「*ト→ルトキ」と「*タラ→テカラ、タトキ」の 2 誤用パターンにまとめることができる。「*ト→ルトキ」は、前件後件の時間的関係が問題とされ、学習者における「と」の「前件後件の関連性が強い」「前件が完了していない」という捉え方に起因すると考えられる。他方、「*タラ→テカラ、タトキ」は、前件後件に依存関係がなく「～あと」の意味が読み取れることから、学習者における「たら」の「前件が完了した」という捉え方に起因すると考えられる。また、市江(2020)は、英語・韓国語を母語とする日本語学習者と比べ、中国語を母語とする日本語学習者だけに「概念の転移」が見られ、彼らにおける条件節と時間節の受容度に違いが認められないと指摘している。こうしてみると、中国語の言語感覚の影響も無視できないと思われる。

6.4　条件表現の二重使用に関する分析と考察

条件表現の二重使用は、訂正結果として、テ形、中止形、「てから」、「ので」などが認められる。本節では、条件表現の二重使用をまとめて取り上げる。

6.4.1　条件表現の二重使用の誤用実態

第 3 章の表 3-3 によると、条件表現の二重使用は 28 例ある。その例として、(41)-(44)を挙げる。

(41) もし時間を後戻りすることが〈*できると→できて〉、もう一度大学生活を体験できたら、私は大学の時間を大切にしたい。

(42) そして子供は従順にごみをごみ箱に捨てた。その子供はずっとこのような教育して〈*もらったら→もらい〉、成長したらきっとマナーよく静かになるはずだ。光陰矢のごとしと言う通り、瞬く間にもうすぐ大学生活が終わる。

(43) それ以外にも、彼女は家族と離れられません。仕事が安定〈*したら→してから〉、小林さんが彼氏と結婚すれば、会社も理解してくれます。

(44) 今の私は盛んな時で、研究は難しいけどやる気を持っている。でも、もし自分が 30 歳になったら、家庭もある〈*と→ので〉、多分院生になって研究をやる自信がない。

(41)-(44)において条件表現が二重に使用されている。そして、訂正箇所を見ると、1 つ目の条件表現が訂正されたもの(24 例)が多く、訂正結果を見ると、テ形に訂正されたもの(18 例)が多い。蓮沼他(2001)によると、2 つ以上の条件をつなげる場合は(45)のよう

になるが、文脈的にはそれ以外訂正結果も可能であろう。

(45) X1 テ X2 バ・タラ Y

日本語母語話者は条件表現を二重には使用しないのであろうか、使用するとすれば、どのように使用するのか。次では、日本語母語話者の使用状況を確認する。

6.4.2 日本語母語話者の使用状況

蓮沼他(2001)が指摘しているように、2 つ以上の条件をつなげる場合にはテ形などを使用するのが一般的であるが、日本語母語話者が全く条件表現を二重に使用しないわけでもない。例えば、田中(2005:282)は次の(46)と(47)を挙げている。(「〰」は筆者による。)

(46)地盤が弱い所だと、すぐに耐震診断、補強をしないと生命に関わる。

(『読売新聞』04.6.17)

(47)同小のような学校を「地域運営学校」と呼ぶ。作るかどうかは教育委員会の判断だが、地域の要請があれば、合理的な理由がないと拒めない。

(『読売新聞』04.6.18)

田中(2005:282)は、(46)については「最初の『ト』は主題の設定をあらわし、『(の)場合』のように置き換えたほうが分かりやすい」と述べ、(47)については「『レバ』(<大条件>)に『ト』(<小条件>)が包摂される」と述べている。このように条件表現が二重に使用されることは不可能ではない。

では、日本語母語話者はどのように条件表現を二重に使用するのか。この問題を明らかにするために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』で調べてみた。条件表現の用例 4000 例をランダムに抽出した結果、文法化が進んだ「～によると/によれば」「～といえば/というと」「～なければならない/ないといけない」「それなら」[10]などの用例を除くと、条件表現が二重に使用されていたのは 62 例である。この結果が示すように、日本語母語話者が条件表現を二重に使用するのは非常に少ないことが分かる。そして、日本語母語話者がどのようなとき条件表現を二重に使用するのかを見ると、次のような構文[11]のときに許容されやすいようである。(「〰」は筆者による。)

---

[10] 実際に、次のように「～なければならない」が使用されるものは多く見られる。

(ｉ)このような場合は本当ならば、冷静にならなければいけないのだが、死を目の前にしてはなかなかそうもいかなかった。

[11] 蓮沼他(2001)に従い、「X1」は 1 つ目の条件、「X2」は 2 つ目の条件、「Y」は後件によって表される事態、すなわち「結果」を示す。

【X1/X2 は名詞に接続する】

(48) ただし、動名詞に主語が表されており、それに対照的強勢（contrastive stress）が置かれると、この制限は作用しない。また、疑問文であれば、意味上の主語は聞き手 you でなければ非文法的となる。（荒木一雄編『英語正誤辞典』）

【X1/X2 は前置き表現】

(49) さらに、ついでのついでに言うと、生体構成高分子ならば何でも規則的で美しいというものではない。（長野敬『生物の内景から』）

【X2 は「～ば/たらいい」「～たら（どう）？」】

(50) それよりも容疑を教えてください。入管法違反でしたら、入管の方を呼んでください。国籍に不審があるのでしたらフィリピン大使館の人を呼べばいいんじゃないですか。（松廣茂『横浜本牧・英語亭』）

【X2 は「～なければ/ないと～ない」】

(51) 今年芸能生活四十周年を迎えるひばりさんは、もちろんこれからも歌い続けていくだろうが、せっかちの私は、思いたったらすぐに行動しないと気がすまない。（林真理子『言わなきゃいいのに』）

【X1 は状態/継続】

(52) 乾いたあとには色が変わるからです。ステインが完全に乾いたら、白木のときと同じように、ニスを塗ればでき上がりです。（稲石嘉郎『自分でできる住まいの修理と演出』）

田中(2005)が指摘した「大条件」「小条件」に基づくと、日本語母語話者の使用において、「X1」は「大条件」を提示すると同時に「X2」の成立の背景となるという役割をしている。そして、「X2」は「小条件」であり、「Y」(結果)が成立するための具体的な条件を示しながら、「Y」と直接的につながると言える。そうすると、「大条件」が包摂するのは、「小条件」だけでなく、「小条件⇒結果」であると考えられる。その包摂関係を図示すると、図 6-1 のようになる。(点線フレームは「X1」(大条件)を表し、実線フレームは「X2(小条件)⇒Y」を表す。)

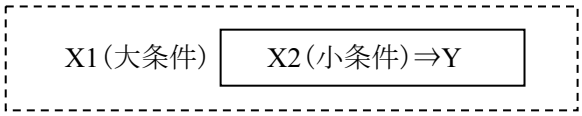

図 6-1　2 つの条件と結果の関係－日本語母語話者

このように、2 つの条件と結果が図 6-1 に示している包摂関係にある場合、条件表現が二重に使用されるのは許容されやすいのではないかと思われる。

6.4.3　条件表現の二重使用の誤用要因

では、学習者における条件表現の二重使用はどうなのか。(41)-(44)のほかに、誤用例を挙げると、(53)と(54)のようなものがある。

(53)最初はこの諺を全然認めていませんでした。それに買い物も好きではありませんでした。しかし、大学生に〈*なると→なって〉、自分のお金を使えるようになったら、すぐ買い物が好きになりました。

(54)できれば私もそうするつもりです。日系商社の仕事は大変だけど、能力が〈*認められれば→認められ〉、親に幸せな生活をしてもらえば、満足だと思います。

学習者の誤用において、2 つの条件は、図 6-1 のような関係になってはいない。(53)は、「自分のお金を使えるようになる」は「大学生になる」が実現した場合の細かい描写であり、すなわち、同一場面の設定と言える。(54)は、「能力が認められれば」と「親に幸せな生活をしてもらえば」は、2 つの条件として並列関係にある。こうしてみると、1 つ目の条件(X1)と 2 つ目の条件(X2)は、1 つのまとまりとして条件を提示している。図示すると、図 6-2 のようになる(「＋」は同一場面であることを示し、「｜」は並列関係であることを示す。そして、実線フレームは、X1 と X2 が 1 つのまとまりであることを示す)。

同一場面の設定:

X1 ＋ X2	⇒Y

並列関係の表明:

X1 ｜ X2	⇒Y

図 6-2　2 つの条件と結果の関係－学習者

同一場面か並列関係か判断しにくいものもあるが、学習者における条件表現の二重使用の 9 割以上が同一場面の設定である。例えば、6.4.1 節で挙げた(41)-(44)は、基本的に同一場面の設定を表すものと見なすことができる。このように、学習者が条件表現を二重に使用するとき、2 つの条件と結果の関係に関する捉え方は日本語母語話者と明らかに異なる。では、このような違いはなぜ生じるのであろうか。その可能性として、中国語の影響が挙げられる。

日本語と異なり、中国語では 2 つの条件をつなげるとき、新田(2021:112)によると「並列関係を維持するために、同一表現の連続使用が必要とされる場合が多々ある」ことにな

る。新田(2021:111)が挙げている用例(55)と(56)を援用する。

(55)a:如果再过十年,如果倪藻长大成人,她会更加真心和前后一贯地,坚持到底地祝愿——诅咒倪吾诚早日一命呜呼。（《活动变人形》）

b:十年もして、倪藻が大人になったら、その時こそ容赦なく願かけをしよう—夫を一日も早くあの世へと呪ってやろう。（『応報』）

(56)a:如果不是看到他脸上的特别是眼角和嘴角的细密的皱纹,如果不是看到他陷入沉思的时候目光中那种深含的悲悯,大概会认为他年轻有为、善于调摄、驻颜有术、风华正茂。（《活动变人形》）

b:顔の小ジワ、とりわけ目尻と口許の小ジワに気づかず、沈思黙考する目の奥に秘めた憂愁に気づかなければ、誰の目にも若く有為な、ヘルス・ケアも万全な、働き盛りと映る。（『応報』）

(55)も(56)も2つの条件をつなげている。中国語では「如果」が2回使用されているが、日本語では「～して、～なったら」「～気づかず、～気づかなければ」で表現されている。このように、中国語は条件表現を複数使用することができるのに対し、日本語は多くの場合条件表現を二重に使用することを回避し、テ形などの表現を使用し2つの条件をつなげるという違いがある。そして、(55a)における「如果再过十年」と「如果倪藻长大成人」は同一場面の設定[12]、(56a)における「如果不是看到他脸上的特别是眼角和嘴角的细密的皱纹」と「如果不是看到他陷入沉思的时候目光中那种深含的悲悯」は並列関係の表明であるため、図6-2の反映でもあると思われる。こうしてみると、学習者が誤って条件表現を二重に使用するのは、中国語の影響があるためだと考えられる。

以上をまとめると、条件表現を二重に使用するとき、日本語母語話者はX1(大条件)がX2(小条件)とY(結果)を包摂するという包摂関係で表現するが、学習者はX1とX2を1つのまとまりとし、同一場面の設定と並列関係の表明に使用する。その要因として中国語の影響が考えられる。

[12] 新田(2021)は、(55)が並列関係にあると述べているが、「如果倪藻长大成人(倪藻が大人になる)」は「如果再过十年(十年もする)」が実現した場合のより具体的な事態であるため、同一場面の設定と認められる。

第７章　「なら」と「ば」「たら」及び「は」との混用に関する考察[1]

7.1　はじめに

本章は、学習者がなぜ「なら」を使用するのか、また学習者がどのように「なら」を捉えているのかを明らかにすることを目的とする。

第３章の表 3-2 によると、条件表現間での混用として、学習者が「なら」を使用した誤用パターンは「*ナラ→バ」(18 例)、「*ナラ→タラ」(11 例)、「*ナラ→ト」(5 例)である。「*ナラ→バ」と「*ナラ→タラ」[2]は、「なぜ学習者が『なら』を使用するのか」という立場から考える際の重要な誤用パターンである。(１)が「*ナラ→バ」の誤用例、(２)が「*ナラ→タラ」の誤用例である。

(１)本当にだれだれさんのミスで、自分と関係ない場合；もしそのとき何も〈*言わないのなら→言わなければ〉、上司が自分のミスだと考えるので、自分が犠牲になるわけにはいかないと思って、弁解するわけである。

(２)将来、親しい人達と一緒に暮らし、興味を持っている仕事〈*をするなら→ができたら〉、それは私にとって一番幸せなことである。

(１)は、市川(2010:526)によると、「具体的な状況(条件と結果)を示している文なので、仮定的な事象を表す『なら』は不適切になる」という誤用である。(２)は、「興味を持っている仕事をする」という事態の実現を前提とするものである。久野(1973)、前田(2009)などによると、「と」「ば」「たら」条件文は前件の実現を条件に含むが、「なら」条件文は、久野(1973:108)によると、後件に「前件が実現・完了しなければ生じ得ない動作・状態を表す」といったことはできない。

また、第 3 章の表 3-3 によると、他の表現との混用として、「なら」と「は」との混用(「*ナラ→ハ」)が 14 例観察される。その誤用例が(３)である。

---

[1] 第７章は、杜(2023)に基づき加筆、修正を加えたものである。

[2] 「*ナラ→ト」は、学習者が「なら」を使用したが、校閲者によって「と」に訂正されたものである。「*ナラ→ト」は誤用例が非常に少ないため、ここでその例として(ⅰ)と(ⅱ)を見るにとどめておく。

(ⅰ)女性の社会進出は相当よいと思います。まず、女性が社会に進出する〈*なら→と〉、家庭の収入が増えて、男性の圧力が相応に減少できて、家庭の生活が改善されます。

(ⅱ)もう一つは、「団結就是力量」という諺の正当性です。心を一つにし、力を合わせる〈*なら→と〉、なんでもできます。

(ⅰ)と(ⅱ)は、いずれも必然的に成り立つ事態を表す。このような場合は「なら」ではなく、「と」がふさわしい。

（3）友達は人生の宝のようなものだ。また、人生の指導先生のみたいに存在していると思う。私〈*なら→は〉ちょっと子供っぽい。何も考えせずに、目下の生活を享受している。

（3）は、「友達」と対比させ、単に「私」を主題や対比の対象としており、「は」がふさわしい。「*ナラ→ハ」も、学習者における「なら」の捉え方を明らかにする重要な誤用パターンである。

「なら」は、判断を表す「だ」の条件法とされており、「表現者自身がある事態の成立を仮に想定するという表現の仕方であるから、典型的な仮定の表現である」（益岡1993a：13）と言われている。「なら」の学習問題について、市川（2010：527）は、具体的な誤用例を通じ誤用と認められた原因を説明し、「『なら』が十分指導されていないためか、どう使ってよいかわからない学習者が多い」と述べている。郭（2017）は、アンケート調査とインタビュー調査の結果に基づき、「なら」の意味・用法がほとんど理解されていないと指摘している。しかし、（1）-（3）のような誤用がなぜ生じるのかについては明らかにされていない。

以下、7.2 節では、「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」を中心に分析と考察を行う。7.3 節では、「*ナラ→ハ」について分析と考察を行う。7.4 節では、本章の考察をまとめる。「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」をひとまとめにする理由としては、「ば」「たら」はいずれも条件表現に属し置き換えられることもあることに加え、「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」に類似した誤用傾向が認められることが挙げられる。

7.2　「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」に関する分析と考察

7.2.1　「*ナラ→バ」の誤用実態と傾向

「*ナラ→バ」（18 例）は、学習者が「なら」を使用したが、校閲者によって「ば」に訂正された誤用を指す。（1）のほかに、（4）-（6）のような例がある。

（4）爺さんとあまり会えなくなった。もし、爺さんと〈*会うなら→会えば〉、爺さんに必ずいろいろの食べ物をもらった。

（5）もしこの差をよく理解せず、字面だけ見て勝手な解釈を〈*するなら→すれば〉、誤用や誤解を導く可能性が多くある。

（6）なぜなら、構造中心の教科書であるため、文法項目が多く、媒介語を〈*使わないなら→使わなければ〉、初級レベルの学習者は理解できないから、授業が進まないと思う。

（4）は、過去の習慣であり、「なら」を使うと誤用となる。（5）と（6）は、一般的に起こる事態を表す。前田(2009:49)によれば、一般条件文が「なら」で表されることはほとんどないので、（5）と（6）での「なる」は不適切である。

「*ナラ→バ」の前件と後件の述語使用に誤用傾向が認められる。前件と後件の述語使用の詳細を示すと、表 7-1 のようになる。

表 7-1　「*ナラ→バ」における前件後件の述語使用(単位:例)

後件 / 前件	「なる」	「できる」	その他
ル形	3	6	2
「ない」	-	5	2

表 7-1 に基づき、前件を見ると、動詞ル形と助動詞「ない」が多く現れている。後件を見ると、「できる」「できない」のような可能を表す表現[3]が多く現れている。（6）は、その例である。さらに(7)-(10)のような誤用がある。

（7）何かアドバイスでも〈*あるなら→あれば〉教えていただけるとうれしい。
（8）人に迷惑を〈*かけないなら→かけなければ〉、話し合ったり、化粧をしたりしても大丈夫ではないか。活発な雰囲気にあふれる電車もよい。
（9）しかし、多くの人は私に対して「大学はとても重要ですよ。」「大学を〈*卒業しないなら→卒業しなければ〉、何もできないよ。」大学を続けるいろいろな意見を聞かせてくれました。
(10)一方、環境保全の意識は技術改革に拍車をかける力である。それに、人は自分で自覚的に環境を汚染〈*しないなら→しなければ〉、公害問題の解決に力を入れられる。

このような誤用実態に基づき、「*ナラ→バ」は(11)のようにまとめることができる。

(11)～動詞ル形/～ないなら、～できる。

7.2.2　「*ナラ→タラ」の誤用実態と傾向

「*ナラ→タラ」(11 例)は、学習者が「なら」を使用したが、校閲者によって「たら」に訂正されたものである。（2）のほかに、(12)-(14)のような例がある。

(12)母親は会社を休んで、家に帰って面倒を見てくれました。あの時、もし母親がそば

[3] 可能を表す表現には、肯定の形式も否定の形式も見られる。肯定の形式には「できる」「可能性がある」「～れる/られる(可能)」「大丈夫」といった形式があり、否定の形式には「できない」「だめ」などがある。以下、可能を表す表現を「できる」と記す。

に〈*いないなら→いなかったら〉、たぶんなにもできなかっただろうと思います。

(13)もし子供がよく育って、小さいときから親が正しく〈*教育するなら→教育していたら〉、親が無力な高齢者になった時、子供が親を幸せにできると思います。

(14)「ダメよ。おじいさんの前で〈*泣くなら→泣いたら〉、おじいさんが心配になって、その世界へ行きたくなくなるんだよ。」

(12)は、「母親がそばにいない」を前提とし、後件はそれが実現した場合を表すものであり、「なら」は不適切である。同様に、(13)は、前件の「小さいときから親が正しく教育する」が先に実現した場合について述べているので、(13)での「なら」は不適切である。(14)は、実際に起きている具体的な状況を示すため、「なら」は不適切である。

「*ナラ→タラ」を見ると、前件は 11 例のうちの 9 例[4]が動詞ル形である。そして、後件は意志でコントロールできない表現(9 例)[5]に集中しており、その中には(13)と(14)のように、変化を表す動詞「なる」が 7 例観察される。他の例として、(15)-(17)のようなものがある。

(15)そして、大学の先生になるつもりである。それから、大学で先生になるという夢が〈*かなうなら→かなったら〉、わたしにとって、人生の夢の半分がかなったことになる。

(16)芸能人を追いかけるのは悪いとは言えないが、もし〈*やりすぎるなら→やりすぎたら〉、嫌われる存在になるかもしれない。

(17)陳さんは内向的でよく話さないですが、でも、ビールでも〈*飲むなら→飲んだら〉、別人になるようです。みんなはこんな陳さんが好きです。

前件に動詞ル形、後件に「なる」が多く現れていることから、「*ナラ→タラ」は、(18)のようにまとめることができる。

(18)～動詞ル形なら、～なる。

以上から、「*ナラ→バ」には「～動詞ル形/～ないなら、～できる」という構文パターンが多く見られ、「*ナラ→タラ」には「～動詞ル形なら、～なる」という構文パターンが多く見られる。「*ナラ→バ」と「*ナラ→タラ」は、構文パターンに違いが認められるが、いずれも「前件が実現した」が後件の生じる前提である。

---

[4] (12)のほかに、次の(ｉ)がある。(ｉ)は、「なら」の前にテ形が使用されている。

(ｉ)ギターを〈*弾いてなら→弾いたら〉、また元気づきます。

[5] 動詞「なる」以外には「一番幸せなことである」「元気づけます」のようなものもある。

7.2.3　「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」の誤用要因

久野(1973:108)は、「S1[＝前件]ナラ S2[＝後件]」について、「S2 は話し手の判断・意志・決意・要求・命令を表さなければならない」と述べている。しかし、後件が「できる」と「なる」の場合は必ずしも誤用となるわけではない。『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』を調べると、(19)-(21)のような文がある。(「〰」は筆者による。)

(19)特徴として、代物弁済の場合、担保権者は不足額を請求できません。一方、担保物の売却代金で弁済を受けた場合、売却額が足りないならその不足分を債務者に請求することができます。　(尾崎哲夫『UCC(アメリカ統一商事法典)の基礎知識』)

(20)特定のウィルスを駆除するならシマンテックから無料でダウンロードできます。
(Yahoo!知恵袋)

(21)しかし現在の宇宙には光では観測できない暗黒物質が、普通の物質より多く存在しているのではないかと考えられており、これをも平均密度の計算に入れるならば宇宙はほとんど平坦となる。　(佐藤勝彦『現代の宇宙像』)

(19)-(21)のように、「～動詞ル形/～ないなら、～できる」と「～動詞ル形なら、～なる」という構文パターンは、日本語母語話者にも観察される。したがって、構文パターンに注目するよりも、学習者が「なら」がどのような意味で使用しているのかを探るほうが重要である。

「なら」は、もともと「前件が成り立つかどうかの判断自体は保留されている」「前件が真であることが仮定されているだけのこと」(益岡 1993a:12)である。久野(1973:108)によると、「なら」には、「S2[＝後件]が、S1[＝前件]が実現・完了しなければ生じ得ない動作・状態を表す場合は、非文法的である」という制約がある。また、「なら」は「と」「ば」「たら」と比べると特別なニュアンスを持つ。泉原(2007)が挙げている(22)を見る。

(22)ジャズが聞きたい？神戸まで行ったら/行けば/行くと/行くなら、知ってる店がある。　(泉原 2007:437)

(22)は「と」「ば」「たら」「なら」のいずれもが使用できるが、「と」「ば」「たら」は「『神戸に行ってから、知っている店でジャズを聞く』ことを表しているだけ」(p438)である。それに対して、「なら」は、「『神戸まで行く』と『ジャズを聞く』が『交換条件』になり、まるで『神戸でだけジャズが聞ける/ジャズを聞くには神戸へ行かなければならない/ジャズが聞きたければ神戸へ行け』と言っているかのようになり、聞き手に対する『勧め/義務/命令』の響きを漂わせて、〈述べ立て文〉であるにもかかわらず、〈働きかけ文〉のような機能を果たしている」(p438)ことになる。このように、「なら」には前件に

「強い断定」(久野 1973:102)というニュアンスがある。

しかし、学習者の誤用を見ると、「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」はいずれも仮説条件を表すが、「単に前件が真であると仮定する」というものではなく、前件の実現が後件の要件になりうるものである。この点が久野(1973)によって指摘された制約に違反している。それに加え、「なら」の使用によって、「前件でだけ後件が実現する」「後件を実現させるには前件のようにしなければならない」といったニュアンスが生じ、日本語母語話者はそれを不自然に感じてしまうのであろう。これらのことから、学習者は「なら」を使用し仮説条件を表すが、その制約やニュアンスを理解していないと考えられる。では、なぜ学習者はより使い慣れた「と」「ば」「たら」を使用せずに、市川(2010:527)が「どう使ってよいかわからない」と言う「なら」を使用するのであろうか。「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」を精査すると、(23)-(25)のような誤用が見られる。

(23)数字を含む慣用語の中で、偶数が〈*使われるのなら→使われたら〉、否定的、イメージが良くない意味を持っている。

(24)この四つの答えは、みんなだれだれのような社会やほかの人に役に立つ職業なんだから、そんな人になりたい〈*なら→といえば〉、先生にほめられることになる。

(25)日本語の授受動詞は中国語に違って特徴が多く、用法の制限もたくさんある。もし日本語の授受動詞を全部〈*書くなら→書けば〉、内容が多すぎて、問題点も明らかに書くことができない。

(23)は、数字の中で偶数が使われると仮定するものである。(24)は「だれだれのような社会やほかの人に役に立つ人」、(25)は「日本語の授受動詞」について述べたものである。(23)-(25)の「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」からは、「2 つの事態を照らし合わせる」、または、「前文を受け継ぐ」という意味を読み取ることができる。「2 つの事態を照らし合わせる」と「前文を受け継ぐ」は、いわゆる対比、主題を表すものであり、前件の事態が成り立つ場合に特定の結果や状況が生じることを示すのに使用されるものでもある。そうすると、前件事態とそれ以外の事態との違い、または、前件事態そのものの特徴を強調する役割を果たす。このことから、学習者は「なら」を使用することで、仮定するだけではなく、前件によって表される事態を強く表現していると考えられる。

以上をまとめると、「*ナラ→バ」には「～動詞ル形/～ないなら、～できる」、「*ナラ→タラ」には「～動詞ル形なら、～なる」という構文パターンが多く観察される。そこには、学習者が「なら」の「後件は前件が実現・完了しなければ生じ得ない動作・状態になってはいけない」という制約や、前件に「強い断定」のニュアンスが含まれることを理解していないことが関与している。学習者は「なら」を使用することで、前件事態を強く表現することを意図していると考えられる。

7.3　「*ナラ→ハ」に関する分析と考察

7.3.1　「*ナラ→ハ」の誤用実態と傾向

「*ナラ→ハ」(14 例)は、学習者が「なら」を使用したが、校閲者によって「は」に訂正されたものである。(３)のほかに(26)-(29) [6]のような例がある。

(26)しかし、中国の祠の場合〈*なら→は〉、その一族の子孫だけが参拝している。
(27)一方、中国の子供たち〈*なら→は〉、より面白い夢を持っていると思います。
(28)子供の時から、李白の詩を学んで、人生に影響を与えている。李白〈*なら→は〉中国の一番有名な人だ。
(29)「圧力」という語〈*なら→は〉、日本語では、精神的なストレスは指さず、物理的な圧力を指す。一方、中国語では、精神的なものも物理的なものも指す。

(26)は、ほかの国の祠と対比させ中国の祠について述べている。(27)は、「一方」が逆接の接続詞であり、「なら」は「中国の子供たち」を対比の対象として取り上げている。(28)は、前文の「李白」を主題にとりたてている。(29)は、「圧力という語」を主題にとりたて、その後で日本語と中国語の違いを述べている。これらの誤用は、同じ範疇に属する２つの物事を示し単にその違いを述べる場合や、単にある物事を主題にとりたてる場合には、「は」がふさわしい。

7.3.2　「*ナラ→ハ」の誤用要因

「*ナラ→ハ」はいずれも主題、対比を表す。ただし、(26)-(29)のように、主題の誤用と対比の誤用と区分するのは難しい。したがって、以下、「*ナラ→ハ」の誤用を主題の誤用と対比の誤用とに分けず、考察を進めていく。

なぜ、学習者は早い段階で学習した「は」を使用せずに、「なら」を使用するのであろうか。主題の立場から見ると、「なら」の使用場面が問題となる。日本語文法記述研究会(2009:245)によると、主題を表す「なら」は、「名詞にしか接続せず、また、聞き手の発言を受けたり意図を推察したりする場合にのみ用いられるという点で、使用範囲は『は』に比べて、ずっと狭い」となる。また、丹羽(1993:24)は、「なら」の使用場面について、「相手を受けた表現でなければならない」「相手の発話中にあっても、既にお互いの間で主題として確立している場合は用いられない」「自分から主題を持ち出すことはできない」と述べている。このように、主題を表す「なら」は「受取主題」(丹羽 1993)であるため、作文のように、相手の存在が薄く、相手の発話、動作、様子などを受けられない場面に使用しにくい。また、会話に近い場面であるが、(30)のように学習者が自身から主題を持ち

[6] (26)と(27)の「なら」は主題も対比も表すが、(28)と(29)の「なら」は、主として主題を表すと考えられる。ただし、(28)と(29)から全く対比の意味が読み取れないというわけではない。

出すものや、(31)のようにメールのやりとりで既に確立しているものを主題として持ち出すものがあり、丹羽(1993:24)で指摘された制約に違反している。

(30)ひとりぼっちだった理由を聞かれると、気軽に「参加してもなかなか運命の人に巡り合わない」、「気が合う人〈*なら→は〉、簡単に見つかるもんじゃないから、ゆっくりしないと」などの後ろ向きの理由が多く挙げられる。

(31)こんばんは、ご返事をありがとうございます。先生の講義〈*なら→は〉どれもすばらしいと思いますので、ぜひ両方とも参加させていただきます。

一方、対比の立場から見ると、「なら」は「～であるために積極的に～を選ぶ」(高梨 1995、日本語文法記述研究会 2009)という意味を持つ。一方、「は」は、「対比される 2 つの要素を明示する」(日本語文法記述研究会 2009:30)、すなわち単に対比の意味を表すもので、「～であるために積極的に～を選ぶ」という意味を生じさせない。このような「なら」と「は」の違いに基づき、「*ナラ→ハ」を見ると、対比の対象を明示にするものもそれを明示しないものもあるが、いずれも単に対比の意味を表している。その例として、(32)と(33)を挙げる。

(32)電車が止まった瞬間、私はちょっと恐れた。でも、周りの人〈*なら→は〉全然平気で新聞を読み続けたり、携帯を見続けている。本当に、感心した。

(33)「留学生活に何にも慣れていなくて、家に戻りたくてたまらない人がたくさんいる。」と聞いた。実は、私〈*なら、→は〉そういう気持ちが全然しない。

(32)と(33)を見ると、「*ナラ→ハ」における「なら」は、対比の対象を提示するが、そこから前件と後件には「～であるために積極的に～を選ぶ」という意味が読み取れない。すなわち、中国語を母語とする日本語学習者は、「は」と同じく単に対比の対象を強調するものとして「なら」を使用していると考えられる。

さらに、「*ナラ→ハ」を観察すると、「A は～。B なら～」という形式が使用されるものがある。主題、対比を表す「なら」は、条件の意味を帯びるため、「『は』よりもっと対比のコントラストが強い」(江田 2005:6)表現である。そこから示唆され、学習者が「なら」を使用したのは、主題、対比の対象となる名詞を強調するためであろう。(32)を例とすると、(32)は「A は～。B なら～」という形式が使用されている。この時、強調されるのは「私」ではなく「周りの人」の反応である。また、(33)のように、一人称代名詞「私」を主題にとりたてるものは 6 例あり、いずれもある事柄に対し自らの意見・態度を述べるものである。このような誤用は、「なら」の使用で一人称代名詞「私」が焦点化され、その結果、「ほかの人と違って、私はこう思う」という「私」を肯定的に評価する「自意識過剰の文」(江田 2005:6)となる。このことから、学習者が「なら」を使用するのは、「は」

よりも強い対比のコントラストを表現するためであると考えられる。

主題や対比のほかに、「*ナラ→ハ」は、基本的には「もし～であれば/の場合」という条件のニュアンスが読み取れる。そのため、主題や対比の場合でも、学習者は「なら」を仮定の意味を意識しながら使用する可能性も否定できない。ただし、この仮定は、仮説や反事実の事態に基づくものではなく、「私」に接続する場合は「私にすれば」「私に言わせれば」、その他の名詞に接続する場合「～と言えば」「～について言えば」などの表現に近く、文脈によって主題や対比となる。

「なら」と対応関係にあるわけではないが、同様に活用せずにそのまま名詞に接続できることから、このような使い方は中国語「的话」に影響される可能性が高いと思われる。中国語「的话」は、仮定の意味を明示する以外に、主語や目的語をとりたてる「话题标记(話題マーカー)」という用法もあり、「对话题信息具有强化作用，对话题焦点具有调控作用(話題内容に対する強化作用、話題焦点に対する調整作用を持つ)」(谢・陈 2012:33)というものである。(34)と(35)[7]は、「话题标记」の例である。(訳文は筆者による。)

(34)我这把刀的话，不是我说，削铁如泥。
(私のこのナイフは、自慢ではないけど、鉄を泥のように削られる。)

(35)你都送了啥礼物啊？小妹我就送了她一条裙子，嫂子的话，就给了她两张购物卡。
(プレゼントは何を贈ったの？妹にはスカートを贈ったが、義姉にはショピングカードを2枚贈った。)

(34)は「刀」、(35)は「嫂子」が「的话」によって取り上げられている。中国語「的话」によって表される「话题标记(話題マーカー)」は、(34)のように主題を表すことも、(35)のように対比を表すことも可能である。

こうしてみると、「*ナラ→ハ」は、学習者が「仮定＋主題/対比」で「なら」を使用し、前に来る名詞を強く表現することに起因すると考えられる。

7.4　まとめ

本章は、「なら」に関わる誤用パターンの中で多く見られる「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」及び「*ナラ→ハ」を中心に論じてきた。次の2点が明らかになった。

第一の点は、「*ナラ→バ」と「*ナラ→タラ」には、構文パターンとして「～動詞ル形/～ないなら、～できる」と「～動詞ル形なら、～なる」が多く認められることである。学習者が条件を表す「なら」の制約やニュアンスを理解せず、「なら」を使用し事態を照らし合わせたり、または、前文を受け継いだりすることで、前件事態を強く表現している。

第二の点は、「*ナラ→ハ」が主題や対比を表すという点である。このような混用は、ま

[7] (34)と(35)は、谢・陈(2012:31)より引用したものである。

ず、学習者が主題や対比を表す「なら」の制約を身につけていないからであるが、「なら」は学習者によって、「は」より対比のコントラストが強いものとして捉えられていることが要因である。学習者は「仮定＋主題/対比」で「なら」を使用し、主題や対比の対象である前接の名詞を強く表現している。

「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」と「*ナラ→ハ」は、前接したのが動詞句か名詞かという違いはあるが、「なら」の前をとりたてるという共通点がある。したがって、学習者における「なら」の捉え方は、「なら」に前接する事態やモノのとりたてであると考えられる。図示すると、図 7-1 のようになる。

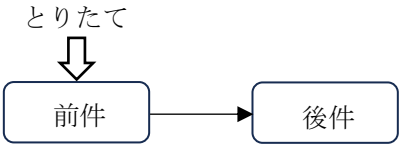

図 7-1　学習者における「なら」の捉え方

第 8 章　結論

条件表現「と」「ば」「たら」「なら」は、先行研究に指摘されているように、意味・用法に重なりがある一方、置き換えると不自然になることがしばしばある。日本語教育の現場では、学習者から「難しい」「使い分けが分からない」という声が溢れている。そのためにも、学習者に視点を置き、どのような誤用がなぜ生じるかを論じる必要がある。

本研究では、『YUK 作文コーパス』を研究資料とし、学習者が誤って使用した条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用に注目し、分析と考察を試みてきた。本章では、第 4 章から第 7 章で論じてきた内容を整理したうえで、結論を述べる。そして、最後に今後の課題を述べる。

8.1　本研究のまとめ

本研究は、学習者における条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用を中心に論じた。第 1 章では研究目的、研究方法や構成などについて、第 2 章では先行研究や残された課題について述べた。第 3 章では、「と」「ば」「たら」「なら」の誤用実態を概観し、誤用が多く観察されたのは、条件表現間での混用、テ形との混用、逆接条件表現「ても」との混用、時間表現との混用、条件表現の二重使用、「なら」と「は」との混用であることを述べた。そして、第 4 章から第 6 章では、「と」「ば」「たら」の誤用を論じた。第 4 章では「と」「ば」「たら」の間の混用、第 5 章では「と」「ば」「たら」とテ形との混用、第 6 章では「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用を取り上げ、分析と考察を行った。さらに、第 7 章では「なら」の誤用に注目し、「なら」と「ば」「たら」及び「は」との混用を取り上げ、分析と考察を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

8.1.1　「と」「ば」「たら」の間の混用における傾向と要因

第 4 章では、「と」「ば」「たら」の間の混用について、典型的な誤用パターンを中心に、誤用傾向と要因を考察した。以下の 3 点が明らかになった。

第一は、「*ト→タラ」「*ト→バ」は、前件に「なる」や「～ない」、後件に主観的な判断を表すモダリティなどが多く見られるという傾向があることである。これは、「□なると」「□ないと」といったスロット付き表現が形成されたことに加え、学習者が日本語母語話者と異なる捉え方で「と」を使用していることを示している。日本語母語話者は「いつも・自然に成り立つ」という意味で「と」を使用するが、学習者は自分自身の主観的な体験や見解に基づき、「実現確率が高い」という意味で「と」を使用し、「前件後件の強関連性」を表す。「*ト→タラ」「*ト→バ」が生じるのは、日本語母語話者と学習者の間にこ

のような違いがあるからである。そのほかにも、「春になると、花が咲きます」のように、学習者が条件表現を学習するとき、教科書や日本語教師によって取り上げられる定型例文の影響も窺うことができる。

第二は、「*タラ→ト」「*タラ→バ」は、文章のジャンルによって【論文】での誤用と【作文】での誤用に分けられることである。【論文】での誤用には「～たら、～[可能・変化]る」、【作文】での誤用には「～[動作]たら、～[動作]た」という構文パターンが多く認められる。構文パターンは異なるが、いずれも前件と後件の時間的前後関係は明確であり、学習者が「たら」の「完了」の意味を強く意識していることが示唆される。また、「たら」の汎用性も誤用の一因となっている。

第三は、「*バ→ト」も文章のジャンルに応じて、【論文】での誤用と【作文】での誤用に分けられることである。前件には、【論文】での誤用では「見れば」や「分析すれば」などの判断を表す表現が多く、【作文】での誤用では「思えば」などの思考を表す表現が多く観察される。後件は文章のジャンルによって異なるが、共通して「結論」を表す。したがって、「*バ→ト」は「～[判断・思考]ば、～[結論]」という構文パターンにまとめることができる。「*バ→ト」が生じる要因としては、学習者において「□見れば」や「□思えば」などのスロット付き表現が形成されたこと、「判断・思考」と結びつけられたこと、そして、個別的で一定の時間帯をまたがって成り立つ事態を「一般的である」として捉えられることを挙げることができる。

「と」「ば」「たら」の間の混用から見た誤用傾向と要因は、第 4 章の図 4-5 に示したが、再度図 8-1 として示す。

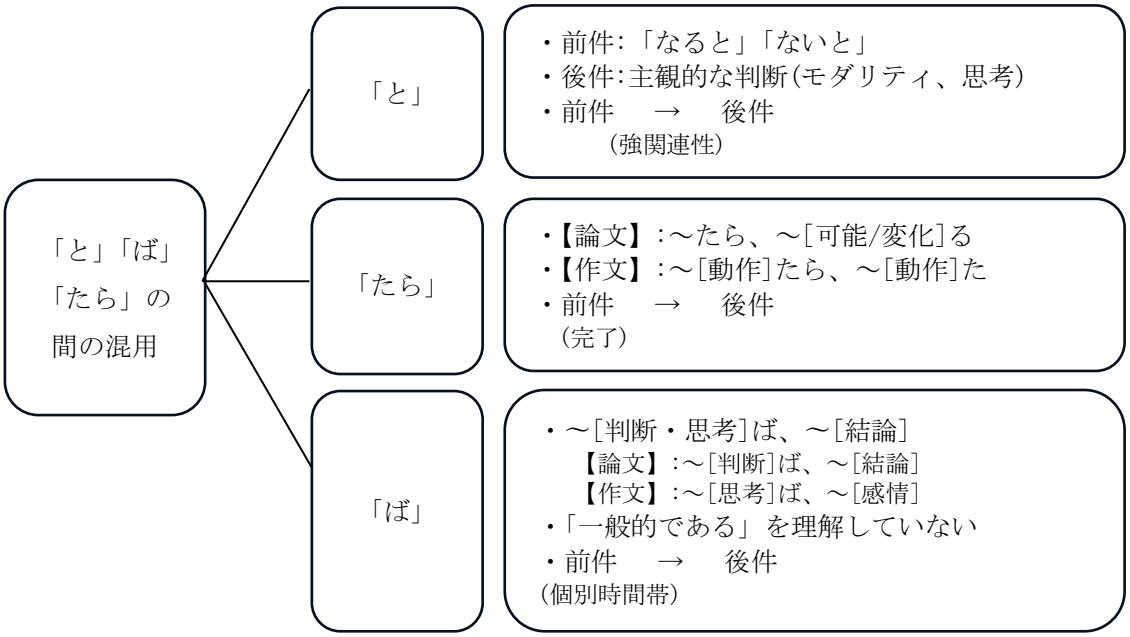

図 8-1 「と」「ば」「たら」の間の混用から見た誤用傾向と要因

8.1.2　「と」「ば」「たら」とテ形との混用における傾向と要因

第 5 章では、「と」「ば」「たら」とテ形との混用に基づき、誤用傾向と要因を考察した。以下の 3 点が明らかになった。

第一は、「*ト→テ」は、「A は～[知覚・思考]と、～[感情・思考]た」「A は～[変化]と、～[変化]た」「A は～[外的行為]と、～[外的行為]る」という構文パターンが多く認められることである。誤用要因として、日本語母語話者は「外部から観察する」「前件後件をただ結びつける」という捉え方をするが、学習者はそれとは異なり、事態の内部に視点を置き、「前件後件の強関連性」を積極的に表現することを挙げることができる。

第二は、「*タラ→テ」は、「A は～[外的行為]たら、～[外的行為]た」「A は～[知覚]たら、～[感情・思考・外的行為]た」という構文パターンが多く認められることである。「*タラ→テ」の誤用要因は、前件の「完了」をより明確に表現するものとして使用されることにあると考えられる。

第三は、「*バ→テ」は、「A は～[思考]ば、～[感情]る」という構文パターンが多く認められることである。その要因として、「ば」は学習者によって、「思考」と結び付けられたことに加え、「一般的である」という特徴が十分に理解されておらず、個別的で一定の時間帯をまたがって成り立つ事態を表すものとして使用されることが挙げられる。

「と」「ば」「たら」とテ形との混用から見た誤用傾向と要因は、第 5 章の図 5-5 に示したが、再度図 8-2 として示す。

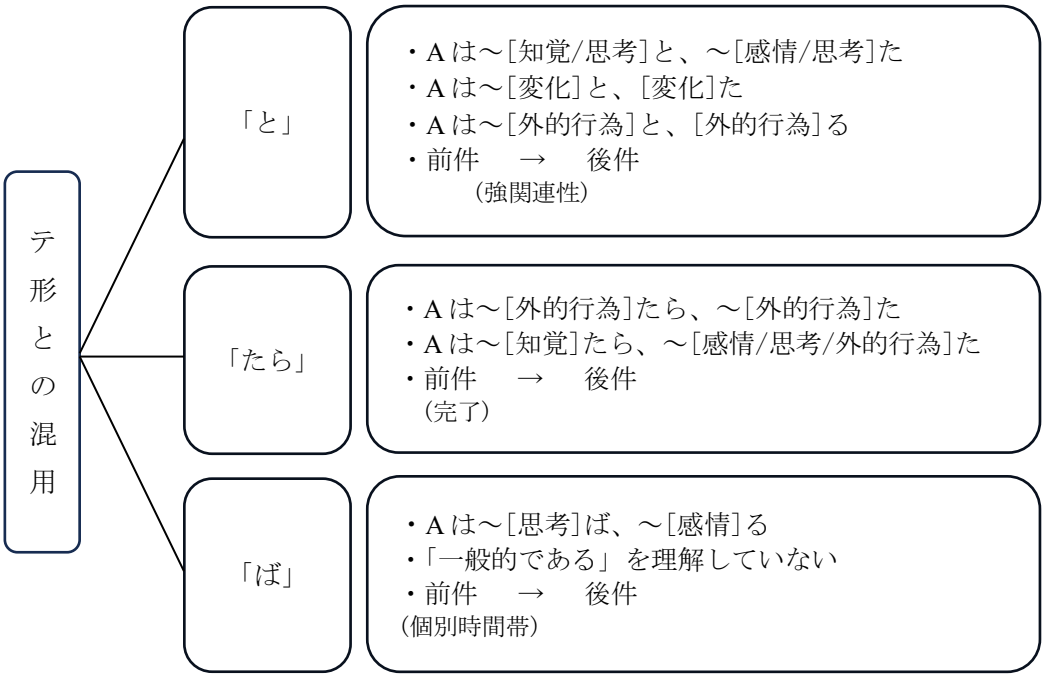

図 8-2　「と」「ば」「たら」とテ形との混用から見た誤用傾向と要因

8.1.3　「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」、時間表現との混用及び条件表現の二重使用における傾向と要因

第 6 章では、「と」「ば」「たら」と逆接条件表現「ても」との混用(「*X→テモ」)、時間表現との混用(「*X→時間表現」)及び条件表現の二重使用を考察した。以下のことが明らかになった。

まず、「*X→テモ」は、否定すべき条件・帰結の関係が否定されていないことが共通しており、日本語と中国語における順接・逆接の表現形式の不対応、前件に注目した結果前後の論理的関係にまで考えが及ばないことなどに要因がある。そのほかに、程度の補充説明を行う必要がないことも「*X→テモ」の産出と関わる可能性がある。

次に、「*X→時間表現」は、大まかに「*ト→ルトキ」と「*タラ→テカラ、タトキ」にまとめることができる。「*ト→ルトキ」は、学習者における「と」の「前件後件の強関連性」「前件が完了していない」という捉え方が反映され、前件と後件の時間的前後関係に対する意識が欠けていることが要因である。「*タラ→テカラ、タトキ」は、前件が終わり、引き続き後件が起こるという時間的前後関係を表すため、学習者が「たら」を使用し前件の「完了」をより明確に表現することが要因である。そこには中国語における条件と時間に関する言語感覚が影響を及ぼしていると考えられる。

最後に、条件表現の二重使用について、日本語母語話者が許容しやすいのは、2 つ目の条件と結果が 1 つのまとまりとなり、1 つ目の条件がそれを包摂する関係にある場合である。しかし、学習者は、2 つの条件が 1 つのまとまりとなり、同一場面の設定や並列関係の表明を表す場合が多い。このような使い方は、中国語の影響を受けていると考えられる。

8.1.4　「なら」と「ば」「たら」及び「は」との混用における傾向と要因

第 7 章は、「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」「*ナラ→ハ」という 3 つの誤用パターンを中心に、「なら」の誤用について論じた。以下の 2 点が明らかになった。

第一は、「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」は、「～動詞ル形/～ないなら、～できる」と「～動詞ル形なら、～なる」という構文パターンが多く認められることである。「*ナラ→バ」「*ナラ→タラ」から、学習者が条件を表す「なら」の制約やニュアンスを理解していないと分かる。さらに、これらの誤用から「事態を照らし合わせる」、または、「前文を受け継ぐ」という意味を読み取ることができる。そのため、学習者が「なら」を使用するとき、単に仮定するだけでなく、前件事態を強く表現していると考えられる。

第二は、「*ナラ→ハ」は、主題や対比を表すということである。「*ナラ→ハ」は、学習者が主題や対比を表すときの制約を身につけておらず、「仮定+主題/対比」で「なら」を使用し、前に来る名詞を強く表現することに起因する。

このように、学習者における「なら」の捉え方は、「なら」に前接する「事態やモノのとりたて」とまとめられる。学習者における「なら」の捉え方は、第 7 章の図 7-1 で示したが、再度図 8-3 として示しておく。

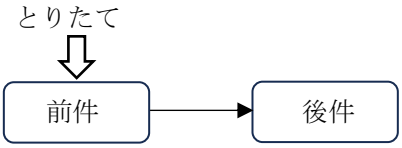

図 8-3　学習者における「なら」の捉え方

8.2　学習者における条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方

第 4 章から第 7 章の分析と考察を踏まえ、学習者における条件表現の捉え方を、以下の 3 点にまとめることができる。

第一は、学習者における「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方は、前件と関連することである。そのうち、「と」「ば」「たら」の捉え方は、前件のアスペクトと強く関連し、「前件が完了したかどうか」と「前件が動作や変化を具体的に表すかどうか」という 2 つの角度から整理することができる。

まず、前件が完了したかどうかに基づくと、「と」と「たら」に違いが認められる。「たら」は、時間的関係「～あと」の意味が著しく強調されるため、「前件が完了した」を表す。対照的に、「と」は、「前件後件の強関連性」「同時に起きる近接継起関係」（廖 2023a、2023b）を表すため、「前件が完了していない」を表す。「前件が完了した」を〔+完了〕と記し、「前件が完了していない」を〔-完了〕を記すと、「たら」は〔+完了〕であり、「と」は〔-完了〕である。一方、「ば」は、一定の時間帯をまたがって成り立つ事態をまるごと表すため、「と」と「たら」のような性質を欠いている。

次に、前件が動作や変化を具体的に表すかどうかに基づくと、「と」「たら」と「ば」とは異なる。「と」「たら」は、動作や変化の展開を具体的に表し、その動作や変化がどれだけ進んでいるのかを描き出す。それに対し、「ば」は、動作や変化の展開でなく、事態を全体的に描き出す。動作や変化を具体的に表す場合を〔+動的〕と記し、動作や変化の展開を具体的に表さない場合を〔-動的〕と記すと、「と」「たら」は〔+動的〕であり、「ば」は〔-動的〕である。このように、「と」と「たら」に動作や変化を具体的に表す役割を分担させ、その一方で、事態を全体的に描き出す役割を「ば」に振り分けていることが考えられる。

他方で、「なら」の捉え方は、「と」「ば」「たら」と異なる様相を呈している。学習者の捉え方として、「なら」は、その前に来る事態やモノを強調する、すなわち、事態やモノのとりたてである。

学習者における「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方は、表 8-1 のように示すことができる。

表 8-1　学習者における「と」「ば」「たら」「なら」の捉え方

	〔−完了〕	〔+完了〕
〔+動的〕	「と」	「たら」
〔−動的〕	「ば」	

とりたて
「なら」

第二は、学習者における条件か否かの判断は、個人体験や文脈に基づく場合もあるということである。日本語において、条件か否かの判断は、「他人から見ても成り立つ」のように、普遍的に成り立つ知識・常識、いわば「知識の語り」に基づくのが一般的である。この点は、一般条件や習慣・反復条件は無論のこと、事実条件を表す「と」「たら」の使用場面からも窺うことができる。事実条件を表す「と」「たら」は、小説や紀行文には多用されるが、日常生活における「私」の行動、感情、感覚を叙述するときには使われにくいということである。しかし、学習者の誤用を見ると、条件か否かの判断は、個人体験や文脈に基づくものが多い。それは、いわば「体験の語り」である。この場合、前件後件につながりがあるのか、つながりがある場合、それがどのようなつながりであるのかなどは、学習者自身によって付与される。そのため、「他人から見ると分かりにくい」といったことが生じてしまい、日本語母語話者にすれば不適切な文となる。このように、学習者における条件か否かの判断は、普遍的に成り立つ知識・常識にも、個人体験や文脈にも基づくため、日本語母語話者に比べると、より広範囲なものとなる。

第三は、教科書の定型例文や中国語の影響である。定型例文の影響について、その代表は、「春になると、花が咲きます」である。この例文は、学習者における「と」の捉え方に大いに影響を与えている。中国語の影響については、テ形、逆接条件表現「ても」との混用、条件表現の二重使用などにおいて顕著であり、現れ方も多様である。例えば、逆接条件は、日本語にも中国語にもその概念が存在し、日本語教育現場においてもそれに関する指導はあるが、それでも学習者が中国語の言語感覚で使用したり使用しなかったりする。他方、条件表現の二重使用については、日本語の教科書にも記載されておらず、日本語教師からも指導されることは通常ない。そのため、条件表現の二重使用は、学習者によって中国語からそのまま持たれてきたものであると考えられる。

日本語教育について、言及しておきたい。日本語教育の現場では、文法以外にも、学習者の表現意図を配慮しながら指導する必要があることは言うまでもない。例えば、条件か否かの判断について、日本語では普遍的に成り立つ知識・常識に基づくのが一般的であるということについて、指導するときに明示する必要がある。そのほかにも、「と」「ば」「たら」「なら」の使用場面について、すぐに実践できることがある。例えば、学習者が論文に「たら」を使用すること、小説や紀行文でないにもかかわらず事実条件の「と」「たら」を使用すること、対話でないにもかかわらず主題を表す「なら」を使用することなど、使用場面に関わる誤用が多く認められる。これらは、日本語教育の現場で、単なる文法上の説明にとどまらず、使用場面と関連づけながら指導を行う必要性を示唆している。

そうすることは、4 形式の異なる文脈での使い方やニュアンスの違いを理解し、柔軟性を持って応用できるようになることにつながる。

8.3　今後の課題

本研究は、「条件的用法に関わる、なおかつ、学習者が誤って条件表現『と』『ば』『たら』『なら』を使用した」誤用を中心に、誤用傾向と要因を考察し、4 形式の捉え方を明らかにすることを目的にしたものである。その結果、学習者は、日本語母語話者と異なる捉え方をしており、独自の使用ルールを持っていると分かった。ただし、全体的に見ると、学習者の捉え方に正しくないところがあるとは言え、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の誤用は、4 形式の意味・用法に関連するものが多く、全く想像もつかないものではない。すなわち、学習者は、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法をある程度身につけているが、拡大解釈や母語である中国語の影響などのため、日本語母語話者と異なる捉え方をしている。また、条件とはどういうものなのか、さらには、事態をどのように捉えるのかなど、形式上の範疇を超えた学習問題も確認されたため、学習者を対象に指導を行うとき、それらにも考慮を払い、更なる検討が必要であろう。

本研究は、「学習者が誤って条件表現を使用した」という立場から見たものであり、条件表現間での混用や、テ形、逆接条件表現「ても」、時間表現などに訂正された誤用を中心とした。しかし、複文の誤用の全貌を眺めることができなかった。今後、複文全体を視野に入れ、より広くより深く探求することが課題である。それから、第 3 章で述べたように、非条件的用法に関わる誤用もしばしば見られる。非条件的用法は、条件表現形式が文法化したものであるため、それに関する学習は、条件的用法の学習に影響される可能性もあり、逆に条件的用法の学習を影響する可能性もある。したがって、非条件的用法に関わる誤用も無視できない。また、条件表現「と」「ば」「たら」「なら」は難しいからという理由で、その使用を回避する学習者がいることも考えられる。市江(2020:28)が指摘しているように、「条件形式を用いない場合、どのように表現するのかという観点が見落とされてしまう」という問題点がある。そのため、今後は回避のことも考慮に入れ、条件表現の学習問題を論じることも必要である。

さらに、本研究では、作文コーパスを使用したため、話しことばにおける条件表現の誤用を検討することができなかった。これも今後の課題としたい。

参考文献

【日本語参考文献】

庵功雄(2001)『新しい日本語学入門　ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク.

庵功雄(2017)『一歩進んだ日本語文法の教え方 1』くろしお出版.

庵功雄,高梨信乃,中西久実子,山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

石川守(2013)「日本語条件表現『と』『たら』『ば』『なら』の導入」『拓殖大学日本語紀要』23,55-68.拓殖大学国際部.

泉原省二(2007)『日本語類義表現使い分け辞典』研究社.

市江愛(2020)『第二言語として日本語の条件表現を習得する過程で現れる通言語的影響－概念差に着目して－』東京都立大学大学院人文科学研究科博士論文.

市川保子(1997)『日本語誤用例文小辞典』イセブ.

市川保子編著(2010)『日本語誤用辞典　外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク.

稲葉みどり(1990)「順接・仮定条件文成立のためのモダリティ制約－日本人調査を通じて－」『ことばの科学』3,67-88.名古屋大学言語文化研究会.

稲葉みどり(1991)「日本語条件文の意味領域と中間言語構造－英語話者の第二言語習得過程を中心に－」『日本語教育』75,87-99.日本語教育学会.

于康(2011)「『中国語母語話者の日本語習得プロセスコーパス』『中国語母語話者の日本語誤用コーパス』の構築と中国語母語話者の日本語誤用研究のストラテジー」『エクス：言語文化論集』7,75-93.関西学院大学経済学部.

于康(2012)「『ねじれ誤用』について－中国語母語話者のテンス・アスペクトの誤用を手がかりに－」漢日対比言語学研究(協作)会・杭州師範大学日語系合編『汉日语言对比研究论丛（第 3 辑)』北京大学出版社,32-45.

薄井良子,佐々木良造(2013)「中国人学部留学生の句読点の誤用に関する研究」『関西学院大学日本語教育センター紀要』2,5-19.関西学院大学日本語教育センター紀要委員会.

小泉保(1987)「譲歩文について」『言語研究』91,1-14.日本言語学会.

王亜新(2011)『中国語の構文』アルク.

王崗(2013)「卒業論文にみる日本語表現の適切性について－中国・A 大学日本語科の事例－」『日本語日本文学』23,109-122.創価大学日本語日本文学会.

王麗英(2010)「中国語の複文について」『愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会言語文化』18,1-10.愛知淑徳大学言語コミュニケーション学科紀要編集委員会.

大河内康憲(1967)「複句における分句の連接関係」『中国語学』176,1-12.日本中国語学会.

大槻文彦(1897)『廣日本文典』勉誠社.

小川泰生(2001)「日本語と中国語の接続表現－条件を表す『たら』－」『中國學研究論集』

8, 112-97. 中国語学研究会.
小川泰生(2002)「日本語と中国語の接続表現－条件を表す『ば』－」『言語文化研究』28, 87-103. 広島大学総合科学部.
郭聖琳(2017)『中国人日本語学習者に対する条件表現の指導について』神戸大学人文学研究科博士論文.
金澤裕之(2008)『留学生の日本語は、未来の日本語　日本語の変化のダイナミズム』ひつじ書房.
金澤裕之編(2014)『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房.
鎌田修(2006)「KY コーパスと日本語教育研究」『日本語教育』130, 42-51. 日本語教育学会.
北村よう(1995)「中国語話者の作文における文接続の問題点」『東海大学紀要　留学生教育センター』15, 1-11. 東海大学留学生教育センター.
久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店.
グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
江田すみれ(2005)「主題の『なら』の表現する内容について」『日本女子大学紀要　文学部』54, 1-11. 日本女子大学.
国立国語研究所(1964)「現代雑誌九十種の用語用字　第 3 分冊」『国立国語研究所報 25』.
国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』. https://verbhandbook.ninjal.ac.jp. (最終参照日：2024 年 7 月 1 日).
小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房.
阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店.
坂原茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版社.
定延利之(2021)「パーフェクトらしく見える 3 つの『た』の過去性」益岡隆志監修, 定延利之, 高山善行, 井上優編『[研究プロジェクト]時間と言語　文法研究の新たな可能性を求めて』ひつじ書房, 15-40.
新村出編(2008)『広辞苑 第六版』岩波書店.
鈴木義和(1986)「接続助詞『と』の用法と意味」『国文論叢』13, 51-61. 神戸大学文学部国語国文学会.
ソルヴァン・ハリー(2006)「日本語学習者における条件文習得問題について」益岡隆志編『条件表現の対照　シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉　第 6 巻』くろしお出版, 173-193.
ソルヴァン・ハリー, 前田直子(2005)「『と』『ば』『たら』『なら』再考」『日本語教育』125, 28-37. 日本語教育学会.
田中寛(2005)「条件文と条件表現の体系的研究：序章」『人文科学』43, 277-304. 大東文化大学.
高梨信乃(1995)「非節的な X ナラについて」仁田義雄編『複文の研究　(上)』くろしお

出版,167-187.
陳昭心(2013)「テモの不使用についての一考察－中国語の母語干渉の観点から－」日本語/日本語教育研究会編『日本語/日本語教育研究 4』ココ出版,231-248.
杜紅陽(2022a)「中国語を母語とする日本語学習者における条件表現『と』の誤用に関する一考察」日本語誤用と日本語教育研究会編『日语偏误与日语教学研究第七辑』203-218.
杜紅陽(2022b)「中国語を母語とする日本語学習者における条件表現『ば』の誤用に関する一考察」『東アジア言語文化研究』4,100-109.日本語文法研究会.
杜紅陽(2023)「中国語を母語とする日本語学習者における条件表現『なら』の誤用に関する一考察」日本語誤用と日本語教育研究会編『日语偏误与日语教学研究第八辑』,96-113.
戸村佳代(1988)「条件を表さない『タラ』について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』3,1-14.筑波大学留学生教育センター.
豊田豊子(1977)「『と』と『～とき(時)』」『日本語教育』33,90-106.日本語教育学会.
豊田豊子(1978)「接続助詞『と』の用法と機能(Ⅰ)」『日本語学校論集』5,28-46.東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
豊田豊子(1979a)「発見の『と』」『日本語教育』36,91-105.日本語教育学会.
豊田豊子(1979b)「接続助詞『と』の用法と機能(Ⅲ)－後件の行われる時を表す『と』－」『日本語学校論集』6,92-110.東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
豊田豊子(1982)「接続助詞『と』の用法と機能(Ⅳ)－後件の行われるきっかけを表す『と』－」『日本語学校論集』9,1-16.東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
豊田豊子(1983)「接続助詞『と』の用法と機能(Ⅴ)－因果を表す『と』－」『日本語学校論集』10,1-24.東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
鳥井克之(2004)「再論　中国語の複文について－新しい中国語教学文法の再構築を目指して－」『関西大学外国語教育研究』8,75-97.関西大学外国語教育研究機構.
中島悦子(2007)『条件表現の研究』おうふう.
長友和彦,迫田久美子(1988)「誤用分析の基礎研究(1)」『教育学研究紀要』第二部(33),144-149.中国四国教育学会.
新田小雨子(2021)「小説における仮定条件複文の構文形式の日中対照研究」『聖学院大学論叢』34(1),105-117.聖学院大学.
仁田義雄(2009)『日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房.
日本語文法記述研究会(2003)『現代日本語文法 4　第 8 部 モダリティ』くろしお出版.
日本語文法記述研究会(2007)『現代日本語文法 3　第 5 部アスペクト　第 6 部テンス　第 7 部肯否』くろしお出版.
日本語文法記述研究会(2008)『現代日本語文法 6　第 11 部　複文』くろしお出版.
日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法 5　第 9 部とりたて　第 10 部主題』くろ

しお出版.
ニャンジャロースック・スニーラット(1999)「タイ語母国語話者による条件節『と・ば・たら・なら』の習得」『言語文化と日本語教育』18,25-35.お茶の水女子大学日本言語文化学研究会.
ニャンジャロースック・スニーラット(2001)「OPI データにおける『条件表現』の習得研究－中国語、韓国語、英語母語話者の自然発話から－」『日本語教育』111,26-35.日本語教育学会.
丹羽哲也(1993)「仮定条件と主題、対比」『国語国文』62(10),19-33.京都大学文学部国語学国文学研究室.
馬一川(2013)「中国人学習者向け初・中級日本語教科書の一考察－条件表現『と・たら・ば・なら』を中心に－」『外国語学会誌』43,291-304.大東文化大学外国語学会.
馬一川(2021)「『ト』と『時間表現』の用法連続性－『ト』と『トキ』を中心に－」『新世紀人文学論究』5,129-136.新世紀人文学論究編集委員会.
橋本ゆかり(2011)『普遍性と可変性に基づく言語構造の構築メカニズム－用法基盤モデルから見た日本語文法における第一言語と第二言語習得の異同－』風間書房.
蓮沼昭子(1993)「『たら』と『と』の事実的用法をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版,73-97.
蓮沼昭子,有田節子,前田直子(2001)『日本語文法　セルフマスターシリーズ 7　条件表現』くろしお出版.
堀恵子(2004a)「バ条件文の文末制約を再考する－日本語母語話者に対する適格性判断調査から－」『言語と文明』2,108-135.麗沢大学大学院言語教育研究科.
堀恵子(2004b)「4 種類のコーパスにおける日本語条件表現の用いられかた－高等教育機関での日本語教育をめざして－」『麗沢大学紀要』78,31-59.麗沢大学紀要編集委員会.
堀恵子(2005)「日本語条件表現の習得過程－中級学習者に対する縦断的インタビューから－」『日本語教育方法研究会誌』12(1),36-37.日本語教育方法研究会事務局.
堀恵子(2007)「日本語条件文の文末制約習得に及ぼす母語の影響－タイ語・英語・韓国語・中国語話者を対象とした文法性判断テストから－」『麗沢大学紀要』84,101-126.麗沢大学紀要編集委員会.
前田直子(1993)「逆接条件文『テモ』をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版,149-167.
前田直子(1995)「バ・ト・ナラ・タラ－仮定条件を表す形式－」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)　複文・連文編』くろしお出版,483-495.
前田直子(2009)『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究－』くろしお出版.
益岡隆志(1993a)「日本語の条件表現について」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版,1-20.
益岡隆志(1993b)「条件表現と文の概念レベル」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろし

お出版, 23-39.
益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版.
益岡隆志, 田窪行則(1992)『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版.
松下大三郎(1930)『標準日本口語文法』中文館書店.
水野麗子(2000)「中国語と日本語における『句読点』の対比」『明治学院大学外国語教育研究所紀要』10, 81-97. 明治学院大学外国語教育研究所.
三井はるみ(2002)「条件表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』科学研究費補助金基盤研究(B)報告書, 85-101.
宮部真由美(2011)「テクストからみた『～と』と『～たら』の複文－すでにあるできごとを描写する用法を中心に－」『文学部紀要』25(1), 33-64. 文教大学文学部紀要委員会.
宮部真由美(2017)『現代日本語の条件を表わす複文の研究－ト条件節とタラ条件節を中心に－』晃洋書房.
孟慧(2015)「中国語母語話者の日本語の事実条件文の習得について」『専修国文』97, 103-128. 専修大学日本語日本文学文化学会.
孟慧(2017)「上級の中国語母語話者による事実条件文の使用状況－YNU 書き言葉コーパスの調査を通して－」『専修国文』101, 25-46. 専修大学日本語日本文学文化学会.
孟慧(2021)『日本語の事実条件文－コーパス調査を中心に－』専修大学出版局.
森田良行(1967)「条件の言い方」早稲田大学語学教育研究所編『講座日本語教育第 3 分冊』, 27-43.
矢島正浩(2013)『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院.
山口堯二(1969)「現代語の仮定条件法－『ば』『と』『たら』『なら』について－」『月刊文法』1-2, 148-156. 明治書院.
葉懿萱(2009)『日本語の条件表現と時間表現』大阪大学言語社会研究科博士論文.
叶希(2018)『ビジネス日本語における条件表現－日本語教育の観点から－』郵研社.
リグス・秀美(2013)「現代日本語話者の条件表現の使い分け－機能言語学的視点からの一考察－」『日本語日本文学』23, 35-53. 創価大学日本語日本文学会.
李光赫(2011)『日中対照から見る条件表現の諸相』風詠社.
李光赫, 趙海城(2022)『条件文の日中対照計量的研究　KH Coder と SPSS を利用した可視化分析』ひつじ書房.
李在鎬(2019)「タグ付き日本語学習者コーパスの開発」『計量国語学』27(2), 60-72. 計量国語学会.
劉暁華(2013)「中国の日本語教科書における条件表現の扱われ方に関する一考察－基礎段階の教科書分析を中心に－」『日本言語文化研究』2, 37-50. 城西国際大学大学院.
劉暁華(2016)『多層的なネットワークモデルとしての日本語条件表現の研究－認知言語学の視点から－』城西国際大学大学院人文科学研究科博士論文.
劉月華, 潘文娯, 故韡著, 片山博美, 守屋宏則, 平井和之訳(1991)『現代中国語文法総覧(下)』

くろしお出版.
廖琳(2023a)『中国語を母語とする日本語学習者における「テ形」の誤用に関する研究－動詞を中心に－』広島大学人間社会科学研究科博士論文.
廖琳(2023b)「中国語を母語とする日本語学習者における『テ』と条件表現『ト』の混用に関する考察」『比較文化研究』150, 193-204. 日本比較文化学会.

【中国語参考文献】
高永茂(2023)〈表示逆接关系的「ても」的偏误研究〉《Hiroshima interdisciplinary studies in the humanities》18, 25-30. Graduate School of Letters, Hiroshima University.
刘月华, 潘文娱, 胡韡(1983)《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社.
苏鹰(2018)《语料库与日语复句习得研究 基于用法建构的语言习得理论》中国社会科学出版社.
谢晓明, 陈琳(2012)〈“的话”的话题标记功能及相关问题讨论〉《语文研究》125, 31-35. 山西省社会科学院.
邢福义(2001)《汉语复句研究》商务印书馆.
姚双云(2008)《复句关系标记的搭配研究》华中师范大学出版社.

【英語参考文献】
McGloin, NH. (1976-1977). The Speaker's Attitude and the Conditionals To, Tara, and Ba, *Papers in Japanese Linguistics*, 5(1-2),181-192.
Weinert, R. (1995). The role of formulaic language in second language acquisition: A review, *Applied Linguistics*, 16, 180-205.

【用例出典】
関西学院大学于康研究室
『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.12
http://yukang.org/index.html
国立国語研究所
『現代日本語書き言葉均衡コーパス　BCCWJ』
https://chunagon.ninjal.ac.jp/

謝辞

本論文は、筆者が広島大学大学院人間社会科学研究科教育科学専攻博士課程後期に在籍中の研究成果をまとめたものです。本論文の執筆にあたり、多くの方に支えられました。ここに記して、感謝の意を表します。

指導教員である佐藤暢治先生には、論旨の組み立てから、表現の推敲や修正に至るまであらゆる面で、終始丁寧であたたかくご指導いただきました。途中にくじけそうな時もありましたが、見守り続けてくださったおかげで、困難な時期を乗り越えることができました。佐藤暢治先生の入念なご指導がなくては、本論文の完成は不可能だったと言えます。学術雑誌へ論文を投稿する際にも、佐藤暢治先生より多大なご助力をいただきました。この場をお借りして衷心より深く感謝の意を申し上げます。

関西学院大学の于康先生、本学の高永茂先生、荒見泰史先生に、論文に必要な資料のご提供のみならず、有益なご助言もたくさんいただきました。于康先生には、研究資料として『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』の貴重なデータをいただき、共同ゼミや審査において、コーパス言語学や第二言語習得研究に関して多大なご教示をいただきました。高永茂先生には、言語学の立場から、考察の問題点のみならず今後の展望までも示唆に富むご指摘をいただきました。荒見泰史先生には、研究の方向づけについて建設的なご意見、そして温かい励ましをいただきました。ここでは、先生方に心より御礼申し上げます。そして、博士前期課程に進学して以来、8年に渡り今もなお大変お世話になっている大連理工大学外国語学院の孫蓮花先生に深甚なる謝意を申し上げます。

日本にいる間、多くの友人が応援、激励してくれましたが、全員のお名前を列挙することができません。ここでは、音律の不備や意境の浅薄はありますが、次のように、お名前から文字を借りて文章を作り、感謝の気持ちを伝いたいです。

季夏夜梦静，独游方壶山。苍峰倚瑞彩，碧溪翔文鸳。晨星伴月舞，鹿影隐泽间。
忽而丽风起，红叶遍满山。连霏变颜色，雨落仍欣然。芒鞋青竹杖，沙湖寻子瞻。

研究専念支援金と研究費については、広島大学創発的次世代研究者育成・支援プログラムに選抜され、経済的にご支援をいたたき、研究活動に集中することができました。厚く感謝を申し上げます。

本論文は、多くの方によるご指摘やご助言あってのものですが、お教えやご知見を十分に反映させることができなかった点もあると存じます。本論文に関するすべての責任は筆者自身が負うものであります。本論文の内容に誤りや不備などがございましたら、ご指摘やご批判を賜れば幸いに存じます。